昭和36年6月1日発行（毎月1回1日発行　第13巻第6号）昭和24年2月3日第3種郵便物認可　昭和34年12月11日国鉄東局特別扱承認雑誌第692号

月刊キリスト

6

〈わが信仰の生涯〉
福音と侠客道　西村関一
愛すること生きること　久山康
信仰に生きる　あるバタヤの生活記録
伝道説教　地獄の中の天使　菊池吉弥

青年文庫シリーズ（新書判）

幸福

北森嘉蔵著

90円 〒8円

現代人の中には幸福を熱心に求めながら、現実にはそれを喪失して、絶望的な苦しみにさいなまれつつ生きている人々がいかに多いことであろう。著名な神学者であり、また文学にも精通している著者がキリストにある真の幸福とは何かと平明なことばで読者に語りかける。

結婚の倫理

深津文雄著

80円 〒8円

「性の肯定」「性における人格」「結婚の準備」「誓いと思いやり」などと具体的な問題にふれながらキリスト教の結婚観とその倫理を学ぼうとする青年男女向良書。

——既刊——

キリスト教と文学　笹淵友一著　80円 〒8円

自然科学と時代思潮　杉浦義勝著　80円 〒8円

音楽とプロテスタンティズム　津川主一著　80円 〒8円

愛唱讃美歌百選

第11版・新書判・40円・〒8円

職場に……
学校に……
コーラス・グループに……

わが国で一般に広く愛唱されているさんびかを「讃美歌」「古今聖歌集」「リバイバル聖歌」中より100曲選んで曲と歌詞を載せ、それぞれに適切な解説を付し、各曲には略符もつけてある。

全ページ美麗カット入り。

発行
日本基督教協議会文書事業部
東京都中央区銀座4の2
振替東京 11679

発売
教文館
東京都中央区銀座4の2
振替東京 11359

救済の論理　北森嘉蔵著

北森神学と呼ばれる『神の痛みの神学』の展開の最たるものとして三たび世に問われる著者の代表作。その一貫した立場でなされる鋭い考察と純粋な信仰的自覚、その明晰な文章は片時も読む者の注意をそらせない。　新書判・140頁・160円・〒16円

北森嘉蔵著

聖書ところどころ 4版発売中	新書判 120円	聖書の魅力を端的に伝えその中心思想を示す書。
神学的自伝 I	全書判 250円	著者独自の神学を、内側から解き明かす最初の書
愛と憎しみについて —福音的実存—	B6判 250円	福音的実存を、だれにも理解できることばで語る

内村鑑三聖書注解全集　第11回配本　最新刊!

既刊10冊

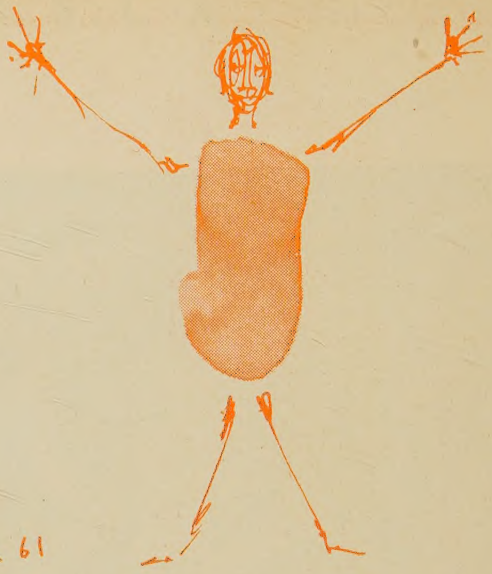
第13巻

エペソ書・ピリピ書
コロサイ書・テサロニケ書

B6判 252頁
定価 330円
〒 40円

編集・解説　山本泰次郎

東京中央区銀座4－2　**教文館**　振替　東京　11357



信仰に生きる　あるバタヤの生活記録……37
―最下層に生きるキリスト者―

クリスチャンストーリー　海峡を越える愛の招き……35
―韓国孤児の父・曽田嘉伊智さん―

聖句をめぐる座談会　権威に従え……(司会)石島三郎……46
―ロマ一三・一―

キリスト教のいろは　信仰とはなにか……島村亀鶴……50

人生相談室　死期を知らすべきか……(回答)気仙三一……54

書評　死と生をめぐって……鵜飼勇……45

讃美の泉6……津川主一……66

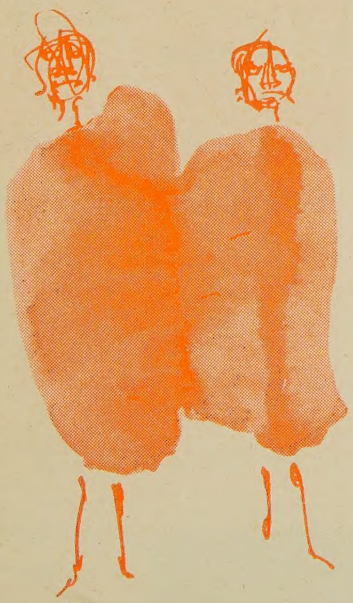
生きる意味について　連帯社会としての福祉国家……佐古純一郎……60

連載小説　夜警番の日記……椎名麟三……68

読者の声……74

表紙・藤城清治　カット・山中春雄

巻頭　悔い改めぬ日本人……正木ひろし…5
随想　ミッション・スクール……松岡励子…5
　　貧乏物語……青山四郎…6
伝道説教　地獄の中の天使……菊池吉弥…8
思いと祈り　奇蹟・収穫……シュラッター　井上良雄訳…12
愛することと生きること……久山康…14
新安保成立一年……渡辺信夫…54
不敬罪という亡霊の復活……新子一哉…58
わが信仰の生涯　福音と俠客道と……西村関一…20
読者の証し　なんでもないこと……佐藤健一…32
恋愛論　1・女性の魅力……高木幹太…28



聖書のさしえ (6)

辻　成史

第１図　「マイエスタス・ドミニ」ゴデスカルクの福音書（781～783）より

新刊

聖書は何を語るか

宮本武之助著

東京神学大教授の著者が東京女子大の学生に、キリスト教入門として聖書は現代に生きる人間に何を語っているかを講義したノートをまとめたのが本書である。

B6判
定価160円

5版

神と人間

キリスト教入門

高木幹太著

月刊キリスト連載のキリスト教入門13章と芥川文学における神をまとめた本書は発売いらい5ヵ月で5版をかさねて教会は勿論、農村や工場、学校でも好評です。

新書判
定価150円

日本YMCA同盟出版部
東京都千代田区西神田
振替 東京 二〇一九六

教会学校における

視聴覚教材の実際

岡村正二・尾崎恵子共編

定価150円 〒16

分級を生きかえらせ
あなたの創意をひき出し
教会学校・日曜学校を
一段と楽しくする！

＜図版・写真多数＞

視聴覚教材の役わり、黒板の使い方、略画のかき方ペープサートの実際、影絵劇の実際、人形劇の実際、聖書物語のためのフィギュアセット、分級のための絵ばなしの実際、フランネル・グラフの実際他。

東京都渋谷区神山町11 ヨルダン社 振替東京195934
福岡店～福岡市西新町西南大内　京都店～京都市左京区北白川山の元町病院内

3

4

第2図　「パントクラトールのキリスト」　チェファル本寺モザイク（12世紀）

第3図　「マイエスタス・ドミニとそれを拝する王候」　オットー三世の祈禱書（11世紀）より

第4図　「生命の泉」　バンベルクの黙示録（1000）より

初期キリスト教時代のローマの大バジリカ、あるいは華麗をきわめたビザンティンの会堂の、もっとも神聖にしておかすべからざる内陣の高みに描かれたのは、実にキリストの御姿そのものであった。それは、ときには万物の創造主（パントクラトール）（第2図）として、また再臨の審判者として、そしてさらに、超歴史的永遠者の栄光の姿（マイエスタス・ドミニ）として描かれたのである。

その規模を異にするとはいえ、そびえ立つ大会堂も、掌に収まる1冊の聖書も、ともに祈りと奉仕のあらわれであることにはいささかの相違もない。わたしたちは、すでに中世の福音書が、これら大会堂と同じく、入念な配慮のもとに、最高の真理の象徴に満たされていることを見て来た。4人の福音者もろもろの天の軍勢を従え、生命の泉のあふれる園の中に、堂々と御座に坐したもう主の姿は、これら象徴群の支配者なのである。写本の作者たちも、この栄光の主の姿をもって、福音の物語に先立つもっとも重要な1ページを満たすのに決してやぶさかではなかった。

ある時は花の咲き乱れる天の園に坐したまい（第1図）、あるときは天使を従え、五彩の舟形の大光背（マンドーラ）を背に、虹をふまえて君臨したまうこの主の姿は（第3図）、いずれも、その右の手をあげて祝福を垂れたもう。永遠の祝福にあずからんとするものは、この主の栄光にうたれ、おのずから地に倒れ伏すのである。

しかし、時を超越した主の栄光（マイエスタス・ドミニ）は、また同時に世の終りにあらわれたもう主の栄光そのものである。この深い信仰の真理を、写本芸術家は正しく理解していた。世の終末にあらわれたもう主（第4図）は、まったく同じ栄光の姿として、恐れまどうものに祝福を垂れたもう。その御座からは渇くことなき泉が湧き、園の木々をうるおすのである。

これまでの回をもって、聖書の物語そのものに先立つ重要な図像を幾つかとりあげてきた。次回からはいよいよ、聖書の文（テキスト）そのものと結びついたさしえを取り上げていこう。

2

月刊 キリスト・6月号

巻頭随想

悔い改めぬ日本人

正木 ひろし

最近、名古屋高裁の小林登一裁判長が、四八年間、無実を訴えつづけてきた〝日本の厳窟王〟こと吉田石松さん（八一）に対し、「再審を開始する」というアリガタイ決定を与えたことは、ひとり吉田石松さんだけの悦びでなく、全日本国民に、一つの大きな明るい悦びを与えたようだ。

〝あの男は、どうも無実にちがいない〟という声が、ここ数年間日本国中にひろがっていた。真実は、知らぬまに人の心を打つのである。

吉田石松さんが主犯に仕立てられた問題の強盗殺人事件のあったのは、大正二年八月であった。

裁判は超スピードで実行され、翌大正三年のうちに、第一審、第二審、第三審までがパタパタとすまされてしまった。

第一審、死刑。第二審、無期。第三審、上告棄却。

以来、吉田さんは、法律上、許されたあらゆる手段をつくして、無実の刑罰からまぬがれようと努力した。

当時の司法大臣に対し、訴願二回。その後、再審の訴え四回。だが、それらのことごとくが効を奏しなかった。刑事訴訟法の上で、再審の請求には、新しい反証の発見が必要とされている。吉田さんに、新しい反証がなかったわけではない。

昭和一〇年、恩赦によって、吉田さんは刑務所生活二三年目に仮出所した。さっそく二四年前に彼に罪をきせて、自分たちはウマくやり、すでに出所していたふたりの真犯人を探す仕事に取りかかった。

当時、東京で司法記者をしていた青山与平氏と藤田幸男氏は、吉田さんの無実を知って同情し、新聞社の調査網を利用し、ふたりの偽証真犯人の居所を次々に探し出したばかりでなく、吉田氏をそこへつれて行ってやった。各偽証真犯人は、驚き、かつ恐れいって、右の記者が立ちあった上で、吉田さんあてに、謝罪文を書いた。これほど有力な無実の証明資料はないはずである。ところが、裁判所は、立ちあった新聞記者を調べもせずに、「威迫によって書かせた疑いがある」という一方的の屁理屈をつけて、吉田さんの切なる再審の請求をはねつけてしまった。

それから二五年もたった今日、小林裁判長が、再審開始の理由ありとするところを、その当時の裁判官たちにわからぬはずはなかったのである。それにもかかわらず再審を開始しなかったのは、日本人が、〝悔い改め〟を恥とし、その価値を知らないからだと思う。

わたしは戦後、十数件の冤罪事件を扱ったが、その大部分は、だれがみても、一見明白なる冤罪の証拠があるものであった。しかるに実際上の解決には、いずれも数年または十数年かかっているのだ。

その理由は、官憲が、いわば虚妄なる権威を擁護するのに急で、なかなか自己の陣営内の非を認めようとしないためであった。

わたしはマタイ伝第三章の中で洗礼者ヨハネが、「悔い改めよ、天国は近づいた」と言っている意味を、非常に意味深く考える。そして、日本の社会が、いつまでたっても、地獄の相を脱しないのはやはりこの〝悔い改め〟というものの価値が十分に一般日本人に理解されていないためと信ずるものである。

（弁護士）

歴史にみる ミッションスクール

松岡 励子

さきごろ、横浜の蒔田に創立八〇年を誇るミッションスクール成美学園の、学校史劇の制作を手伝わされ、さまざま興味深い事実をしることができた。

信教の自由を守る会

去る４月24日、東京・銀座教会において、「信教の自由を守る講演会」が開かれた。植村環、桑田秀延、佐古純一郎、正木ひろしの四氏が、憲法に保障されているにもかかわらず、現在おびやかされつつある信教の自由について語った。写真は桑田秀延氏。

大阪にキリスト教書店が開店

４月27日、大阪駅から歩いて約５分ほどの場所に、大阪聖書協会ビルが建設され、祝賀会が開かれた。同時に、そのビルの二階に設立された大阪キリスト教書店の開店礼拝も行なわれた。

でまかなわれ、信者に雇われているのだから、献金する信者の最低生活者よりも、ひくくなければならないというのなら、理屈は通っているが、それではたまったものではない。

わたしの家は、典型的な貧乏牧師暮しであった。今考えてみれば近ごろの生活保護を受けている人人にも、はるかに劣るものであった。朝食は麦飯に漬物だけ、昼と夜は油揚げか野菜の煮つけ。肉や魚は月のうち数えるほどであった。さぞ母親は苦しかったことであろうと思うが、わたしたち子供にとっては、そんなことはちっとも苦にはならなかった。

そのころ、わたしの家は高知にあった。小さな借家で、日曜になるとそれが講義所になって、家中開放しなければならなかった。近所の子供たちは、わたしたちをつかまえては「アーメンソーメン」とはやしたてた。しかしそれはおやじの仕事のせいで、しかたがないと思っていたので、あまり気にはならなかった。

小学校は下知尋常小学校で、かなり風変わりなところであった。教室には小さい黒板がかけてあって、方言と標準語がならべて書いてあった。「オンシ＝きみ、オラ＝ぼく」というぐあいであった。先生は熱心に標準語を教えてくれた。「オンシらは、ネヤと言われんぞネヤ」

お昼になると弁当箱を開いた。まわりの友だちは、玉子焼や魚やおいしそうなおかずをたくさん持ってきたが、わたしの弁当は、黒い麦飯がほとんどで、漬物のほかに、野菜の煮つけが、申しわけみたいに隅におさまっていた。なるべく友だちに見られないようにして食べたが、それも別にたいして恥ずかしいというのでもなかった。けっこうおいしいと思っていた。

近所の子供が、三輪車に乗っているのがうらやましくて、父に無心をしてみた。父は悲しそうな顔をしながら、「そのうちに買えたら買ってやろう」と言った。悪いことを言ったと気づいたので、それっきりあきらめて、ひとりで裏の竹やぶから竹を切ってきて、かまぼこ板をしばりつけて竹馬を作って遊んだり、近所の小川に魚を釣りに行ったりして、なるべく費用のかからない遊びにふけった。兄は魚釣りがじょうずで、ひまさえあればうなぎやふなを釣りに出かけていたが、いつもバケツにかなりの獲物を持ち帰って、食卓にたんぱく質の補給をして、母親を喜ばせていた。

いちばん簡単な遊びは、陣取りや鬼ごっこであった。近所にあった八幡宮の境内で、腕白仲間を動員しては、夕方暗くなって見えなくなるまで、百日鬼という鬼ごっこをして、時間をつぶしていた。これは前日の最後の鬼が、次の日に鬼をつとめて、遊びを継続するという趣向で、わたしは餓鬼大将にまつりあげられ、大いに得意であった。だから、三輪車を持っていなくても、別にコンプレックスは感じなかった。しかし着物を泥だらけにして帰るので、母親は決していい顔をしなかった。

夕食になると、家族全部がそろって、食卓をかこんだ。貧乏人の子だくさんという通り、男の子ばかり七人、女はいちばん上の姉ひとりであったので、なかなか壮観であった。父親の食事の感謝のお祈りがすむやいなや、間発を入れず、子供たちはサッと手をのばして漬物を奪いあい、大きな漬物どんぶりは、たちまちからっぽになった。あまり期待できないおかずよりも、母親手作りの自慢の漬物のほうが、よほど魅力があったからである。その漬物も、裏庭の家庭菜園の収穫品から作ったもので野菜もほとんど自給であった。もちろんこれは経済的理由によっていた。食卓では、よく父親が不潔な話をすると、母親がいやがってこれをたしなめた。わたしたちはそうした風景をながめながら、麦飯と漬物をおいしくかき込み、楽しい夕食のひとときをすごした。

極貧の牧師の家庭でも、子供たちはけっこう幸福に、楽しく生活してきた。もちろんそうでなければたいへんだが。

（日本ルーテル神学校教授）

学校の歴史そのものの中には、たいして興味をそそるものもなかったが、そのときどきの時代の流れの中で、ミッションスクールがいかにあったかという問題は、日本の歴史の中で、キリスト教がいかにあったかということとかね合わせて、非常におもしろかった。成美学園（創立時は横浜英和）の創立は明治一三年であったが、当時の横浜の女子教育は、ほとんどミッションの手にゆだねられ、さきにフェリス、共立二校の創立をみていた。横浜は土地がら混血児の問題に悩んでいた。ことに欧米との交わりを多くもつようになった当時としては、ちょうど終戦直後のような、外人と日本婦人との間の風紀の乱れの生んだ結果が、手もつけられずにあったらしい。そこへ一番に手を染めたのが外国伝道者であり、ミッションスクールの創立も、イエスの教えを布教するとともに、実はこうした婦女子の収容と教育に、その目的があったのだ。成美もその例にもれず創立し、当初は混血児も、かなり含まれていた。また当時は、女子教育に対する関心が一般に薄く、したがって入学者も数に満たないので、教師が門前に立って、道行く娘をつかまえては、入学をすすめたという事実も、そのころのミッションスクールの歴史に残っている。おもしろいのは、東京のある英学塾で、娘が学校へ行くことを世間でよくいわないので、男装して一年間通いつづけ、教師もわからずじまいで通したという挿話も残っていた。

しかし、明治の欧化主義も頂点にいたり、二二年憲法発布とともに欧化主義に対する反動の時期が到来し、翌二三年教育勅語の渙発は、国家主義の風潮を生み、文部省は欧米的な教育に対して圧迫を加え、当然キリスト教教育は攻撃を受けはじめた。成美学園もこの余波をうけ入学者を減らされている。成美ばかりではなく、他のミッションスクールもかなり影響を受け、運営に支障をきたす学校もでてくるしまつであった。明治学院が中学部を廃止、青山学院が小学部、幼稚園廃止のやむなきにいたったのも、たしかこのころときいている。

その後明治、大正、昭和と、日本が次第に軍国時代へ進むにつれて、ミッションスクールの歴史も目に見えてゆがめられていくのだ。ちなみにその学校目的をみてもわかる。昭和初期には「キリスト教主義に基づき、徳性の涵養につとめ云々」とあったのが、三年後には「教育勅語の聖旨を体し云云」と書き加えられ、さらに数年後には、「教育勅語の聖旨を体し云々」の項が先に記され、あとに「キリスト主義に基づき日本女子に枢要する教育を施す」となっていくのだ。また校名の英和が成美と改めざるを得なくなるのもこのころだが、当時の日本の風潮と思い合わせてまことに興味深いものがあった。一つの学校の平凡と思われる歴史の中にも、日本の歩みの正常と異常が実にはっきりと反映している。校則をぬりかえ、かきかえていかなければならなかった学校当局者の気持ちは、おそらく無我夢中で、そこには存続していかなければならない焦燥感でいっぱいであったと想像できるが、しかしふり返って考えれば、それは実にいたましく悲しい。

八〇年の昔、ともされた信仰の灯が、明治、大正、昭和の三代を経てなお燃えつづけていることはまことに偉業といわなければならないだろう。しかし、どうかわたしたちは、この灯を正常な中で燃やしつづけたいと思う。灯を消さないために、看板の塗りかえをしなければならない異常な世を憎みたい。一ミッションスクールの歴史を見て、このごろこんなことをしきりに思っている。

（劇作家）

貧乏物語

青山　四郎

どうして牧師は貧乏でなければならないのだろう。生活費が献金

を語っている。ことに彼の芸術の集大成である「地獄の門」の前に立つと深い宗教的な感銘を受ける。その地獄の凄惨さに胸がむかつくような嫌悪を感ずる。

その地獄の扉の上でうずくまりながら、渾身の力をこめて考えている人間がいる。これがこの作品の焦点である。彼の背後にはさまざまな人のさまざまな人生がある、彼はそれを背に地獄を見おろしながら考えている。彼はごまかさず、目をそらさずじっと耐えて地獄を見て考えている。ロダン自身の制作の意図がどこにあったか、それはわたしには問題でない。ただ彼の作ったこの人間の像が、わたしを感動させる。わたしはこの「考える人」のように地獄をまともに見、考えることができるだろうか。このように見、考えて、なおわたしに救いがある、幸福があると言い得るだろうか。

わたしはなおも「地獄の門」を凝視する。するとその地獄の混沌の上を右の扉の上方にひとり、左のほうにひとり、羽音も高く天使が飛んでいる。ロダンの世界でも救いは天から来る。天の祝福のほかにこの世界に救いがないと語っている。ダンテのインフェルノ(地獄)には天使はいなかった。ただ罰があるだけであった。しかしロダンの地獄には天使がいる、そして救いがある。わたしは、人間の目にありありと地獄があらわれるとき、そこに羽ばたく天使の姿も現われると思う。それなればこそ、考える人は耐え得るのだ。もし、そうでなしにわたしたちがまのあたり自分の罪の現実を見たならば、パスカルが言ったように気を失うであろう。ルターが告白したように「半時間だけでも、否十分の一時間続いても、人は全く堪え入り、そのすべての骨々は焼けて灰になってしまうと思う」だろう。

「地獄の上の花見」と一茶は歌ったが、その花見は地獄を忘れるための阿片であるにすぎない。花見をしても、地獄は消えてなくならない。地獄の中で天使の音信をきく道はないものか。地獄の底までさしてくる光というものがないであろうか。

わたしは、山上の説教の冒頭に記されている九つの祝福のことばをきくごとに、天からの祝福をわたしの耳に聞く思いがする。ことにその最初の祝福は、地獄の底できく天使の羽音のようである。

「幸福なるかな、こころの貧しい者、天国はその人のものなり」

こころの貧しい者とは、霊の貧しい者ということである。霊とは神との交わりのことである。それが貧しいとは、神との関係が貧しく、とぼしくなってしまうことである。神を失った人間、今日のことばで言えば、人間失格者ともいうべき人間のことである。神との交わりがあるかぎり、それが濃くゆたかであればあるほど、人間が生々とし、充実して生きられる。しかしそれが貧しくなれば、人間がだんだん非人間化してゆく。光を失って、闇が濃くなってゆく。神から最も遠いところにいる人間、どんな光もささない地獄の底にいる人間、それが霊の貧しい者という意味である。

それがなぜ、幸福なのか、天国はなぜその人のものなのか。そういう者のために、主イエスがやって来たからである。こんな人間の住んでいる地獄の底まで主イエスがやって来たから、もう天国は、その人のものであるというのである。聖書のいう

伝道説教

地獄の中の天使

菊池吉弥

去年の春から、上野と浅草を結ぶ下谷車坂に住むようになって、二つの盛り場に遊ぶ人の多いのに驚いている。どこから集まってくるのかこんな人、駅も、上野も、浅草も人の山、人の波である。ことに上野の駅のこみ方はひどい。春は観光客、夏は山へ行く人、冬はスキーに行く人、駅からあふれ、外まで長蛇の列である。ことに土曜、日曜はたいへんである。よく遊ぶようになった。レジャー・ブームというのか、余暇を思いっきり楽しむようになった。

夕方電車に乗れば、仕事や会社の帰りに一杯どっかでひっかけたのだろう、赤い顔がずいぶんめだつ。七時、八時になれば町に酒のみがあふれているような感じがする。それが若い人に多い。映画も野球場も競輪も盛り場も人ではんらんしている。その娯楽はほとんど刺激で、こころよい刺激、はげしい刺激、しびれるような刺激、さまざまである。しかしそれはいよいよ激しく、露骨で強くなっていく。尋常一様では満足できなくなっている。今日の大衆娯楽は刺激の上になり立っている。いわゆるスポーツ、セックス、スリルである。しかし刺激的快楽のあとは淋しい。疲れといいようのない虚無感が残るだけである。それが恐ろしさにさらに強く激しい刺激を求めてゆく。こうして刺激はいよいよ変態的なものに移って、人間を非人間化してゆく。浅草のストリップ劇場の前に並んでいる立看板など、エロティシズムを通りこして、残酷な感じがして見て通れない。パチンコ、競馬、競輪などに群がる人は狂っているようにみえる。生きる意味も充実感も失った現代人は、刺激にだけ頼って生きているようだ。大衆娯楽の時代は、大衆が生の意味を失った時代、生の充実をその瞬間にしか感ずることのできなくなった時代である。

わたしは少年時代に読んだ夏目漱石の文章の中にあったシェレーの詩の一節をときどき思い出す。「今笑うと雖も、悲しみその底にあるべし」その悲しみは、もう現代はロマンティックなものでなく、ニヒリスティックなものである。一茶の「世の中は地獄の上の花見かな」である。

わたしはときおり上野の近代西洋美術館に行く。ここはロダンの彫刻の傑作がそろっている。その作品はどれも彼の人間観

たのである。

やがてわたしは、その予感を確かめようとして求道生活にはいった。そしてその求道生活で知ったものは、自分の不徹底であり、不まじめであり、罪の意識の欠除している自分自身であった。求道は、堅固な求道心を前提とする。しかしわたしは、その自分自身に絶望した。自分自身のまじめさを信ずることのできぬ者に、求道ということが可能であろうか。罪の意識を持つ能力のないものに、救いということがあり得るであろうか。

ちょうどそのときであった。わたしがマタイ伝五章三節のこころの貧しい者への祝福のことばを思い出したのは。わたしはまさに、主イエスのいうその人であった。このとき、このことばと同時に、十字架上の主イエスの執成の祈りが心の耳鼓を打った。

「父よ、彼らをお赦しください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカ二三三四)

この祈りは、まさにわたしのための執成である。祈りである。もしわたしに求道とか、信仰とかいうことが可能になるとすれば、この祈りのほかあろうはずがない。わたしはこのとき、主イエスの宗教が、闇の地獄の中にいる者への福音であることを知った。それは信仰の不可能なところに、信仰を可能にし、信仰を創造してゆく力である。

このとき以来、立つも倒れるもこの主イエスといっしょという覚悟ができた。この人のほかにわたしの立場も希望もないからである。歎異抄の中の親鸞が、師の法然に言ったように「たとひ主イエスにすかされまひらせて、信じて地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自余の行をはげみて救わるべかりける身が、福音を信じて地獄におちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」とわたしは思ったのである。

この十字架上の主イエスの執成の祈りをきいたとき、わたしは、地獄の中で天使の訪ずれを受けたような喜びを感ぜずにはおられなかった。救いに価しない人間を殺しもしないで、自分の生命をかけて救う方があると知ったとき、神のあるなしはわからなかったけれども、世の中がパァッと明るくなった。わたしはこのときから、主イエスに自分の信仰の焦点をあわせて歩くようになった。そのときから今年まで三〇年、わたしは一日もたいくつせずに生きてきた。喜びにも悲しみにも主イエスとともに充実した生を生きてきた。それがわたしのいつわりのない告白である。

まことの幸福は、生の充実感にあろう。それは、快楽の刺激からでなく、主イエスに在る信仰から生まれる。主イエスとともに在るとき、その苦しみも、全人類の苦悩を負うた彼にあってあふれるであろうけれども、その喜びも彼にあってあふれるのである。主イエスとともに在るにまさる幸福はない。この幸福を、わたしどもは、神的なものであるがゆえに、祝福というのである。

(下谷教会牧師)

福音（エヴァンゲリオン）というのは、そのよろこばしいおとずれのことなのである。わたしがこの音信に接したのは、やはり地獄の底にいたときであった。

わたしの一七のときである。わたしは料理屋の家に不倫の子として生まれた。ものごころのついたころからわたしは日陰者であった。わたしのからだの中には罪の血が流れている、不浄の商売でわたしは育ったという意識がわたしにつきまとって離れなかった。母はわたしをかわいがってくれた。しかしわたしは母を尊敬することはできなかった。いったいに人間を尊敬するということも、信ずることもできなかった。それに一七才のころ、わたしは叔母の家にあずけられ、母からは一年有余も音信がなかった。

路傍伝道が縁で、わたしは教会をたずねた。ちょうど日曜日の朝で、日曜学校をやっていた。極度に近視の先生が高等小学校の生徒に創世記一章一節の天地創造の話をしていた。わたしはこのとき、先生に質問した。

「先生は、神が天地万物と人間を創造されてああよいと言われたと言われましたが、先生は今でもそう思っているのですか」

先生は「そうだ」と答えた。わたしはこのとき、

「先生のように幸福な人なら、そう言えるでしょう。しかし、わたしのような人間がこの世の中にいることは、この世は神の創造されたものでない証拠です」

と言った。こんな反抗児を先生は幾度もやさしく迎えてくれて、やがて祈禱会にさそった。わたしはその集会の熱狂的なのと「この菊地青年を救いたまえ」という祈りに、軽蔑と反感でいっぱいになった。しかし、この祈禱会にわたしのために涙でほおをぬらして、祈ってくれる盲老女があった。わたしはその涙に驚いた。自分の一七年の生涯にそのような人はなかった。わたしは自分の傲慢を恥じた。そこに手をついて、この人の祈りをきいているうちに、この人の前に立って祈りをきいているかたが存（いま）したもうのではないかというおそれが湧いた。そのおそれが、わたしの全身に肉迫した。その方の存在がわたしの罪を激しく責める。その恐ろしさ、それは、じっとしていることのできぬおそろしさであった。わたしは思わず叫んだ。

「神さま、もしあなたがいたもうなら、わたしを救ってください。もし救うに価しない人間だと思うなら、わたしを殺してください。わたしは生きていてなにもおもしろくないのですから、なんの希望もないのですから」

こう叫んでしまって驚いた。これがほんとうのわたしであったのだ。今が今まで、わたしが、こんなわたしのこころの奥底にあるわたし自身にも気づかぬわたし自身をさらけ出すとは思わなかった。なまなましい神の恐ろしさと罪責感がいっしょになって、わたしは自分自身のほんとうの姿を知ったのである。わたしは神を感ずると同時に、自分が絶望の中にいることを知った。それは、自分の魂の中にある地獄の発見であった。その地獄が、それを知らしめた神に向かって叫ばせたのである。もちろんわたしは神の存在を信じてはいなかった。しかし、盲老女の涙の執成（とりなし）の祈りをきいているうちに、神がいましたもうかもしれぬという予感におそれた。そのおそれがわたしを祈らせ

らです。あなたの力を示すということが、あなたのものである全キリスト者の務であり、あなたのみ名を呼ぶすべての者の聖なる義務です。どうか、わたしにも、信ずる者としてあなたの証人であることを許してください。アーメン。

収穫

良き地に播かれしとは、みことばをききて悟り、実を結びて、あるいは百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍に至るものなり。
（マタイ伝一三・二三）

ここに述べられている者たちはみな、みことばを聞いて理解し、実を結んだのである。彼らは、みことばを、自分の心の中にとじこめてはおかなかった。みことばは、彼らの外に飛び出して、他の人人のところに達したのである。みことばは、彼らを塩とし、この塩は他のものを塩つけした。またそれは、彼らのうちに光をともして、この光は、他のものを照らした。しかし、この光が照らした周囲の世界は、一様ではなくて、あるものは大きく、あるものは小さかったのである。それゆえに、イエスは、まかれた種子から生じた穂にはさまざまの大きさがあって、その穂が持っている種子の数も同じではないと、語りたもうたのである。しかし、百の種子を持つ穂も、三十の種子を持つ穂も、種子まきが収穫に至り種子をまく人がその蔵を収穫物で満たすためには、なくてならないものである。

このみことばには、イエスの大きな恵みが語られている。わたしは、自分の存在と行為を、この恵みの光の中に置く。わたしは、百倍の実を結ぶような者ではない。わたしの生活している世界は、狭く限られていて、わたしが実り豊かな交わりを結ぶことのできる人人は数少ない。しかし、どのような穂も、収穫に役立つのであって、全収穫高を保持するためには、なくてはならぬものである。主は、百倍の実を結ばぬ者を、叱責したまわない。それは、彼のみ国には、偉大な者たちのためにも卑小な者たちのためにも、席があるからである。そして、み国における卑小な者たちの市民権も、いつも効力を持つ法だからである。もしそうでないとすれば、彼のみ国は、神のみ国であることをやめて、自分の偉さを主張する偉大な者たちの勢力圏となってしまうであろう。偉大な者たちと卑小な者たちをそのみ国に集めたもうことによって、主は、偉大な者たちを驕慢から守り、卑小な者たちをその意気阻喪から守りたもう。百倍の実を結ぶ者も三十倍の実を結ぶ者も、みな保護を必要とする。すなわち、前者はその強さのためにうぬぼれぬように保護されねばならず、後者はその弱さのために不活発にならぬように保護されねばならない。われわれが自分に満足しているかいないか、自分の仕事を愉快にしているかあえぎながらしているかというようなことは、重大なことではない。主がわれわれの中にまきたもうた種子が実って、主を讃美する収穫をもたらすということだけが、われわれの熱意の正しい目標である。

主よ、あなたのみことばは、あなたのために実る穂を生み出します。それは、あなたがみことばによって、わたしどもをあなたの子らとし、み手の業であるあなたの教団としたもうからです。わたしは、あなたのみことばを、道の光として受けいれます。アーメン。

〈思いと祈り〉

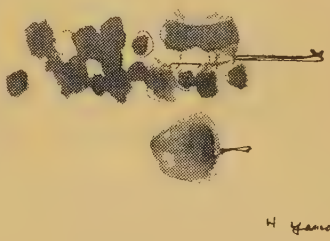
シュラッター

井上良雄訳

奇蹟

主よ、みこころならば、われを潔くなしたもうを得ん。

（マタイ伝八・二）



癩病人を助けたもうイエスの力は奇蹟である。しかし、癩病人のしていることも、輝かしい奇蹟であり、神の栄光のわざをあらわすものである。癩病人が沈黙して、なんの意志もなく自分の運命に身をゆだねる場合には、それは奇蹟ではなくて自然である。彼がその絶望の中にあって、わらをもつかむというように自分を助けてくれそうなものによりすがる場合にも、それは奇蹟ではなくて、やはり自然である。不思議なうわさが口から口へと伝わるのを聞いて、彼があり得べからざることに手を伸ばし、「あなたはわたしを潔めることがおできになります。どうか潔めてください」とはげしい祈願をこめてイエスを呼び求める場合にも、それはやはりまだ自然という限界の中にとどまっている。そこにはただ人間的な感情と、欲求が働いているにすぎないであろう。

ところがここで癩病人は、「みこころならば、われを潔くなしたもうを得ん」と、言っている。これは信仰であって、疑いではなく、反抗ではない。祈願であって、命令ではなく、嘆息ではない。信仰というものは、われわれの目が神に向けられるという仕方以外の仕方では、決して生まれない。ところで、信仰が奇蹟であるのは、そのようにわれわれの目が神に向けられるのが神がわれわれの目をご自身の方へ向けたもうときにだけ起ることだからである。人は、神によって知られるという仕方以外の仕方では、神を知ることがないのである。そこで、完全な屈服が起る。すなわち、「あなたはわたしを思いのままにされます。あなたのみこころがわたしの運命を決定するのです。あなたからあなたのみこころを奪い取る者は、だれもありません。あなたが欲したもうときにだけ、わたしの求めていることは起るのです」と、われわれは言う。しかし、そのような屈服とともに、完全な信頼が生まれる。「あなたが欲したもう場合には、あなたはなしえたまいます。あなたの意志はなにものによっても拘束されません。あなたの助けには制限がなく、あなたの愛が無力に陥ることはありません」と、われわれは言う。

イエスがこの癩病人をご自身の証人と呼びたもうたのは、単にイエスのいやしの力が彼において示されたからではない。イエスの助けを得る者がだれであり、信ずる者とはだれであるかということが、祭司たちにもすべての者たちにも明らかに示されたからである。

愛する主よ。あなたの証人とは、あなたが信仰を教えたもう者たちです。彼らが示すのは、自分自身の力ではなくて、あなたの力です。なぜかと言えば、彼らはあなたの恵みによって生きているのであって、自分自身の能力によって生きているのではないか

ているのも、青春が人生において、愛の可能性に最も富んでいるように見えるからである。

しかし愛の可能性というときに、普通わたしたちに、それを愛の機会というほどの意味に考えている。愛する力が自己にはたしてあるかどうかといった主体的な反省をもつものは、ほとんど存在しない。愛する力は生まれながら豊かに所有しているのであるが、ただその力を発揮することのできる対策とめぐり逢う機会に恵まれるかどうかが、愛の可能性の問題として考えられているのである。老嬢リゾンが身もだえしてすすり泣いたその絶望も、自己に愛する力が涸渇しているために絶望したのではなく、花の盛りをすぎたのちには蝶の訪ずれがとだえるように、青春をすぎた老嬢には愛の機会がとだえてしまったということへの絶望であったのである。

しかし愛についてのこのような考え方は、人生の経験の深まるにしたがって、維持することのできぬ否定的事実に出あうのである。一度でも人を深く愛する機会をもったものは、むしろ愛の破綻に深く傷ついて人間の孤独にめざめるのが人生の姿なのである。そのことは愛の豊かな可能性につつまれているはずの青春が、逆に孤独の経験から始まることによっても、証されているようにみえる。青春を通りすぎるときだれでもがもつ「心の歌一」というものは、すべてこの孤独の表現ならぬものはないといってもよい。

人に告ぐる悲しみならず秋草に息を白じろと吐きにけるかも

わたしは学生のころ、この赤彦の歌に心を打たれたことがあった。それは親しいはずの自己の周囲の人々が、単なる路傍の人々にすぎぬかのように、遠のいていく経験をしていたからである。

啼くこゑは悲しけれども夕鳥は木に眠るなりわれは寝なくに

この茂吉の歌も、そのころわたしの心を離れなかった歌である。夕べ蜩につくときに啼く鳥のこえは、朝がたさえずっている鳥のこえとちがって、どことなく淋しく悲しい声音をもっている。しかし、夜がふけるにしたがって夕べ悲しいこえで啼いていた鳥も、木木の茂みにまどかな眠りのときをすごしているのに、自分だけは人生の悲しみに眠りを奪われて、夜がふけわたっても眠られないでいる。この歌はそういう意味のものであるが、このような孤独を歌った歌が、わたしたちにとって親しいものとなってくるのである。結局孤独へのめざめが人生へのめざめとなるのである。そして孤独の苦しみに打ちひしがれたものは、いっそう愛への渇望を燃やすのである。

人々は通常この孤独の解消を恋愛と結婚において求めている。「恋愛は性交の欲望以上のあるものである。それは生涯の大部分を通して多くの男女を苦しめる孤独からのがれる主要な手段である」というバートランド・ラッセルの『結婚と道徳』の中のことばは、肯定せずにはおれないものであろう。人生は孤独なものであるが、恋愛において自己の本身ともいうべき異性のひとりとめぐりあい、結婚において、それが生涯の配偶者として決定されるときに、人は孤独から脱することができる。人々は通常そのように考えているのである。しかし人々が恋愛と結婚にかけているこの期待は、はたして十分に報いられるものなのであろうか。むしろその反対の事実に出あうことが多いのではあるまいか。たとえば、あの老嬢リゾンに悲しみの発作を起させるほど幸福にみえていたジャンヌも、結婚するとともにかえって深い人生の孤独に直面するのである。ジャンヌは新婚旅行の途上で、「自分と夫とのあいだに一枚の幕のようなものがある障害物が、あることを感じ」、「同時にふたりの人間というものは決して魂の中まで、心の底まで理解しあうものではないということ、仲良く並んでいて、ときには抱きあうことがあっても、一つのものにはならないということ、そして人それぞれの心そのものはこの人生を通じて永遠に孤独であるということを、彼女は生まれてはじめて思い知った」のである。これは決してジャンヌに特有の経験

愛することと生きること

久山康

愛することと生きることはもちろん同一のことがらではない。むしろ愛することは生きることの一つの働きにとどまって、生きることはそのほかにも豊かな働きと領域とをもっているのである。たとえば、知識を増し技能を磨き、ものを作り、社会的に活動するということも、生きることの働きである。そしてそういう働きの促進のほうが一般には重要視されているようにみえるのである。小学校から大学に至るまでの教育をかえりみても、そのことを痛感せずにはおれない。したがって、愛することは生きることの核心をなす働きではなく、むしろ生の主観的ないろどりにすぎないものとして無視されやすいのである。

しかし、人生のある瞬間がやってくると、そういう一般的な考え方は崩れ去って、愛することと生きることはほとんど同一のことがらとして痛烈に経験されるのである。わたしは学生のころモーパッサンの『女の一生』を読んでいて、それを強く感じたことがある。周知のようにこの小説は男爵の令嬢ジャンヌと青年子爵ジュリアンとの婚約をもって始まり、美しいノルマンジーの自然の中で楽しい婚約生活が展開されるのである。そしてその中にこういう一つの事件が挿入されている。夏のある月の美しい夜、ふたりが広い芝生を散歩して家に帰ってくると、ジャンヌのきゃしゃな靴が夜露にびっしょり濡れていた。それを見てジュリアンは思わず、「あなたのかわいい小さな足は冷たくはありませんか」と、やさしくきくのである。するとそれをかたわらで聞いたジャンヌの叔母で老嬢のリゾンが、突然編物の毛糸の玉を膝から落として、顔を両手の中に埋め、激しく発作的に泣き始める。驚いたふたりがその理由をたずねると、かわいそうな老嬢は苦悶のために身もだえし、口ごもりながら「わたしは、あなたのかわいい小さな足が冷たくはありませんかと、一度も、決して一度もきかれたことがない」と嘆いて、ふたたび激しくすすり泣くのである。わたしはこの場面を読んで、人間は、生涯において一度も相愛することがなかったなら、自己の生涯を失われたものとして、あるいは取り返しのつかない、惨めな失敗として感じることを、深く印象づけられたのである。そしてのちに武者小路実篤の

一から一を引けば零である。
人生から愛を引けば何が残る。
土地から水分を取れば砂漠になるようなものだ。

という詩を読んだときにも、『女の一生』のこの場面を思い出して、その真実を深く肯ったのである。生きるということの意味は、愛するということに究極する。そして青春を迎える者が希望に満ち

ないわけにはゆかない。そして人間の愛は、結局贋金にすぎないのだという絶望に陥らざるをえないのである。

しかしわたしたちはここまで来て、漱石の突きつめていった人生の醜悪で孤独な最後の境地が、実は聖書の出発点となっている現実であることを思わずにはおれないのである。そして同時に聖書が人生に対して有している意味の重大さということをも思わずにはおれないのである。それは生きるということの究極の意味である愛することが、人間のあらゆる努力にもかかわらず、矢折れ弾つきた果てに新しく可能となる途を示しているからである。聖書の世界にはこの人間の愛の破綻と恢復の経過が、簡潔にではあるが痛烈に描き出されている。わたしたちはあのペテロの躓き一つを取ってみても、そのことを十分知ることができるのである。

周知のように、ペテロは弟子の中でも最も純情で真率で、先生思いの人物であった。かれがイエスの受難の切迫した異常に緊張した空気の中で、躓きが予告されたとき、それを否定して「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」と言ったときには、真実その通りの決意であったに違いなかったであろう。しかし、この雄々しいことばを吐いたその舌の根も乾かぬうちに、「ペテロよ、あなたに言っておく。きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」というイエスの予言通りに、かれは大祭司の庭で、イエスを三度否んだのである。そして鶏の声を聞いたときに、ペテロは俄かに我に返り、イエスの予言が稲妻のように心にひらめいたのである。「ああ、しまった、取返しのつかない裏切りをした」と思ったとたんに、かれは思わずイエスの方をふり返ったのである。ところが鶏が鳴き出たときに、イエスもまたペテロに目を向けられたのであった。ペテロの目はイエスの目と一直線に出あった。そしてペテロは、憐れみに満ちた静かなイエスの眼差しをそこに見たのである。それはペテロの裏切りを予見されたうえで、なおペテロが信仰を喪わないために行なったと言われたイエスのあたたかい、すべてを赦してつつみとるような眼差しであった。この眼差しをうけたとき、ペテロの心には大きな熱い感情が動いて、もはやそこにいたたまらないで、急いで大祭司の庭の外に走り出て男泣きに泣いたのである。そのときまでペテロは自分に自信があった。他の弟子がイエスを裏切っても、自分はそういうことはしないという覚悟があった。そしてまたその通りに、イエスがゲッセマネの園で捕えられ、弟子たちが逃げ去ったときにも、かれだけはひそかにイエスの後に従って、大祭司の庭まで忍びこんでいたのである。自分だけはイエスを愛しており、自分だけは誠実な人間だという自信を、かれは強くいだいていたにちがいない。しかし、いまやペテロは不意にこの自己信頼の背骨が折れて崩れる経験をしたのである。かれは心に疼く自己嫌悪と自己譴責の激情のために、自らの胸をかきむしる思いでくやし泣きに泣いたであろう。聖書の「外に出て激しく泣いた」という簡潔なことばの中には、そういうペテロの感情がこめられている。

わたしは、さきに人生へのめざめは孤独へのめざめによって開かれるといったけれども、その孤独へのめざめに堪えがたい苦渋さを加えるのは、自己嫌悪の激情であると思う。他人の不真実が嫌悪の対象である間は、心になお安定した拠り所がある。ところが他人がもはや問題でないまでに、自己の醜悪卑劣が眼前に浮かび出るときに、わたしたちは胸をかきむしり、自らの手で自分の首をも切断してしまいたいような激しい自己嫌悪に襲われる。わたしたちは人生行路においてしばしば人に疎ぜられ捨てられるという経験をする。そしてそれはわたしたちを深い苦悩に投げ込むけれども、人に捨てられるのみではなく、自分で自分を見捨てずにおれない局面に立つときには、わたしたちの悲惨さは極まるのである。しかし、こうして自分さえ自己を見捨てずにおれないときに、実は自己を見捨てな

であるということはできない。むしろそれは、敏感な魂にとっては普遍的な経験であって、それゆえチェーホフも「孤独を知ろうと思うならば、結婚してみよ」と言ったのである。こうして恋愛と結婚にかけていた人間の夢が破れ去るとき、わたしたちはいやされることのできぬ人生の孤独にめざめたのである。

しかし、人生において最も純粋であり熱烈であるようにみえる男女の愛情が、なぜこのような破綻に陥るのであろうか。それはどのように純粋で熱烈な愛も、融解することのできない固いエゴイズムをそれぞれ人間が所有しているからである。よく愛するものが「わたしはこれだけ愛しているのに、あの人は自分を愛してくれない」というようらみのことばをもらすことがある。「これだけ愛している」というのは、「生命がけで愛している」、「すべてをかけて愛している」という意味であって、自分の愛の純粋さを表明しているのである。ところが愛がこのように徹底したものになればなるほど、相手の自由を奪う拘束的なものとならざるをえないのである。愛していることが自己中心の否定であり、他我中心の生き方の確立であるなら、そういう結果の生ずるはずはない。相手が自分を愛するか否かは、どこまでも相手の自由であるはずである。ところがその自由を相手に許すことができない。むしろ愛が強まれば強まるほど、相手の愛への要求が当然のこととして強まるのである。つまり自己の熱烈な献身は、そのまま相手の完全な独占への熾烈な欲求を秘めている。そしてこの欲求の満たされないときには、愛は狂うような嫉妬とも怨恨とも憎悪ともなって発動するのである。したがって人間の愛はそれがどのように純粋であっても、その裏面に憎悪への暗転の可能性をたえず秘めており、人を愛する経験をもったもので、嫉妬の苦しさを経験しないものは存在しないのである。こうして愛の経験は、人間の根底に巣食うエゴイズムの醜悪さをあばき、人間のまぬがれがたい孤独へとわたしたちを連れてゆくのである。

この必然的な愛の破綻は、人間の関係の中で、最も精神的なものとされる友情においても起る。夏目漱石が「こころ」で描いたのはそれである。あの小説にはいなかの旧家に育った純真なひとりの青年が出てくる。高等学校の学生のときに急に両親を失って、莫大な遺産の管理を伯父に依頼するが、この親も子も信頼しきっていた伯父に裏切られ、遺産を使い込まれて、はじめて人間の不誠実さに衝撃を受ける。そして金に関しては、もはや人間を信用することのできない人間嫌悪に陥ってしまうのである。しかし、そのときにはなお自己の真実について疑うところまでは達していなかった。ところがこの青年は大学時代に親友を裏切って自殺に追いやるのである。それもはじめは篤い友情に出たことであった。ある事情のため精神的にも経済的にも窮状に陥っている友人を助けるために、下宿の奥さんの反対を押し切って、むりやりに友人を自分の下宿に連れてくる。それは「溺れかかった人を抱いて、自分の熱を向うに移してやる覚悟で」やったことであった。ところが不幸なことに、このふたりの青年が下宿のお嬢さんをどちらも愛するようになるのである。そして思いつめた友人の告白を、「精神的に向上心のないものはばかだ」と痛罵して、致命的な一撃を与えておきながら、自分はひそかに下宿の奥さんに頼んでお嬢さんと婚約してしまうのである。その結果人生に絶望した友人は、頸動脈を切って自殺するのであるが、策略で勝ち、何も知らぬお嬢さんと一見幸福そうにみえる結婚をしながら、この主人公は友を死に追いやった自己の罪に堪えかねて、遂に自殺してゆくのである。漱石はこの小説の広告文を求められたとき、「自己の心を捕へんと欲する人々に、人間の心を捕へ得た此作物を奨む」と書いたけれども、わたしたちはこの小説を読んで、人間そのものの暗さに今さらのごとく目を見はる思いに捉えられるのである。そしてここまで人間への、あるいは自己への認識が深まるならば、わたしたちの愛の可能性にかけた夢は、微塵に砕け

れてみると、それは、不信仰の行為であることにまちがいはなかった。ことにこの自己嫌悪の内容を立ちいって反省してみると、それがいかに痛烈であっても、やはり裏に甘さがある。自分が本来は醜悪な人間でないという自負が反面にあるので、自己の醜悪が嫌悪されるのである。無条件降伏のように、本来的にも、現実的にも醜悪な自己以外に自己はないという自己認識にまで達していたなら、自己を嫌悪することさえ、一種のおのれを知らぬ傲慢であることに気づくに違いないのである。しかしそこまで徹底しうるのは、ただ罪を贖うキリストの十字架のゆるしに摂取されたときのみである。そのとき自己嫌悪によっては処理し切れなかった自己の醜いエゴイズムの全貌を直視することができるとともに、それより自由となることができるのである。イエスの愛にささえられてはじめて、人は自分を憎み切ることができ、きらい切ることができる。そして、そのときには自己の力で、自己を嫌悪するというその傲慢と不徹底をもふくめて、自己の醜悪と無力に徹して、すべてをイエスの救いの力にゆだねるのである。わたしは裏切ったペテロにそそがれたイエスの慈愛の眼差しを、いっそう、深く思わずにはおれなかったのである。わたしは、そのときから、自己嫌悪のつぶやきを抑えることにも、信仰の戦いがあることを思うようになった。

しかし、この自己信頼の背骨が折れて崩れる経験というものは、他人に対しても、新しい関係を作り出すものであることを思わずにはおれない。というのは他人の醜悪さも卑劣さも、自己のそれと同じように、嫌悪と譴責の対象ではなく、キリストのゆるしの対象であり、神の栄光のあらわれる契機であることを思うようになるからである。そしてそこには互の直接的な愛と誠実とを求めあって傷つくのではなく、互の罪を前提とし、互の罪をゆるしあって生きてゆく、新しい強靱な愛の可能性が開かれてくるのである。そして、そこにこそ人間の孤独の真に解消される可能性も秘められているのである。

もちろん、わたしたちはこの世にあってはルターの言ったごとく「罪人にして同時に義人」である。いつも罪の中にあって、キリストによって義とされる転化の中にあるのである。罪から足を洗って義となるのではない。そして、そういう意味ではわたしたちはこの世にあるかぎり、他人と自己との罪に挟まれて、嫌悪、怨恨、憎悪呪詛といった自然的激情から離れることはできない。生半可にそれから超越しようとすると、救いの実体から離れた生悟りに陥り、すべてあいまいで安易な妥協に傾いて、鮮烈な価値感情を失ってしまう。したがってわたしたちに必要なのは、自然的激情の微温化ではなくて、その激情を保ったままでの転換であろう。激情の嵐がイエスの像に吹きあたるとき、その調べが一変するのである。八木重吉の詩にキリストのことをうたった次のような詩がある。

基督

私は
床の間に基督の磔の図をかけておく
その前ではとうてい人を憎みとおせない

八木重吉も人を「憎まない」とは言わないで、「憎みとおせない」と言っている。そしてその表現にこそこの転換がこもっているのである。

わたしは、さきに生きることは愛することに究極すると言った。しかし、愛することは決して機会の問題でもなく、人間の自然の中に秘められている可能性の実現の問題でもないことを、わたしたちは見てきたのである。そして、それはむしろキリストとの邂逅において可能となるものであることを見てきたのである。わたしたちはこの事実の前に歩みを止めるときに、キリストの恵みが、人生においてどのように重大な意味をもつものであるかを、改めて深く確認せざるをえないのである。

（関西学院大学教授）

いかたがただひとりだけいられるということが、キリスト教の救いの力なのである。イエスがわたしたち自身よりもわたしたちに近いかたであるのは、そのためである。ペテロは人間的不真実を、そのままゆるして、つつみとるイエスの慈愛の眼に見守られることによって、自己嫌悪の中にむなしく滅びることなく、ゆるされて生きる新しい人生に甦ったのである。

この自己嫌悪の苦悩というものは、だれひとりとしてもたないものはないであろう。わたし自身の生活をふり返ってみても、人生にめざめかけて以来の自分の生活は、この自己嫌悪の惨めな連続の生活であったように思える。ことに学生のころのことを思うと、わたしの学生生活は自己嫌悪にさいなまれながら営まれたように思える。性格の整っていないこと、内面性のないこと、学問的能力のないこと、体力のないこと、そして究極的には愛することも誠実であることもできない自分の醜悪さ卑劣さ。そういうことがことごとにあらわとなって、自己嫌悪の情を誘発するのであった。「ああ、いやだ、いやだ」だとか、「ああ、ばかだ、ばかだ」といった嫌悪と自嘲のことばが、激しく心の底からほとばしり出て、終りにはそういうつぶやきが自分の癖にさえなった。そしてこの癖にまつわる思い出さえあるのである。

ある年、夏休みを故郷の家で過していたところ、親戚の小学校五年生の女の子が来て遊んでいた。そしてわたしがなにかを思い出し、いつもの癖で、思わず「ああ、ばかだなあ」とつぶやいたところ、その子は急に向き直って、「どうしたの」ときいた。子供にわかることでもないのに、子供に真剣にききとがめられたのがおかしくて、思わず苦笑しながら、それでも「いや、自分がばかだということさ」と言ったところ、その子はいっそう真剣な顔をして、「あまり自分をばかだ、ばかだと言っていると、ほんとうにばかになるんだから」と言った。わたしはぎくっとして、女の子というものは幼くても敏感なものだと感心した。たしかに出口のない自己否定の中をいたずらにうろつき回っていると、成長する心の芽というものがいっさいむしり取られて、自ら亡びてゆく。わたしは幼い子供のことばをきいて、思わず自己の陥っている滅亡の泥沼の恐ろしさに驚かずにはおれない気持ちであった。ところが、それからしばらくして今度は七〇才に近い年寄りの女の人の傍で、またつぶやく癖が出て、「ああ、ばかだ」と独語したことがあった。するとその人は、自分がばかだと言われたように思ったのか、「ばかだって、だれがばかなんです」ときき返した。わたしはおや、おやと思って、「いや、自分がばかだと言ったのです」と言うと、老人は「それならいいけど」と言って、安心したおももちをした。わたしは幼い純真な子供のもつ直観の曇りのない明晰さと、老人の絶えず周囲の批判を気にして生きているその哀れさとを思って、人生の姿というものを教えられる思いがしたのである。

わたしはそれからしばらくして、受洗したのであるが、長い間の癖となっていた自己嫌悪のつぶやきからは、なかなか脱却することができなかった。ところが、そのころ、わたしにひとりの熱心なカルヴィニストの友人がいた。同じ東大の文科で少し後輩であったが、入信はわたしより数年早く、意志の強い信仰の堅い人物であった。この友人とある日いっしょに散歩していて、わたしはふとあることを思い出し、「ああ、ばかだ、ばかだ」とつぶやいたことがあった。するとこの友人は足を止めてわたしに向きなおり、「もう、いやだとか、ばかだとかいうのはやめなさい。そういう人間だからこそキリストの救いを信じているのではないですか。そんなことをまだ言っているのはキリストのゆるしをむなしくすることだ」と言った。このことばはわたしの肺腑をえぐった。いままでなにも自己嫌悪のつぶやきをいい気になって吐いていたわけではなく、生理的必然にも似た心の動きで、無意識の中に吐いていたのであるが、言わ

にひっぱられて行ったのがキリスト教に接した最初だったんです。そのバイブル・クラスに熱心に出席して、聖書を通してイエス・キリストおよびイエス・キリストの福音というものについて知り、同時にそこに集まっていた中学生のクリスチャンのグループ、これを指導していただいた南石福二郎という先生の感化をうけて、旧制中学の五年生になったばかりの四月八日、イースターに、大津のもとの組合教会で洗礼をうけたんです。

大侠客だった父

編集部　お宅の宗教は？

西村　浄土真宗。東本願寺派です。父は在来の家の宗教として持っておりましたけれども、熱心な浄土真宗の信者とはいえなかったですね。

編集部　人生の生き方としてはどういうふうな……。

西村　父は若いときに滑水次郎長さんのもとで、次郎長一家の身内のひとりとして男を磨いた人で、関西の大侠客だったんです。ですから、そういう宗教のこととはおよそ縁の遠い、ただ仁義の仁侠の世界というか、そういう世界におったんです。そういう中で、わたしも育ったんですね。

編集部　ご幼少のころからのそういうものと、キリスト教との結びつきは……。

西村　侠客道というか、仁侠の世界というものは、そのときどきの権力者、圧迫者に対する権力を持たない、圧迫されているところの人民の反抗というか、レジスタンスというか、そういうものが一つの形として、侠客というものを生み出したと思うんですね。徳川時代における武士階級に対する町人のレジスタンス、それが侠客というものの生まれてきた一つの原因だったと思うんですね。圧迫されている人民の側に立って、権力者に反抗するということのためには、命を投げ出して社会悪に対して正義を貫いていこうということに、打算を越えた生き方をしているという、仁侠の道というか、侠客道はそういうものですね。わたしはやはりイエス・キリストのとられた道と、一脈のつながりを持つということをおぼろげながらも感じておったんです。そのことが、だんだんだんだん意識的に深められていったと思うんです。話は飛躍しますが、わたしの直接政治への踏み切りは二つの面がある。一つはイエス・キリストの足跡を慕って、一つは父が歩んだ、そして、残してくれた圧迫されている、押えつけられている、苦しめられているところの人民の味方として、その声をあげ得ない人たちの声を代表して、ゆがめられたところの政治を正していくということにも通ずる二つの面があると思うんですね。

編集部　洗礼をお受けになることには、おとうさまは別に反対なさらなかったですか。

西村　それほど強い反対はいたしませんでした。ただわたしがそののち、神学校にいくというときには反対しました。中学を出ましてから、わたしはフィリピンのミンダナオ島に渡ったんです。そして原始林の開墾をやったんです。三年間ほどいて、わたしは召命を受けたんです。

ミンダナオ島に渡る

編集部　どういう動機でミンダナオ島においでになったんですか。

西村　これはやはり海外に出なければいけない、この小さな日本の国土で人間はふえるばかりだし、そして海外に出ている日本人はそれぞれの国から排斥されている。日本の海外移住はいきづまっている。こういう状態において、ほんとうにクリスチャンの精神にたって、海外に出る人たちのユートピアを築かなければならない、という考えから、上級学校にいくことをやめて、ただちにミンダナオ島のアポ山という活火山ですが、その山のふもとの原始林の開墾に飛び込んだんです。そしてそこでの、人生のスタートは三百町歩の耕地の監督になったんです、一八才のときに。

〈わが信仰の生涯〉

福音と俠客道と

（語る人）（衆議院議員）
西村関一

自然の中で神の声を聞く

編集部　ご幼少のころの宗教的な環境について伺いたいと思います。

西村　少年時代、山が好きでして、郷里の比叡山にほとんど毎週登っておりました。そして山の静寂の中で、自然を通して人間を超えるものの声というか、神の声を聞くということを教えられたんですね。そののち、郷里の大津市の膳所中学の三年のとき、初めてバイブル・クラスにはいって、聖書を教わったんです。その当時ボーリス先生の始めた現在の近江兄弟社、当時近江ミッションといった、その関係でパウル・ビー・ウォーターハウスというかたが、毎週金曜日に学校の近くの鉄道キリスト教青年会館に来られて、バイブル・クラスをやっておられました。それに友だち

を信じてフリー・メソジスト神学校に入学して、四年の学業を続けることは非常な苦労だったんです。ところが、そういう状態で苦労しているときに、近江兄弟社の実行委員会からわたしに手紙がきまして、毎週土曜から日曜にかけて、琵琶湖畔の堅田町の伝道に帰ってこないか、そうするなら一ヵ月三五円送るといってきたんです。これは神の導きである、祈りの答と信じて引受けたんです。そして、毎週大阪から堅田に帰ったんです。それがわたしの生まれ故郷の大津から堅田に籍を移して、自分の生涯の墳墓の地と定めて、そこに教会を建てることになった最初の端緒になったわけですね。そのようにして四年間、わたしは神学校の学生として、堅田の開拓に従事した。卒業後も、この地方の琵琶湖の西側の農山漁村の開拓伝道に献身したんです。それからどこへも行かずに、その人たちの町を中心にして、伝道の開拓に骨折ったんです。それで教会ができたわけです。

開拓伝道三五年

編集部　神学校をご卒業になってからずっと堅田町に……。

西村　戸籍を移し、そこに本拠をおいて本腰を入れて伝道した。それはボーリス先生が、わたしが堅田町に行くときに、こういうことを言ったんです。「地方の伝道は困難であるから、そんなにいそいでやっては失敗をする。一代でできなければ、二代かかっても三代かかってもやるつもりでいきなさい。まずその土地の人間になり、その土地になくてならんような人になれ、それからボチボチ伝道をやれ」と言われた。それはわたしにとって、それだけ腰をおろしているわけにいかないけれども、それほど長い目でわたしを信頼して、まだ未熟なわたしを堅田に送り込んでくれたということは、ボーリスという人は偉い人だといまでも思いますね。それで、ほかの教会に行かれる機会もあったし、海外に留学する機会もありましたが、つい三五年間というのはアッという間に過ぎて、堅田に教会をつくる、農村、山村に伝道するために、そして、地域社会に奉仕するために、わき目もふらずに苦労したんです。ですから政治の第一線に出るというようなことは、毛頭考えていなかったんです。

編集部　教会の会堂は、伝道をお始めになって何年目くらいにできたんですか。

西村　会堂は、神学校を卒業してから一〇年目に建ったんです。

編集部　たいへんだったでしょう。

西村　最初は町の人から国賊だと言われたんです。ヤソ教がきた。あれは国賊だ。あれは恐ろしいバイ菌だといわれたんです。そしてだれひとり来なかった。路傍でひとりで伝道していたんです。それから戸別訪問して伝道しておったんです。最初は第一、家を貸してくれない。ようやく借りた家はわらぶきで、雨が降るとバケツを三つも四つも並べなければならぬ。お天気の日はどこからかお月さんがさしてくるというような、崩れかかった家でした。そこに初めて近江ミッション堅田キリスト教伝道所という看板をかけた。それが始まりです。

編集部　そして三五年間開拓伝道をなさった。

西村　いまはわたしは政治に関係するようになったから、主任担任教師はわたしの女婿の財津正弥ですよ。わたしの娘は同志社の神学部を出まして財津正弥と結婚して、それで堅田に住んでいる。わたしは現職の教団の牧師としてのまま政界に出ているわけです。

やみ夜に鉄砲を打つ

編集部　三五年間伝道していらっしゃって、いちばん印象に残っていらっしゃることというのはどういうことですか。

西村　それは失敗だらけであったというこ

そして、そういうところにきている日本人のあさましい姿、物欲と性欲と、それから社会的法律的制裁の非常に薄い、開拓地における人間のあさましい姿を、いやというほど見せつけられて、自分の人道主義的な信仰が、いかに弱いものであるかということを痛感させられたんです。そこでわたしの信仰は、大きな試練にぶつかった。なまやさしい人道的な考えでもってイエス・キリストにしたがっていこうというようなことは、ひとたまりもなく、そういう現地の社会の中でついえ去ってしまった。そこで、もう一度わたしは、聖書を読み直し、熱心にイエス・キリストを呼び求めて、いままでのような不徹底な信仰というものを全部すて去って、イエス・キリストの福音のために、生涯を捧げるという決心をしたわけです。そこにわたしの福音召命が始まったんです。足かけ三年ですが、満一年八ヵ月ののちに帰ってきたんです。それは、アミーバ赤痢とマラリヤにかかって、帰らざるをえない状態になったんです。そこにも見えざる神のみ手があった。帰りまして、神学校にいくまえに長門の秋吉台の本間俊平先生のところに身を寄せまして、そこで一ヵ月あまり先生の薫陶を受けたんです。それから本間先生のところから帰って、一年志願兵で一年四ヵ月軍隊生活をしました。それが終ったあと小田原にまいりまして、小田原で当時熱海線および丹那トンネルの鉄道工事が始まっている。その土工の群に投じたんです。そしてそこでそれこそ毎日ひとりやふたりの殺人事件や刃傷事件が起こる、そういう荒くれの土工の生活にはいったんです。その間わたしの信仰を鍛えて、ますますイエス・キリストへの忠誠心が燃え上がったんです。

土工の群から神学校へ

それから神学校にいくわけですが、神学校にいくまえに、近江ミッション当時最初の信仰に導かれた近江ミッションのボーリス先生が、そういうふうな定まらない魂の遍歴をしているわたしに目をつけて、いまの近江兄弟社、当時の近江ミッションに迎えられたんです。それでわたしは、近江兄弟社近江八幡YMCAの主事となって、半年その仕事をしたんです。そのような過程を通って神学校に行ったんです。それが二三の年です。当時どの神学校に行こうかということになったんですが、高橋卯三郎という牧師がおりまして、そのかたはわたしを東京神学社、植村正久先生のところに推薦してくださいました。それから武田猪之平という先生は、同志社の神学部に推薦してくださった。ウォーターハウス先生は、アメリカにただちに行ったほうがいいというふうに言っていらっしたんです。そういういろんな道が開かれておったんですけれども、わたしの選んだ道は、当時伝道にしたがっておられました土山鉄次という先生の、熱烈な火の玉のような迫力のある説教に打たれまして、先生のもとで伝道師となる勉強をするという決心をしたんです。それがフリー・メソジスト神学校にはいった動機なんです。当時フリー・メソジスト神学校は大阪にありまして、土山先生が校長、川辺定吉先生などがおられました。福音的信仰にたって新時代に処する伝道師の養成、神学的な素養を十分身につけた伝道師の養成を志して、神学校が発足したばかりだったんです。そこで、当時建物は私塾のような民家を借りてやっておったんです。そこで、土山先生を中心にして、神学一般についての指導を受けたんです。四年間、その神学校の課程を続けるのは並々ならん苦労だったんです。第一は父はわたしを勘当いたしました。そういう道に行くことは許してくれなかったんです。それで、父から学資を受けることはできないし、近江兄弟社はやめて行ったんですから……。それにフィリピン時代の病気もよく治っていないし、小田原の土工の生活で無理をして喀血をしましたし、その病気も十分に治っていないし、肉体的にも経済的にも精神的にも、とにかく神

あるいは労働問題の面に、たとえば地方労働委員会の公益委員という仕事を引受けて、労働争議や労働紛議の調停あっせんにたずさわったり、社会福祉協議会の副会長として社会福祉事業のお世話をしたり、そういうことをやっておりましたが、それはそれなりに、地域社会の福祉に奉仕する道ではありましたが突き詰めていけば、政治の貧困というカベにぶつかる。もう一つはわたしは太平洋戦争に対して、自分は牧師でありながら、積極的にこの戦争を食いとめるということのために、身を投げ出して戦うことをしなかった。積極的にこれに聖戦なりとして協力するということはしなかったが、しかし、自分があの悲惨な戦争を、身を投げ出して食いとめ得なかったということに対する良心の苛責がある。ということは、再び戦争の道を歩んではいけないという自覚を強めていった。そのときに、昭和三〇年の総選挙のときに、三分の一の革新勢力が崩れるか崩れないかによって、憲法改悪、再軍備という道がぶち開かれるかというせとぎわに立つ日本の現状の中で、どうしてもこの三分の一の勢力は確保しなければいけない。この平和民主憲法は守り抜かなければいけない。再軍備、戦争への道は、ふたたび開いてはいけないということのため、革新勢力を勝たさなければいけないという客観的情勢が迫ってきた。教会が政治の第一線にある政治家を、さらに慰め励まし力づけて、そしてまたふたたび送り出すという役割をしなければならない。しかし、わたし自身が政治の第一線に出るということは考えておらなかった。けれども、そういう客観的情勢が押し迫ってきたということ、そして、多くの労働者、農民、各階層の人たちが、かつてわたしを国賊とののしりバイ菌と排斥した郷土の人たちが、わたしを衆議院に押し出して、平和勢力を強めるために、戦争への道を食いとめるために出馬するように決意を促され、もはやこれを拒むことはできない、という段階に追い込まれたわけです。わたしの意志で、政治への踏み切りを決意した。わたしは、そのときに先輩の賀川豊彦先生が、「神に奉仕することと政治に出ることは両立できない。政治をやるなら牧師をやめなさい」と言われた。しかし、わたしは牧師をやめるくらいなら政治はやらない。とくに政治への実践は、聖書の立場に立ってイエス・キリストの福音を述べ伝えるためにこの世に散らされた民である。世俗の中の世俗の世界といわれる政治の中に散らされ証しせしめられなければならぬ。そういう立場に立って、わたしは政治への道を踏み切ることが神のみ心であるならば、必ずこの二つの立場は両立しうる。それはいろいろの矛盾がある。一つの政党に属するということは、他の政党に属する人たちに対する、あるいは他の政党を支持する人たちに対する妥当な立場に立っての政治的立場と齟齬矛盾するんじゃないかということがあるが、しかし、牧会者というと立場と同時に、一つの予言者的な立場が牧師になければならぬ。そういうことは矛盾の中の一つの調和を求めていく。そこに新しく生きるわたしに与えられた道なんだという確信に到達して、ついに政治への踏み切りが神のみ心なりと信じて、そこに信仰の告白の場として、わたしの政治への踏み切りを決意せしめた最も重要なポイントがあった。昭和三〇年の選挙には失敗をいたしました。したがって、堅田の牧師をしながら次の三三年の選挙のときは、政治活動と伝道との二つの道を押し進めていったんです。三三年二月の選挙で五万二千の票を得て当選しました。三五年一一月の選挙には、約六万の票を得て最高点で当選したんです。二度目の当選。これは自分の器量のゆえではなく、やはりわたしの背後に立っているイエス・キリストならびにイエス・キリストの福音の勝利だったと思います。もちろんわたしを支持してくれる労働者、農民、多くの支持者の並々ならぬ努力の結果ではありますが、また教会の祈りのためもあるけれども、究極的にはわ

とですよ。地方の開拓、農村、山村の開拓伝道はほんとにやみ夜に鉄砲をうっているような、まことに失敗だらけの伝道であったということですけれども、とにかくいっしょうけんめいやりましたよ。けれども、成功したとは思いません。ただ、どうして湖西の地にキリストの福音を残し、また、その福音を具体的に証しするような奉仕ができるかということに専念したんです。失敗のなかにもいろいろありますが、ずいぶんたくさんの人たち、異常性格者、刑務所を出た人たち、親兄弟に見はなされた人たち、そういう人たちを何十人とお世話をしました。あるときには十数人がいっしょに生活をして——わたしのほうで四軒の長屋を借りて、まん中にわたしの家族が住んで、一つのほうには女、片方には男と住んでおりました。十何人いっしょの釜の飯を食ったり、そういう人たちも何十人といますが、おそらく七、八〇人もそういう人たちが入れ代わり立ち代わり来たでしょう。そういう中から立ち上がって、進んで行くような生涯にはいった人は、一〇人にひとりもない、三〇人にひとりぐらいでしょう。そういうことも、非常に労多くして報いられるところは少ない。教会の形成にプラスにならなかったが、いまになってふり返ってみると、そのうちのひとりでも、ほんとうにりっぱな人になってくれるということは、非常に大きな喜びで、わたしの生涯忘れることのできないことで、いまなおそういうことがなつかしい。政治にたずさわっておりますと、世界がどうなるか、日本がどうなるかという非常に大きな問題を取り扱いますが、その陰でつまずいている人、仆れている人、自殺しようかどうしようかとしているような人、そういう問題に政治家になるまでにたずさわったことはなつかしいし、また政治にそういう思いやりが必要だと思うんです。

編集部　初めての信者というのはどういう人だったんですか、印象は……。

西村　若い人。家内がそのひとりです。(笑)

編集部　街頭伝道をやっていらっしゃる間に、ひとり、ふたりと集まってくるようになったんですか。

西村　そうです。そして、やはり長い目で町の人がほんものかにせものか見ていますから、じっくり腰を据えて、地道にコツコツやっておれば、やはり少数でも与えられるということを経験しましたね。しかし、そういうこともミッションが背後にあって、長い目で、祈りとともにささえてくれたということ、それがなかったらいけないでしょう。

編集部　奥さんは初期に……。

西村　いちばん最初です。六人きた中のひとりですよ。えらいことになったんです。(笑)しかし、神さまはいちばんいい半身を与えてくださったと思って感謝してます。

社会の不正と闘う

編集部　政治のほうは、やはり地域社会に対する奉仕ということから、お始めになったんですか。

西村　ひとつは賽の河原のように、積んでは崩し積んでは崩し、いくらいろんな人をお世話しても、刑務所に逆戻りして行く。それから、またわけのわからんような、消えてなくなる社会に消えて行く。そういうことを、いやというほど見せられた。そして、ああいう地域社会にあってコツコツと働いている農村の人たち、レイヨンの工場に働いている労働者の人たちの生活があまりにも惨めで、どこかにまちがいがあるに違いない。そのまちがいに目を蔽うて——社会にそういう経済的社会的不正義がいっぱいある。そういうところに、いろんな悲惨なことができている。そういうことに目を蔽うて、ただ説くだけではイエス・キリストに忠誠なるものではないという気持ちが非常にわたしに強く働いて、政治に対する関心がわたしの気持の中に高まっていった。そういう立場から社会福祉の面に、

といっては悪いが、そういうかっこうをしないと、強くないというような感じかたは、まだほんとうに成熟していないと思いますね。

安保体制打破の運動を

編集部　ちょうど安保闘争から一年になるわけですが。

西村　議会主義ということは、議会外の国民の運動に対して水をさすということではないと思います。やはり国民の中から盛り上がってくる運動に対しては、政治家はその運動の動向を正しく見きわめて、そしてそれをとらえていかなければならぬ。そのことを無視しての議会モンロー主義では、議会主義にならんと思う。議会をほったらかしておいて、議会外の運動だけでもって理想の社会主義社会がくるという考え方、革命という客観情勢を盛り上がらせるという院外活動だけでもって、理想的社会主義社会がくるという考え方には賛成できない。しかし、議会を通じて民主主義的な方向の社会主義社会を実現するということは、院外活動に対しては冷淡であるということではないと思うんですね。安保の一年前のことを振り返ってみて、わたしは院内における行動、また院外の国民運動に対するわれわれのとった態度というものに対しては、反省すべき点があると思うんですが、しかし、全体として考えるときに、わたしはやはりなすべき義務をなしおおせたし、果たすべき役割は果たしおおせた。その成果は、後世の史家の評価に待つべきだと思うんです。決して全体としての方向はまちがっていなかった。あの場合に、ああいう行動をとらざるを得なかったということにおいては、まちがっていなかった。個々のいろんな行動に対しては反省すべき点はある。いきすぎもある。まちがいもある。いろいろあったんです。しかし、全体の方向としては、わたしはやはり高く評価さるべきものだったと思います。自然成立を許したということに対する共産党の諸君の批判がある。それだからといって、あのときに一部の学生、一部の労働者を煽動して革命の導火線を切るというような方向に持っていくということは、わたしは国民大衆の利益を守る道でもないし、日本の国の安全と平和を守る道でない。そういうことはすべきではない。またそういうことを考えたこともなかったし、そういう批判はあたらないと思うんです。

編集部　安保成立後一年経って新安保体制は強化されてきているんですが。

西村　これに対して安保体制のもたらす影響というもの、それが失業と貧乏が国民大衆におよぼす影響、経済成長九パーセント、所得倍増と政府はいっているが、大多数の国民大衆は失業と貧乏にあえいでいる。こういう生活を守る戦いの新しい国民運動を盛り上げていかなければならない。そして、また一つは日本の安全、平和、独立を脅かす再軍備、自衛隊の強化、これは新安保条約に基づく要請として、そういう再軍備予算が強化されるさらに政府は核武装しないと言明して、核武装への道を実績を積み上げていこうというような、いろんな事象が起こっている。そういうことに対して、あくまでも、われわれは日本の平和、安全、独立を守るために、日本にある、外国の基地をなくするという運動、原水爆の持ち込み、実験、使用を禁止するという運動、世界の全面軍縮に対する日本が主動的な、積極的な中立、和平の立場をとるような働きかけ、そういうことをとり上げる国民運動をやらなければいけないと思うんですね。やはり、いまの憲法という立場に立って、憲法はすべての国民が人たるに値いする生活を保障しなければならぬから、これに相反するような政治的、社会的、経済的諸情勢をなくする国民運動を盛り上げていかなければならぬと思うんですね。

編集部　どうもありがとうございました。

たしはわたしの勝利は、ああいう滋賀県のような保守的な仏教の金城湯池のところで、仏教の人も、宗教を越えて支持したということは、非常に大きなわたしにとっては喜びだと思っております。

争議のまんなかに十字架を

編集部　いろいろ労働争議なんかを調停なさったということを伺ったんですが、非常に困難なことが多い中で、どのようにして……。

西村　わたしがいちばん苦労したのは有名な近江絹糸の人権争議、それから私鉄の争議ですね。もちろん労働法規に通暁するということも大事でしょうし、それからまた経済の事情、企業体の実態を知るということも大事でしょう。また、労働慣行というものに対する理解も大事でしょうが、同時に労使双方が相対立し、相拮抗し、血で血を洗うような激しい争議の中において、ただそれだけでは解決できない。双方の要求を足して二で割って、解決点が見出されるというような簡単なものではない。いくつかの争議の解決に努力したわたしの経験から申しますと、いかにしてこの妥結点を見つけるか。たとえばお互いが主張しあって、その差は五十歩と百歩のところまで縮まっていった。五十歩百歩の違いまでになってきたというときに、さらにそれを、五十歩と五一歩のところまで、どういうふうにして縮めるか。そして、さらにそのいちばんの究極点について、どちらが一歩を譲るか。五十歩と五一歩の違いの場合、経営者側が一歩譲るか、組合側が一歩譲るか、どちらに譲らして最後の結論を下すかというところに、微妙な解決の秘訣があると思うんですね。それを、どこに五十歩、五一歩の線を引くかということです。具体的な争議の中で、両者の要求の中で。これは理屈ではないですね。やはり、これは労使双方がお互いに一歩退いて争議の中に英知というか、そういうものに導かれる。それはやはり、こういう争議の調停あっせんの中で、どこまでも無私でなくてはいかん。どちらかいっぽうに加担してはいけない、ということは、わたしはやはり十字架の精神だと思う。罪なきイエス・キリストが、罪あるものとして十字架にかけられた。全くおのれを捨てきった姿でしょう。そのキリストの十字架を、現実の争議のまん中にどのように立てるかということを絶えず求めていって、そこに自分の身をおくということですね。そこから、わたしは解決の英知が出てくる。五十歩と五一歩の線を引く妙機が発展すると思うんです。わたしの経験では幾晩も徹夜したこともあるが、一度も失敗したことはありません。全部解決しました。もう一つは時期の問題。時期を失なってはいけない。長引いてはいけないし、早まってもいけない。そういうことがいちばんの秘訣だと思います。

編集部　労働者階級の立場に立って調停するということとどうでしょうか。

西村　わたしの経験によると、ある場合には組合側の諸君をどなりつけたこともあるしもちろん政治に出るという考えもなかったから、組合の諸君にお世話になるとも思わなかったし、それは、きみたちはわがままだとどなりつけた。組合指導者の中にある組合員に対するジェスチュアがよくわかる。けれどもわたしはたとえどなりつけても、わたしの真意がわかっているから、組合の諸君はボイコットしたことはいままでないですよ。もちろん大部分の場合は労働組合の立場に立っておりました。しかし、ときにはそういう組合のいきすぎに対してチェックするという場合もあったんです。わたしは、やはりいまの日本の労働組合が、はち巻を締め赤旗を振っていることは、現状においてはやむを得ないと思うんです、経営者が悪いんだから。しかし、早くああいう時期を通り越して、お互いに談笑のうちに、侵すべからざる威厳を持って、経営者を説得しうるような力を持たなければならぬと思いますね。なにか虚勢を張り虚勢

とは何か。話が抽象的にならないために、わたしはまず、具体的な〈魅力ある女性〉について述べてみたいと思います。これは人によっていろいろ異なるものですが、わたしに、〈魅力ある女性〉のイメージを与えてくれるのは、シェークスピヤの『お気に召すまま』です。わたしには『お気に召すまま』が、主人公のロザリンドという女性の魅力を楽しむ作品であるように思えます。この作品の中には、ハムレットを思わせるような厭世的口吻をもらす憂鬱な皮肉屋ジェークイズとか、『リヤ王』に出てくる道化（アール）と同じく、人々に鋭い諷刺の矢をはなつタッチストーンとか、ロザリンドの恋人のオーランドーとか、いろいろ興味ある人物が登場していますが、やはりなんといってもこの作品のおもしろさは、主人公ロザリンドの女性としての魅力にかかっているように思えます。

彼女はまず近代的な豊かな知性の持ち主でありました。いったい、中世の恋愛は騎士的恋愛、ドイツ語でミンネとよばれている恋愛でありましたが、これは、当時の宮廷の騎士が、身命を投げうって主君に仕えたり、十字軍遠征などに従って己を神に捧げたりすることと並んで、自分の崇拝するひとりの女性に生命を惜しまず、奉仕するという恋愛であって、恋人を太陽とか月とか星とかいう、地上ならぬものになぞらえ、その前にひたすらひざまずいて、あたかも神よりの恩寵のごとくに、恋人なる女性よりの愛寵を期待していくというような、きわめてロマンチックなものでした。こういうミンネとか、コートリー・ラブ（宮廷恋愛）とか言われるような中世的な恋愛は、『お気に召すまま』では、羊飼いのシルビヤスが同じ羊飼いの娘フィービを恋する場面にあらわれています。シルビヤスはおよそ宮廷とは縁のないいなか者ですが、その恋愛においては全く中世的ロマンスの中にありました。彼はフィービにじゃけんにされても

可愛いフィービ、いじめんでおくれよ。な、フィービ。好きでないというのもええが、言うにしたって、やんわりとやってくれよ。

と彼女に弱々しく哀願するのです（三幕五場）。事実彼にとって恋とは〈溜息と涙とでできたもの〉〈真心と心尽しでできたもの〉として、

ただもう気違いみたいな心。ただ燃える思いとせつない願い。あこがれて、仕えて、尊んで、へり下って、我慢して、またじれて、清い心で、苦労して、敬います。

というように、理解しています（五幕二場）。だが、ロザリンドの知性はこのような中世的恋愛にがまんがならない。彼女はこのシルビヤスに向かって、〈恋がお前を意気地なしの虫けらにしているのだ〉とけなし、ほんとに惚れているなら〈ひとことも言わずに〉とっとと女の所に行くがよい、とすすめます（四幕三場）。そして中世ロマンスの中に登場する貴婦人のように、こんなに慕っているシルビヤスに対して、少しも心を動かされないふうにとりすまして、つれないことを言うフィービに、面と向かって、寝るときに蠟燭がいらないというほどのご面相でもないのに、どうしてそんなにうぬぼれてむごいことを言うのか、どこの市場でも売れるという代物じゃないんだから、売れるときに売ったがよい、膝を打って、断食して、よい男に惚れてもらった天に感謝するがいい。

と言ってしまうのです（三幕五場）。

このようでありますから、恋人のオーランドーに向かっても、彼女は恋のために死んだと言われる昔のロマンスなどは額面どおりに受けとれないと言います。

彼女の知性は、人間というものがそうやすやすと、ただ恋のためだけに純粋に死ねるものではないということを知っていたのです。彼女は、トロイラスの死は何も恋人に棄てられたからではなく、ただギリシア人の棍棒で脳天をたたき割られて、討死したにすぎない

女性の魅力

高木幹太

1　魅力ということ

〈魅力〉という意味の英語のチャーム(charm)はラテン語のカルメン(carmen)すなわち〈歌〉ということばから由来しています。それはすてきな歌がわれわれの心を、その中に閉じこもっていた所から連れ出して、そこへと吸収・魅了する力を持っていることから作られたものでしょう。わたしは、帰国の船旅にオデュセイアがセイレーネスの島を通りかかったときの物語りを思い出します。人面鳥身の怪物セイレーネスの歌を聞いたものは、故郷の妻子のことも、帰郷の喜びをも忘れて、怪物に近づいて命をおとすということ、それでもし、命をおとさずにその美しい声を聞こうと思うなら、船を漕ぐ仲間たちの耳を蜜蠟でふさぎ、自分のからだを帆柱に縛りつけてそこを通ればいい、ということをオデュセイアは怪物のキルケーから聞いていました。それでその島に近づくと海面はなめらかな凪となったので、オデュセイアは帆を下ろし、仲間たちの耳を蜜蠟でふさぎ、自分のからだを帆柱にしばりつけさせて船を進めました。すると、美しい歌声が聞こえてきました。オデュセイアはこの歌を聞いているうちに、どうかして彼らの所にいってみたくなり、気も狂わんばかりでしたが、仲間たちは、このようすを見て、命じておいた通り、ますますいましめを固くするばかりだったので、やっとその島を通り抜けることができた、という話です。わたしにはこの有名なホメロスの物語りは、歌というものが魅力ということばの語源をなしたことを象徴しているように思えます。

ふつうわれわれは、ちょうどコンパスの尖端をしっかり紙の上に刺して円をえがくように、自己をこの世界の中心として位置づけ、そこから生活圏をえがき形成しているものであり、その円の限界は、何か他のものによって決して侵されることはあってはならぬと固く思っているものです。

人間のエゴイズムということは、つまりそういうことに違いありません。ところが、この円の外のどこかで、ある存在が美しい歌をうたう。そうすると、他の場合においてはすべて、われわれの存在の周辺を侵害するように見えるものほどいまわしいものはないにもかかわらず、セイレネースの歌を聞いたオデュセイアのように、自分のほうから進んで、物狂わしいばかりにそのものに、向かって超越・放浪しようとしてしまいます。〈魅力〉ということは、このような、われわれが自己自身のなかに、休らい定住することをやめて対象の中に超越・放浪せずにおれなくなるように促す力のことであります。そして男性にとっても女性にとっても異性というものは、互いにこのような〈魅力〉を持つものとして互いを限定しあう存在であったのです。

2　魅力ある女性

それでは今回の主題である〈女性の魅力〉

見回して身がまえていることから起こったものとして、女性の本質が〈献身〉であることをいよいよ明瞭に示すものだと言うことができるのです。それゆえに、ケルケゴールのことばで言えば、女性らしさというものは、女性が〈はてしもなしにとりすましている状態〉から〈女性的献身に〉変化したときに、もっとも魅惑的なものとしてあらわれてくるのだと言わねばなりません。――

しかしこのように女性を規定することは、おそらく多くの〈頭のいい〉女性たちから反駁を受けるだろうということだけは、わたしにもわかるような気がします。たとえばボーボワール女史があの、尨大な『第二の性』の中で繰り返し、繰り返し否定したことは、そのように人間一般から切り離された女性の本質といったものに注意を払い、それを男性の本質と対質するという考え方でありました。〈女〉というものを一般的に語るのは、永遠の〈男〉を語ると同様に無意味である。女は経済的、社会的、歴史的な条件によって〈作られたもの〉であって、ホルモンや神秘的な本能で規定されるのではなく、自己の外にある意識をとおして彼女が自己の肉体や世界との関係を把握する、その仕方によって規定されるのである。「もし女の子がごく幼いときから男の兄弟たちと同じ要求、同じ尊敬、同じ厳格さ、同じ自由さで教育され、かれらと同じ勉強、同じ遊戯をいっしょにさせられ、同じ将来を約束され、彼女からみて明らかに対等だとおもわれる男女に囲まれていたら、〈去勢コンプレックス〉や〈エディプス・コンプレックス〉の意味は非常に修正されるだろう。……相関的に、男の子は〈優越コンプレックス〉を吹きこまれず、女を男と同一視する習慣をうえつけられたら、そういうものをもたなくなる。女の子はナルシスムや夢想のなかにむだな補償（コンペンセーション）をもとめなくなるだろう。自分を与えられた運命的なものとは考えなくなり、自分が〈する〉ことに興味をもつようになる。で、計画たてたことに思いきりよくうちこんでゆくだろう」このようにボーボワールは言うのであります。わたしはこの、女の状況はその身体に依存しているのではなく、身体が状況に依存しているのだという、マルキシズムを媒介とした実存哲学の女性のとらえ方が、今日、どんなに高く評価されてもされ過ぎることはないと考えざるを得ません。このことの意味についてはやがて独立して取り上げるつもりですが、しかしそれにもかかわらず、バルトやキルシュバウムが指摘したように、彼女が男と女との性別は実存の深みの中で究極的に廃棄されると考えたことに、全面的にわれわれは賛同することができないのです。なぜなら、聖書が告げている人間が男性として、あるいは女性として創造されたものだということの中にはもっと深い意味が存在しているからです。そのことについて述べることが、わたしのこの〈恋愛論〉が最後に目ざす目標なのですが、とにかく、ボーボワールの指摘したところに十分耳を傾けつつ、深い意味で、ケルケゴールが言ったように、女性の本質が〈献身〉であると主張したいと思います。

その意味で、あのロザリンドはやはり魅力ある女性――シェークスピアの創造した女性のうちで、もっとも魅力ある女性のひとりであると言えるでしょう。思うに、ロザリンドのような知性的・個性的な理解や判断もなく、ただいたずらに自分を捧げてしまうような女性は、チェーホフではありませんが、なるほど〈可愛い女〉であっても、しょせん魅力ある女性とは言えますまい。それとともに、知性的であるということをみずから誇りとして、そのために何ものに対しても、われを忘れて献身したり、あるいは献身する余地を失ったような女性も、まことに荒寥たるものであると言うことができるでしょう。ロザリンドの姿の中には、どちらかいっぽうに傾きやすい、このような女性の問題が、実に見事に、魅惑的に結実しているではありませんか。

（次回は男性の魅力）

のであり、また恋する尼僧ヘロを慕ってヘレスポント海峡を泳ぎ渡ろうとして死んだという若者リヤンダーも、実は暑くてたまらないので、水あびをしに行き急に痙攣がきて溺死しただけなのだ、と言います（四幕一場）。

でもそれはみんなうそ。男は次から次へと死んでいって、虫に食べられてしまうけれど恋のために死んだ人なんかありはしない。

もちろん、結婚についてもロザリンドはきわめて現実的な見方をしています。男装をしているためにロザリンドであることに気づかない恋人のオーランドーと戯れに結婚式のまねをして、彼女は、夫婦になったらどのくらいの間いっしょにいるつもりかとオーランドーに尋ねます。それに対して彼が、〈永久に〉ただの一日も残さずに〉と答えると、そのことばを引きとって皮肉に

ただの一日とおっしゃいよ、〈永久に〉を抜いて、いいえ、いいえ。男は恋をささやくときは四月みたいだけれど、結婚しちまえば十二月よ。娘も、娘のころは五月だけれど、人妻になると空模様は変わってしまう。

とはっきり言うのです（四幕一場）。

しかし、ロザリンドの女性としての魅力はこのように彼女が中世的恋愛や結婚の理念に対して、容赦なしに批判し、分析をなすようなリアリストであるにもかかわらず、女性らしい優しい感情や恋愛の甘い美しい感情を少しも失わずに、豊かに持っているというところにあります。約束した時間になってもオーランドーが来ないので、泣き出しそうになりながら、いとこのシーリヤとオーランドーのうわさをする第三幕四場は、この劇の中で実に美しい。〈話しかけないでちょうだい、泣きたくなるから〉と言いながら、自分からそれを破って、〈あの人の髪の毛からして、いつわりの色よ〉などと恋人への怨みをシーリヤに語りかけるのです。すると恋のうずの外にあるシーリヤが多少それをからかうようにして、〈ユダの髪よりももっと赤いのだわ。きっとあの人の接吻なんかは虚偽の塊りよ〉と言うと、今うらみごとを言っていたのに、そう言われると反対に、今さらながらオーランドーが恋しくなって、〈いいえ、あの人の髪の毛の色はいい色ですわ〉と前言をひるがえして恋人を擁護してしまうのです。そういうロザリンドをシーリヤがさらに揶揄して、あくまでもオーランドーをユダに結びつけようとして、〈すてきな色ですこと。赤茶のほかに色はなし、ですよ〉と言うと、キリストを裏切るのにユダが接吻をもってしたことから、恋人オーランドーの接吻を連想したロザリンドは、いとしげに、このように言うのです。——

あの人の接吻には聖餐のパンのような神聖さがあるの。

3　女性の本質

ケルケゴールは、女性の本質は〈献身〉にあると言いました（『死にいたる病』）。女性が男性にくらべて優しく繊細な感情をどれほど多く持っていようとも、原理的な意味で女性は〈自己〉に関する利己的に発達した観念も持っていなければ、決定的な意味での〈知性〉も持っていない。女性が人をばかにしたような、とりすましたそぶりをしたり、〈あの人わたし大きらいよ〉などと残酷なほどはっきりと選り好みをするのをわれわれは実にしばしば見るのですが、——男性に比して実に実にしばしば見るのですが、そのことは決して女性が男性に比して知性的であったり、個性的であるということを意味しないでありましょう。かえって、女性がとりすましたり——〈とりすました〉ということばは実際女性のために作られたようなことばだ、とケルケゴールは言っていますが——、あるいは残酷なまでも、好ききらいをはっきりさせるのは、彼女が自分はいったい何に感嘆すべきかだれに自分の身を捧げるべきかと、あたりを

して大阪に出てきた。勤先で妻にめぐり会ったのである。最初に近ずいたのは彼女もクリスチャンらしいということであった。わたし自身は学校を出て四年もいなか暮しをして、やりきれなくなって都会にとび出しては来たものの、なにか前途に行づまりを感じて、暗い気分にとらわれていたので、わたしの姉に感じが似ているように思った妻に親しんでいった。事実彼女はわたしより一まわりも年上であったのだ。

やがて結婚を考えて相談したとき、母も兄姉もこぞって徹底的に反対してくれた。わたし自身にしても、あえてこの女性と結婚しなければならない理由はなにもないようだった。ただ、わたしには女友だちというのは、彼女以外にいないというだけのことであり、結婚にふみきるとすれば、末ッ子生来のあまのじゃくを満足させてみるというのが、唯一の理由らしい理由だった。

彼女は年がちがいすぎることを理由に、積局的ではなかった。わたしは自分が相手をきらっていないかぎり、相手もわたしをたまらないやつだと思わないくらいのところで、結婚は可能だと考えた。

そこでうれしくもなければ悲しくもない結婚式となったのである。わたしも彼女も、実はそんなものは不要だという考えであった。妻の母親の切なる願いによって、最小限度の挙式をして、わたしたちは大阪のはずれの下宿に帰った。

それからの一〇年は、妻にとっては試錬の連続だった。わたしは末ッ子的性格として、近親者への感謝や思いやりの念が薄く、自分の苦しみばかり家庭の中にもちこんだ。酒もたばこものまないクリスチャンは外見上謹厳で、ひとあたりはよろしいかもしれないが、そのしわよせが家族にかぶさってくるといったのが、わたしの生活構造だった。小心で不きげんなときの多い亭主を、二人三脚の相棒として三年戦ったある日、彼女は子供を背中にくくりつけて、わたしを送って大学病院の門をくぐった。わたしは湿性助膜で動けなくなっていた。休職。入院。まる一年間妻は病院に通ってきた。子供は彼女の背中にくくりつけられながらどんどん成長していった。

入院して半年ほど経ち、やや小康を得た晩春のある日の日没後、わたしは病院をぬけ出した。線路ぞいに一駅、わたしは自分の家の生垣の角をまがって裏木戸を押した。裏庭をうずめて、茂り放題になっているマーガレットの白い大輪の花が、月のない夜の底に浮かび上がってなだれていた。庭に一歩踏みこむと、そこに妻が子供を抱いて闇の中に呆然と立っているのだった。星空を見ているのだ。わたしは近寄っていって、声もなく子供を抱いたままの妻を抱いていた。夜目にも白々と浮かんでいるマーガレットの茂みの中に立ちつくしながら、わたしは天国での家族の再会をしきりに思っていた。

半年ぶりで自分の机の前に坐って、お茶を一ぱいのんだきりで、わたしはまた病室にもどり、なにくわぬ顔で病人になりすましていた。そのわたしは、しきりにウィリアム・ブレイクの『天国における家族の再会』のエッチングを思っていた。「あれにはたしか子供は描いてなくて、夫婦が抱きあっていただけだったな」と思いながら。

それからさらに三年たったある七月はじめの午後、妻はいまにも降り出しそうなつゆ曇りの横浜港の桟橋の上で、そこの岩壁に横づけになって出帆をまっている氷川丸の上甲板を見上げながら、たえまなしに涙を目から流れ出させていた。五つになった長女の手をしっかりにぎりしめながら。

わたしのほうは全く疲れ果てて、早く船が岩壁を離れてくれないかと思いながら、無数にはりわたされた送別の、色テープの網目から、その涙でべしょべしょになった妻の顔を見下ろしていた。これからまたまる一年間の離別である。「おまえもしんどいかしらないが、こっちはもっとしんどいよ」とわたしは

読者の証し

なんでもないこと

佐藤健一

昭和二五年三月一日初版発行の粗悪な紙質の古ぼけた八木重吉信仰詩集『神を呼ぼう』の裏扉に、わたしは今、うすれかけた文字を見つめている。それはちょうど十年前の三月二〇日の夜、大阪のスラム街西成の下宿屋の二階で、畳にはらばってかきつけたものだ。

こんやは月のきれいな夜だ
春というのにまんまるい月がすんでいる。
あすはぼくの結婚式だ
ぼくはもう四時間もじっとすわって
なんにもせず　ぼんやりしている。
ぼくのおおみそか
うれしくもないし　むろんかなしくもない
ただぼんやりしている。
なにかがまたおこるんだ
ぼくの一生の中で。
希望もないが絶望もない
ただぼんやりしている。

次の日、昭和二六年三月二一日の春分の日の朝、わたしは七時過ぎ目をさますと、一張羅の紺ダブルの背広をきこんで、休日の行楽客がにぎやかしはじめた地下鉄で大阪駅に出て、神戸の姉の家に向かった。春先のうすら寒い曇り日だった。

その日一〇時半から、わたしの結婚式が、そこで行なわれることになっているのだ。九時過ぎ玄関に現われたわたしを見て、姉が言った。

「散髪ぐらいしといたらどおなの。おかしな人ね。ひげものびてるし。まだ一時間もあるから行ってらっしゃい」

わたしは駅前の散髪屋に出かけて行ったがあいにく休日の午前中とて満員のお客がのんびり待っていた。わたしもその仲間にはいって、新聞を読んで待っているうちに、姉の家の使の者が呼びに来た。花嫁一行がやって来たからすぐ帰ってこいと言うのだ。

やがて、妻が受洗した老牧師も来てくださり、肉親の兄姉だけの出席で、ささやかな結婚式なるものは三〇分ほどでおわってしまった。

牧師のすすめは、ルカによる福音書第一七章一一節以下の、一〇人のらい病人の物語であった。わたしはいま、その聖書の個所を読み返しながら、わたしたちの結婚式に来ていただいてから二年ほどたって、家庭集会からの帰途、路上にねこんでいる酔漢をたすけ起そうとして、突然拳で胸をつきあげられたのが因で、なくなった老牧師のことを思っている。地味な牧会者としての生涯に数多くの神の前での結合に立ち会い、いくつかの破綻の姿を見て来た人の、わたしたちのいささか奇妙な結合に対する深い祈り心を思ってみる。

結局は神にゆだねるほかはなく、人間のこざかしい忠告や、心配のむなしいことを知りつくした人の祈りが、このテキストを選び、今日の結合の、神の恵であることへの感謝を忘れてはならないというすすめとなったのではないかと考えてみる。

わたしは、その前年、いなかの学校を退職

■クリスチャン・ストーリー■

海峡を越える愛の招き

――韓国孤児の父・曽田嘉伊智さん――

「この国をおとずれる日本人は多いが…」と、韓国の人たちはそこまで言って口を濁す。第二次世界大戦終結までの、長い間にわたる日本人の搾取と収奪は、独立十数年の今になっても、この人たちには骨身にしみているらしい。それが忘れられぬほどにがい経験であるだけに、平和使節であろうと民間商人であろうと、自国に日本人を迎える韓国の人たちの感情は複雑のようだ。かつての、李承晩時代におけるようなはげしい反日感情は、表面的には見えないにしても、これに似た気持ちは、いまだ消しがたく、この人たちの胸の底に残っているらしい。

ところが、そんな韓国の人たちが、「わたしたち韓国人が、心からの感動をもって迎えた日本人はといえば、こんどのこの方がはじめて――」と言って、もろ手をあげて大歓迎した無名の一日本人がいる。曽田嘉伊智さん（九四才）がその人。

韓国の招きで、去る五月六日、ソウル（京城）に着いた曽田さんは、金相敦市長からソウル市名誉市民の称号を贈られた。

「戦前四九年にわたって、ソウルの孤児・難民を助けてくれた曽田さんにご恩返しをしたい。それが市民の気持ちです」

とは、そのときの金市長の弁だが、韓国からこのような公式のもてなしを受けた日本人は、この曽田さんがはじめて。

では、この曽田さんとはどんな人か、そして、「戦前四九年にわたって」のその働きとは――

記者は、曽田さんが韓国に渡る直前、兵庫県明石市の明石愛老園にこの人をおたずねしその隠れた一部始終を聞いてみた。

山口県柳井町の在に生まれ、徳山で塾を開いていた高島平三郎という、当時としては進歩的な教育者のもとで学んだ曽田さんは、すでに早くから一種の開拓者精神といったものを身につけていたようだ。外国文化の香りがもっとも濃厚だった長崎にはるばる出かけて行ったのも、そのあらわれであったろう。進んだ文化にふれながら、一方では丸裸で地下数千尺の重労働にあえいでいる炭坑夫の姿を見て、社会に対する強いいきどおりを持ったのもそのころだった。

そういう曽田さんは、まもなく青年らしい希望を抱いて大陸に渡った。香港、上海を舞台に、縦横の活躍をした。あるいは、台湾産の樟脳を売買する事業に手をつけ、台湾と大陸の間を盛んに往来する――こういったふうに、青年曽田さんの活躍はめざましく、生活はじつに恵まれた豊かなものであった。

だが、そうした得意の絶頂のなかで、曽田さんは、ふとしたことからキリスト教にふれた。そして、聖書のことば通り、目先の欲望にしたがって、地に宝を積むよりも、人生の

例の通りの自分勝手で舌打ちしていた。一年間、妻の航空便はいつもきまって子供の幼稚園への送り迎えのことであった。しかし、わたしとしてもとりたてて書いてやるようなこともなかった。しかしわたしは、いつも夜になると、大阪のはずれのアパートで、食卓に向かいあって、朝の祈りをわたしのためにささげてくれている妻と子供のことを思い、太平洋をへだてた時差を計算してみていたのだった。

この世界に、地球上での祈りの同時性だけが唯一の信頼できる事実でもあるかのような感じになっていたのだ。

帰国してから三年たった。わたしたちにとっての十回目の春分の日も、毎年の例のように曇ってうすら寒かった。わたしたちは一〇年前にもそうであったように、なんの祝いもしなかった。てれくさいのである。「なんでもないこと」を大仰に言ってみるのが、ふたりともてれくさいだけなのだ。愛しているとかいないとか、そんなことは実はどうでもよいことなのである。夕食後、わたしは妻に言った。「とうとう一〇年たっちゃったね。ついこないだみたいな気がするけど」妻はぼんやりこたえて「そうね」と言った。

わたしは、エルサレム途上のイエスに出会って、祭司のところに行って、からだを見せるように言われ、その途中できよめられいやされている自分に気がついて引きかえし、イエスに感謝をささげた、らい病人のことを思ってみた。

一〇人ともきよめられていたのに、感謝をささげにイエスのところに引きかえして来たのは、他国人のサマリア人ひとりだった。

あの老牧師はわたしたちふたりに、「この九人の忘恩者たちのようにならず、ひとりのサマリア人のようであってほしい」と言われた。しかし、わたしたちはどうもやっぱり九人の仲間であるような気がする。いや妻はあのひとりのサマリア人のようであり、わたしだけが、九人の忘恩者のともがらかもしれない。天国で、老先生や妻の母親の心配そうな顔が、わたしたちをみつめているような気がする。しかし、ともあれわたしたち夫婦は、イエスへの感謝の一点でのみお互の「愛」を成長させ得ると信じている。それはわたしたちが人生の途上で、ともにイエスにめぐりあい、いつかお互にいやされていることに気づいたとき、お互の中に燃え出た、イエスへの感謝が、ともにイエスの前にお互を導いてゆくことを信じあっている、といった「愛」であるからなのだ。

「きよめられたのは、十人ではなかったか。ほかの九人は、どこにいるのか。神をほめたたえるために帰ってきたものは、この他国人のほかにはいないのか」とのイエスのなげきが、たえず、わたしたちを結びつけてきた。ともにかつてやんでいた者として、ともにイエスの前でいやされた者として、わたしたちは一〇年前の結婚の朝、老牧師の口を通してわたしたちによびかけたイエスの同じことばを、一〇年間ききつづけてきた。

しかもわたしたちはふたりとも、いやされていながらやっぱり病んでいるのだ。病んでいるのに、もはやいやされてしまっているのだ。イエスに出会ったというのは、全く不思議な事実である。愛とは「そだつふしぎ」なのだ。

うつくしいこころがある
恐れなきこころがある
とかす力である
そだつふしぎである

八木重吉は「愛」をそう歌った。この「愛」をキリストと書きかえてみると、この詩は万人の目にあざやかな「イエス」の肖像となって現われる。

「とかす力」それによってのみ、この奇妙な夫婦も一〇年間の成長を追ってくることができたのだ。

（「愛するということ」応募原稿）

<信仰に生きる6>

あるバタヤの生活記録

——最下層に生きるキリスト者——

水蓮は泥沼に咲く

戸口にぶらさがった木の看板だけが妙に新しい。つい先ごろ、古いのと取りかえたのだろう。墨黒々と筆太に書かれた文字が三つ——いわく「更生寮」。

それだけで、あとは何もない。全体が真黒に汚れて、小さな家内工場の廃屋といった感じだ。暗い戸口からはいると、右手には臭気の強い、共同使用らしい便所、その奥隣りが、ほとんどなんのへだてもなく台所らしい。と言っても、暗い土間に、場末の飲み屋のような茶ぶ台と横長の縁台が壁に寄せてあり、あとは、すっかりひびがはいったり欠けてしまったりしたコンロが、捨てられたサレコウベのように、一〇個ばかりズラリと並んでいるだけ。

土間続きの暗い通路から奥をうかがうと、どうやら、その通路をはさんで、両脇に小さな部屋が並んでいるらしい。赤ん坊の泣き声が、障子の破れから洩れてくる。

「このガキったら、乳飲めってえのに、泣いてばかりいて。かあちゃんだっていいかげんやんなっちゃうよ。ふんとうに。」

——清水西宏さん（五二才）は、この家の住人だ。三三年四月にここへはいったというから、もうまる三年。あのどなり声のかあち

ほんとうの目的を見出して、さびたり消えたりすることのない真の宝を天国銀行に預金するといった、方向を転換した生きかたこそ人間において正しいということをさとった。三〇代の働き盛りだった。

明治三八年、ちょうど日露戦争の終った年心機一転した曽田さんは韓国に渡った。

かくして、同国に滞在すること四〇年余というから、言ってみれば、韓国は曽田さんの故郷みたいなものだ。

ソウルに住んだ曽田さんは、はじめ、そこのYMCAで日本語の教師をしたり、聖書の普及員や、キリスト教書店の経営などをやったが、六〇才になってからのちは、もっぱら孤児の面倒をみる、保育園の経営にうちこんだ。孤児は多かった。底をついた貧乏が広がっていた。なにしろ、韓国の人たち全部が大きな難民だったのだ。そんななかで、いたいけな孤児を世話する保育園の役割りは大きかった。

まず、鎌倉保育園朝鮮支部というのが経営難で苦しんでいるのを見た曽田さんは、それをそっくりゆずり受けて、再建にのり出した。それは、曽田さんにとっても冒険だった。が、当時の金で一口五〇銭の募金をしてはじめられたこの「冒険」は、たび重なる困難にも負けずに成長した。この保育園で育てられた孤児は、ついに一〇〇〇人におよんだというから、一民間人の働きとしては驚くべきものであったにちがいない。じじつ、この保育園の出身者で、現在日本国内に住んでいる人がいるし、今もって、ソウル周辺には、曽田さんを慈父のようにしたっている人々が数多くいる。

だから、終戦後すべての日本人が強制的に内地に送還されたときも、曽田さんだけはその人たちの希望でソウルにとどまったのだ。

こういう曽田さんは、言うまでもなく熱心なキリスト者、韓国にいても、祖国日本に福音を伝えて、戦後の再建に奉仕したいという悲願があった。昭和二二年の暮、その願いのもとに内地に帰り、当時牧師のいなかった小豆島の教会で、熱心に伝道に励むうち、まもなく朝鮮戦争の勃発で日韓関係も悪化、曽田さんはソウルに帰れなくなってしまった。そして、その間にソウルに残っていた夫人が、ひとりさびしく昇天した……

まことに痛ましい話だが、曽田さんは屈しなかった。小豆島の伝道は、やがて新しく赴任してきた若い牧師とともに、自分のことのように真剣にやった。ソウル時代の友人であるY牧師が経営する、現在の明石愛老園に身を寄せながらである。

こういうところへ、こんどの正式の招待があったわけで、さすがに曽田さんはうれしかったらしい。招待を申し出たのは、ソウル市の財団法人永楽保隣院、かつて曽田さんが経営した場所にある保育園で、現在も一五〇名あまりの孤児が収容されている。曽田さんに昔の思い出をたのしんでもらおうと、部屋を改造したりのあたたかい心のくばりよう。

この話が持ち上がったのは昨年一月、その四月起きたあの革命騒ぎにも、この計画は中断されずに進んだ。曽田さんを知る在日韓国人の強い実現への願いもあった。

曽田さんは九四才の高令だから、耳はやや遠い。が、見たところじつに元気そうだ。看護婦さんの通訳に助けられての記者の問いには、にこにこと笑って答えてくださる。大きな耳と、白いあごひげがみごとで、サンタクロースとはこんな人と子供に見せれば、そのまま文句なしにうなずくかもしれないようなやさしい顔だ。そのひげをふわりとなでて、曽田さんは最後にこう言った。

「昔、育てた子供たちが成長しているのに会えることと、妻の墓にまいることができるのがうれしいです。このことが、少しでも両国の親善に役立ち、世界平和のためになれば本望です。あちらでは永住させてくださるおつもりのようですが、わたしはやはり日本に骨を埋めたいと思います」

焼チュウを買ってこい」

とどなると、入墨が、

「ここはな、当世ばやりの民主主義のルールで多数決といくんだ。オイ、買ってきな」

飲み直すほどに、飲みほすほどに、隣室からも、またその隣りからも、焼チュウに酔いしれた怒号と嬌声が、狂騒曲となって隅田川のかなたに流れていく。

色あせたせんべいぶとんにくるまって、年輩の男がつぶやいた。

「おめえにも、そのうちみんなのあの気持ちがのみこめらあ」

このことばの意味するものは、しがないバタヤ稼業の、世のあざけりとさげすみのそれに対する、力なくはかない反抗のそれではなかろうか。

たのしい獲物の選分

翌日から、わたしはバタかごを背負い、バタヤの第一歩がはじまった。行きかう人の視線に目をそむけながら、ゴミ箱の蓋をあける。一瞬むッと鼻をつく腐敗臭、無雑作に捨てられた紙屑、残飯の山、このなかから更生可能の廃品を拾いあげる手は無残にふるえる。

それから朝は未明に、夜は紅灯のさんざめきをよそに、路地から路地裏へと、ゴミ箱をあさりながら苦闘を続ける。それはあまりにも労多く、報いられることの少ない憂愁のあけくれである。

ある日、もの思いに沈むわたしに、ひとりのベテランが

「オイ、おめえは紙ばかり拾ってたんじゃ食べられめえ、ときにゃ早番でヒカリものといくんだ」

早番とは、法の網をくぐるヤバイ（盗み）を意味し、ヒカリものとはいうまでもなく銅・真鍮など、紙類の何十倍もする高価なものだ。

その夏も過ぎて、しのびよる秋色が、隅田公園の木々をいろどる十月のはじめ、わたしがシベリヤでの風土病が再発して病床にあったとき、部落をゆさぶる大事件が突発した。それは、ベテランのふたりが、共犯である町工場に忍び込んで、真鍮製品の窃盗現行犯でH署に逮捕されたことである。すねに傷もつ

ゃんはじめ、酔うと酒くせの悪いその父ちゃん等々、ここの住人のすべて洗いざらい知りつくしている。

「わたしらは、これで案外いい人間なんです。同じ屋根の下で、同じ商売やってれば、もう腹の底までよくわかります。」

そう語る清水さんは、まるで、生まれつきここの住人でもあるかのように自然だ。この人が、旧制の大学出であり、もと東京家裁の調査官だったなどとは、とうてい思えない。いわば、それくらい、清水さんには、この稼業が板についているのだ。

清水さんの稼業——それはここの住人全部がそうであるように、時に拾い屋ともよばれるバタヤだ。朝は朝で早く、夜は夜で、寝静まった街のなかを、こっちのゴミ箱、あっちのゴミ箱とあさりまわる。背にカゴを背負ったあれである。「屑ウーい、おはらい」と言ってのんびり歩き、ゴミ箱などけっしてあさらないクズ屋とはちがう。言ってみれば、世間の人が完全な不要物として捨て去るゴミタメを最大の生活資源としているところの、田園の汚物処理者ゴミムシやシデムシみたいなのが清水さんの職業だ。

とはいえ、お会いして数分もたたないうちに感じたことだが、清水さんは、どうもただのバタヤさんではない。つまり、この世界の人たちすべてがそうであるように、浮世の空っ風に吹き寄せられて、しかたなくそうなったというような、バタヤという生業にまつわるあきらめとかひけめとかいったものが、この人には全然ないのだ。

なにかいわくがありそうな……さぐり出した記者が手にしたものは、四〇〇字詰原稿用紙七八枚にびっしり書かれた、清水さんの生活記録である。題して「最下層に生きて」。

泣いたバタヤ一年生

——氷雪シベリヤの抑留生活から復員して妻子との離別を秘めて働いた、東京家庭裁判所調査官の職を去って、隅田川のほとりなるバタヤ部落に住みついたのは、昭和三三年四月末のことだった。

バタヤ部落、それは社会の最下層に沈澱する貧しき人々の群である。わたしはその澱みの底に深く沈潜して、その人々の血の出る叫びをきき、汗とほこりにまみれ、残飯をともにし、南京虫に寝もやらず語り明かした夏の夜、すきまもる寒風に身をすりよせて暖め合った冬の朝、四季折々に人生の哀歓をなめつくして、早くも二年が流れ去ろうとしている。

と、これは、この手記の第一章「出会いの日まで」の書き出しである。「出会い」とは、なにに出会ったのか。そして、それまでの、バタヤとしての苦しい歩みは……以下、もう少し、この手記を読んでみよう。

——わたしがこのバタヤ部落に住みついたころ、多くのバタヤたちは、青白いインテリのなれの果て、三口坊主で逃げ出すであろうと冷笑し、そのふるまいは敵意さえみせて辛らつをきわめた。

薄暗い三畳に、上下四個のベッドが設けられたねぐらには、すでに二人の先輩があぐらをかきながら一蔑を投げる。目にひとくせある二四、五才、慎太郎刈のあんちゃんが

「オイ、新入り、酔いざめのおひやを一杯」

三〇前後、胸に入墨をのぞかせたのが

「オッサンよ、たばこを一個買ってきな、立替えてな」

四五、六、いんけんな目つきが過去の罪業を示すかの男が、

「オイ、おめえはどこのムショ（刑務所）を出て来ただ、ヤマ（犯行）はなんだ、マエ（前科）はいくつだ」

と、頭から前科者ときめてかかるところに、この人たちの性格形成や特異性がうかがわれる。わたしはこの雰囲気から、かつての軍隊地獄を想起してりつぜんとした。でも従順に「ハイ、ハイ」と、命ぜられるがままに、彼らのしもべたることに甘んじた。慎太郎刈が「オイ、新入りの歓迎だ、飲み直そう、オイ

教会の前を足どり軽く、さあ、仕事だ！

か」と食ってかかるし、こちらは「仕事ができなけりゃ食っちゃいけねえ、おれたちの生活をどうしてくれるんだ」――どっちにも一理ある人夫とバタヤとの対決は、まさに嵐の前の静けさであった。

……せんかたつきた清水さんが、ひとり祈ったのはそのときだった。しかし、自分だけ神に祈っていればそれでよいというのがキリスト者ではない。祈りは神の答を求め、キリスト者として生きるとは、その答を身をもって生きることだ。清水さんは、殺気をおびた人々をなだめ、現場の所長に会いに行った。話はなごやかに進み、事態は円満に解決した。「雨後、晴天の秋空にも似た思い」とは、まさしく清水さんの実感だったろう。手記はさらに続く。

――それから一ヵ月たった一二月のはじめ地下鉄工事現場に放置してあった小さな鉄材が、何者かに盗まれた容疑で、部落での顔役で、終始わたしにタテついていた山田がM署に拘引された。わたしは山田の身柄引取にM署に出頭した帰途、屋台店でうどんを食べながら、山田の身の上話に耳を傾けた。山田には妻と、すでに就学年令に達した男子があった。

「清水さん、あの子はもう八つにもなるんだがまだ学校にも行けねえ無籍者なんです。あの子のことを思うと、夜もろくろく眠れねえんですよ」

と語るこの人は、いつもの野性はかげをひそめ、よどみがちに語るその目は涙にくもり、まったくの別人のようなよき父、善意の人だった。わたしは驚いて反問した。

「エエ、無籍だって、出生届がまだ出てないんですか」

「ハイ、ガード下や公園などを転々として放浪の身じゃ、役所の門もくぐれねえ」

と、節くれだったこぶしで両眼をこすりながら語りつづけた。

「ついでだから申し上げますが、じつはまだ女房のやつも夫婦の届が出てないんで、野合のようなもんでさあ」

一〇年近くも同棲し、一子さえありながら、法律上の夫婦が成立しない内縁関係である。

連中は、きょうきょうとして、部落はてんやわんやのていたらくであった。そのうちにあるひとりが、悟り顔に言い出した。

「こりゃ、だれかサツに密告したにちがいねえ。だとすりゃ、ひとりぼっちの清水のやつだ」

「そうだ、そのものずばりだ、あいつをつるし上げろ、追い出せ」

根も葉もない虚空をつかむような悪意の中傷は、怒濤のように部落にみなぎった。ただひとり、真実を求めて孤高に生き抜いたわたしは、喧々たる悪罵、号々たる批難と、血迷える暴力に身をまかせながら時の過ぎるのを待った。その夜、寝もやらずベッドに泣き明かしたわたしの脳裏にひらめいたのは、学生のころなつかしんだ詩聖ゲーテの「涙でパンを食しない人、悩める夜々をベッドで泣き明かさざりし人は、神を知らない」のことばであった。その一句をじっとかみしめながら思ったことは、今のわたしはベッドで泣き明かしながらも、ゲーテのいう神を知らない。知らないのみか知ろうともしない。求むべき何ものもないわたしは、いったいどうしたらよいのか、自信の喪失と自己嫌悪の情が交錯して、非常にわたしをさいなむ。迷いあぐんだあげく、きょうかぎりでバタヤをやめる。そして、部落を引きあげようと決意するのだった。

光あり、ともに進め

清水さんがあたり一帯にはり出された賀川豊彦大伝道会というポスターに目をとめ、近くのH教会に行ってみたのは、そのあくる日のことだった。そして、それからというもの、切実な生きる実感をともなって、清水さんの教会がよいがはじまったのだ。やめようと思ったバタヤも、もう一度やりなおしだった。

こうして、丸一年の月日が流れた昭和三四年一一月のある日、H教会の洗礼式に列した数人の受洗者のなかに、清水さんの姿があった。失意のバタヤ清水さんは、一年の間に、バタヤでありつつ、もはや絶望することのないキリスト者として生まれかわったのだ。

手記の第二章、「隣人の友として」をしばらく見よう。

――洗礼を受けた夜、キリスト者として静かに瞑想したことは、この部落活動においてよきサマリヤ人として隣人愛の実践は何からはじめるべきか、この人たちのなかにあって指導的な主体的存在たるためには何をなすべきか、そして、その実践と確信を何に求むべきかに思いあぐんだ。

それは、生ける信仰に立って、まず聖書を読み、聖書に生かされ、聖書に生きるということであった。わたしは、このような啓示を得て、ひたすらに聖書をひもといて与えられたみことばは、「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネによる福音書一三章三四節）であった。わたしは、もっとおのれを低くして、ここの人たちを愛し、愛し合わなければと思った。かつて賀川先生は、貧民窟の生活を述懐して、〝貧民は尊敬と愛で近づくべきものです〟と言われたが、まさに至言である。

それから幾日かして、わたしに訪れた最初の試練は次のケースであった。都営地下鉄、押上―馬込間工事に付帯する下水工事が、わたしたちの部落の前通りの道路全面に大規模に施行された。わたしたちは、工事の公共性を認めつつも、生活を守るためには、わたしたちの仕事に支障の少ないようにと、都の水道局長に嘆願書など出して善処を要望しておいたが、現場の工事責任者や人夫たちは、急速にこれが完遂を而上のこととして、夜を日についで突貫工事が敢行された。ために歩行さえ困難となり、大八車などの出入りはまったく不可能となり、必然に生活の脅威にさらされた。人夫たちは「おれたちは、上からやれやれというからやってるんだ、文句があ

に帰郷した山田が、満面に笑みをたたえてとび込んできた。

「清水さん、よろこんでください。こんど父の年忌に集まった兄弟たちが相談した結果おめえもいつまでもバタヤでもあるめえからここらで足を洗え、なんとか食っていけるだけの田畑をやるから、帰ってこいって……」

そのまなざしはよろこびと真実にあふれている。

「あんたがいなかに帰って百姓に？」

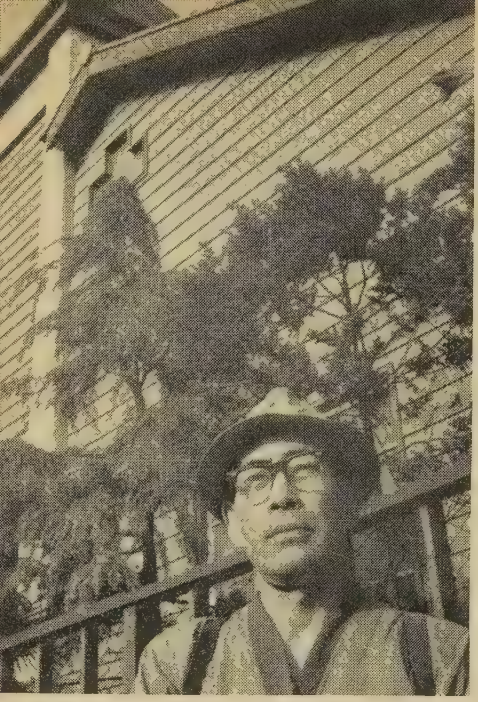
「そうなんです、おれもおやじの生前にゃ、うんと親不幸して勘当同様になって家をとび出して、親の死に目にも会えなかったんです。それがどうした風の吹きまわしか、降ってわいた田や畑、わしゃ夢じゃねえかと……」

ここまで語り続けた山田は、わたしの顔をじっと見つめながら、こう言うのだった。

「これが、ほんとうに清水さんのいう神さまのおめぐみっていうでしょうか」

山田が去ってから、わたしは静かに山田のこの一ヵ年を回想した。あの男は、妻子の籍の問題が解決してから、まったく重荷をおろしたように明るく生気をとりもどし、性格も変わり、精励で親切なよき父、よき夫、よき隣人となった。それは、都内に住む実姉からつぶさに郷里に知らされたのであろう。

今、わたしの大いなる願いは、この人に続く多くの人たちの、正常な社会生活への復帰と、その更生のよきおとずれのそれである。



さて、きょうのコースは……

この祈りに生きる

そこは、都水道局墨田ポンプ場といった殺風景な建物を大きく目の前にしたさびしいところ。「更生寮」の看板だけが妙にま新しい。

この家の住人は、男女子どもあわせて二〇人。清水さんが、手記で「部落」とよぶのもつまりはここだ。なるほど、隅田公園は目と鼻の先だ。浅草のにぎわいも、隅田川のドブ臭い匂いも——。

——シベリヤから復員なすったそうで……

「ええ、二四年に引き揚げです。郷里へ帰ったら、わたしを死んだと思った妻が、よそに再婚してましてね。いまさらしょうがありませんから、妻子とも泣き別れです。それから東京家裁の調査官を、足掛八年やりました。それから、それをやめてここへきたんです」

——すると、やはり奥さんとのことが心の傷にでもなって、人も世もあきらめて……

「いや、わたし昭和一五年四月に日大の社会学科を出ましたが、その前の法科で学んでいたときから、社会事業に奉仕していたもんですから、自分としてはこれが長い願いだったわけです。ともに体験しようという……」

——どうしてここへいらしたんですか？

「大きな部落より、小さなところのひとりひとりの友となってと思っていましたから」

——でも、いきなりバタヤ生活とは、さぞおつらいことで……

「家裁をやめたのが三二年八月、それから翌年四月にここにはいるまで、わたしニコヨンやったり、日やといやったりしましたから、

暇なときは、近所の子供と……

と、わたしはあたかも、主の命令ででもあるかのような使命感をおぼえ、力強く言いきった。かつての日、東京家庭裁判所で実地に修得した家事調整の法律上の手続きが、今このドン底の人たちのためにお役に立とうとは夢想だにしないことであった。

……清水さんが、このようにして直面した複雑なこの人たちの過去は、なかなかたいへんなものだったという。事情を明らかにしていく過程には、裁判所や法務局に呼び出されるという苦労もあった。が、このことを身に引き受けることが、清水さんの〝祈り〟だった。

きり開かれた道

——陰惨な冬が去って、隅田公園の桜もほおえむ新入学の四月がきた。山田のこどもも一年おくれたが、新しいランドセルを背に喜喜として通学しはじめた。毎朝部落のはずれまで見送るこの父と母の顔はかぎりなく明るく、人並みに通学できたよろこびに泣いている。

これも四月、第二日曜の午後だった。わたしが教会から帰るのを待ちかねたように、古顔の下山が、

「清水さん、今日これから、隅田公園でみんなで花見をすることになったんです。あなたの帰りを待ってたんですよ」

と、多くの仲間たちは拍手をもって迎えてくれた。わたしは、今までこの人たちのためになにも果たしていないのに、こんなによろこび迎えてくれたこの人たちに、今後どう報いたらよいのか、この仲間のためにこそ身を投げ出して、愛のみわざに奉仕させていただこうと誓いを新たにしたことである。

それを転機として、部落の人たちとの心の和解、親近感、ほんとうの交わりというようなものが、わたしをかこむひとりびとりの胸にきざしはじめた。仕事への意欲は、かつてない昂揚を見せてきた。わたしが教会に行きはじめてから人知れずやってきた一部の清掃など、われ先にとやるようになった。焼チュウに酔いしれる人も見られない。競馬やパチンコ、血液銀行なども影をひそめてきた。警察とはまったく無縁となったのみか、犯人逮捕に協力で警察署長から表彰された者は何人もいる。

……清水さんによれば、このことは強制や命令でなく、自然発生的に各人においておこなわれたのだそうだ。ふしぎといえばふしぎだが、手記の第二章「隣人の友として」は、次のようなうれしいニュースで結ばれている。

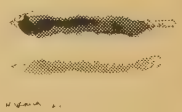
——一一月二九日（記者註＝三五年）の夜のことである。一〇何年ぶりかで亡父の年忌

わたしは、自己顕示性の強い無鉄砲だったこの男に、このようなかくされた人生哀話が秘められていようとはまったく信じられぬことだった。

「よし、わたしがいっさいやってあげましょう。安心しておまかせください」

本を読みましょう

――死と生をめぐって――



石島三郎・浅野順一
佐古純一郎　共著
◇『死と生をめぐって』
椎名麟三著
◇『私の人生手帖』
宮本武之助著
◇『聖書は何を語るか』
隅谷三喜男著
◇『近代日本の形成とキリスト教』

「レジャー・ブーム」「レジャー時代」と耳慣れないことばがはんらんしています。レジャー利用の番付が新聞、雑誌を賑わしていますが「本を読みましょう」などとは、虫眼鏡で探しても見当たりません。

パチンコの製造費が一千億にくらべて、図書製作費は千五百億とかいうことです。

ところが、パチンコの球がとめどきどこかの穴にはいって、ジャランと大きな音がするのにもまして、地球のどこかで毎秒ひとりふたりと生から死に移っています。自然死の他に外因死をみると自動車事故から中毒、溺死、自殺に至るまでたいへんなものです。とくに自殺は毎年増加して、外因死の24パーセントにも及んでいます。さらに自殺の原因では厭世、病苦が三分の一を占め、精神錯乱、家族不和がこれに続いています。(厚生白書による)

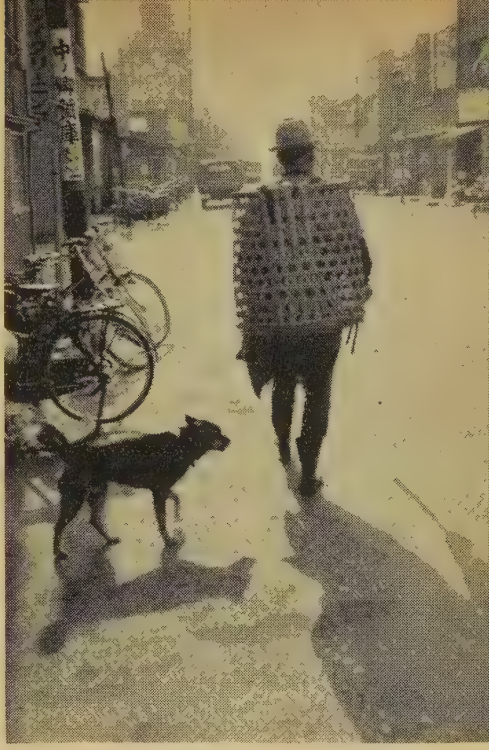
このような状況の中で読むに最も適しているのが『死と生をめぐって』でしょう。石島三郎先生独特の「脅迫状」に始る七つの手紙は「死ぬこと、生きること」についての明快な解答です。死の克服への努力が身近に感じられます。浅野順一先生は聖書学者として漫談的に「死とその後」について語りますが、ご自分の愛する幼児を天に送った父としての体験には、思わず心を締めつけられ、厳粛な思いにみたされます。また佐古氏の『自殺論ノート』は短かいものながら信仰者として、自殺は「まったくイエス・キリストにふさわしくない行為なのだということをきびしく恐れ」させるたいせつな主張をふくみ、とくに若い世代に一読をお奨めしたいものです。一度は直面しなければならないことがらなのですから。

母の死を回想しながら「愛というものは、何らかの離別においてしか目覚まされないという不幸な一面をもっている……この不幸は自分ののぞみと相手ののぞみとが矛盾なくいつも根本的に一致しているときに感ずる愛の喜びを裏付けているようだ」(同書一八ページ)と語るのが椎名麟三氏の『私の人生手帖』です。楽な気持ちで死について、神について、生活について考えてゆく一つの杖とも言えるでしょう。

人生について学ぶ最上の書物は「聖書」であって、世界のベストセラーと言われますが、案外「論語読みの論語知らず」の方が多いようです。神学大学で哲学を担当し、東京女子大学で聖書を教えられる宮本先生の新著をこういう方方のために取り上げました。とくに実存主義などと口角泡をとばす方々が、聖書は現代人に、何を語るかを学ぶよい参考となりましょう。

最後に『近代日本の形成とキリスト教』が残りました。信仰と理性とが必ずしも統一されていない日本の教会において、信仰の歴史を教会の歴史として展開し、科学的に探究することによって、教会の課題を解く重要な鍵を握ろうとするのが、隅谷三喜男先生の研究の成果です。人の性格(パーソナリティ)が、その成長過程に形成されるように、日本の教会の性格も、近代日本の歴史とともに形成されてきました。信仰は社会的存在から超越するとともに、それによって制約されていることを、この書物の中にしみじみと感じさせられます。

(鵜飼勇・銀座教会牧師)



この道に光あり

それほどナンですな、水が低きに向かって流れるように自然でした」

清水さんは、明治四二年生まれだから、ちょうど五二才。髪にかなりの白毛が目だつ。不似合いなま新しい看板が気になって、「更生寮」の意味をおたずねしたら、「都民生局で、浮浪者その他を、保護更生させる場がこの寮」なのだそうだ。だから、フトンはじめ、商売用の大八車やカゴなども、都から貸与されたものだし、この寮にいて使う水道、電気代は毎月都に納めるが、それもひとり一ヵ月〇〇円という安いもの。その〇〇円がいくらであるか、あまりの安さのせいか清水さんは話さなかった。

バタヤさんの日課は、明けがた三時ごろが仕事はじめで、だいたい午前九時ごろには、ひととおりのコースを拾い終って帰ってくる。そして収獲物を種類や再生の可能性にしたがってえりわけるいわゆる「選分」に午前中をついやす。午後はひと休みして、夕方になってまた三時間ほど、多くは四時ごろから夜の六時か七時ごろまで出かけてくる。このほかに、夜間コースがある。清水さんがとっているのがそれだ。つまり、夕方六時ごろ出発し、真夜中の一二時から一時まで歩いてくる。清水さんはこの深夜コースが好きなのだそうだ。人生の悲哀・寂寞・人間失格・終着駅、およそそういったことばの意味が、実感としてひしひしとわかるのは、寝静まった深夜の街を行く、こういったときだという。

こうして、清水さんが一日に歩く距離は、向島から押上、ときには洲崎方面まで、カゴを背負ってざっと二〇キロ。しかし、紙類の値段は戦後最低、ひところの三分の一に下落しているので、バタヤさんは苦しいそうだ。

清水さんには、二匹の愛犬がいる。クロと呼ぶのと、年令の上では兄さん株にあたる黒次というのと。仕事で出かけるときは、どこへでもいっしょに行く。犬君たちは、清水さんがときどき昼間の仕事に出かけるのが最大のよろこびらしい。三人、いや、ひとりと二匹が、春の陽ざしの街なかを、ぶらりぶらりと行くさまは、よそから見ても美しい。

記者は、近くにある、清水さんが属する日本基督教団東駒形教会にお寄りすると、六五才になるというそこの牧師は、清水さんのことをこんなふうに言うのだった。

「あの人は、特別の生活をしているというより、キリスト者として推せんできますね。身をもって無言の伝道をやっています」

信ずることは生きること、そして、それは必ず〝もろともに〟という方向をとる。

「きたる東京オリンピックには、ゴミ箱の地下処理などで、われわれの領域が狭められるんです。これをどうするか。できれば、ここだけでなく、バタヤ全体の将来を考えることがわたしの祈りです」

寮の横の、空地みたいな仕切り場や、ずらり並んだ大八車に目をやりながら、清水さんはそう語るのだった。

（撮影　児島昭雄）

宮本　わたし、このあいだボーナスもらってすごく税金とられて、フンガイしちゃった（笑）。

石島　フンガイしない人はないな。（笑）

及川　わたしだって、国税庁につとめていたからって、税金まけてもらってるわけじゃない。（笑）つらいですよ。しかし、とられるって考えがいけないですね。これによって社会が維持され、自分たちも守られているんですから。

石島　（宮本さんに）新島の先生しっかり。

宮本　わたし、ミサイル基地反対のオルグとして、新島に行くとき香奠もらって……。死ぬ覚悟で行ったんですが、国のやることは、ずるいんですね。ミサイル基地設置に賛成すれば、かわりに港をつくってやるって言うんです。でも、かわりになんて言わなくても、都の予算では、四年前に、港の分としてとってあるんです。向こうへ行ったら、賛成派や右翼の人たちが、お前ら何しに来たって言うんで、税金の使いみちを見とどけに来たって言ったんですよ。税金をおさめるのが義務なら、その使いみちを見とどけるのも義務ですから……。

及川　たしかに、われわれは、税金の使いみちを監視することは、ヘタですね。

石島　間接税なんか、大金持ちも貧乏人も、おなじフタンで、そいつがあがる。まったく平等だね。（笑）

上川　及川さん、割り当てに不公平はないんですか。

及川　だいたい、よく調べてやりますから。

宮本　こないだ、一万六千円以上の収入がある者だけの住宅申込受付がありました。それは応募資格をうけるための申込みで、しかも補欠の受付なんですね。行ってみたら赤ん坊を抱いた人や、疲れきった顔の人たちが、たくさん来ていて、わたし、ひとりでも遠慮したほうが、この人たちにあたる率が多くなると思って、帰って来ました。千住あたり、へやがせまくて、赤ちゃんが圧死する。なんとか、税金で、住宅たててもらいたいですね。

石島　自衛隊なんかには、ずいぶんつぎこんでいるのにね。

政治的権威

金子　さっき、及川さん、国には従え、って言いましたが、そこんとこ、疑問がありますね。ここにある〈権威〉というのは、政治的な意味ですね。

及川　ローマ帝国でしょう、ここでは。

金子　そうすると、臣民はローマ国権に従えってことになりますが、それは、まちがいじゃありませんか。

石島　と言うのは？

金子　ローマ人にはいいにしても、そのほかのものには迷惑です。

及川　いまは、べつにローマ帝国にこだわらないで……。

金子　聖書にこう書いてあるからって、税金でも徴兵でも、国家のいうとおりやるんだとすると、おかしいんじゃないですか。

石島　支配階級には、つごうがいいな。従えこれは神の教えだぞ、ってわけで。ところで、権威の所在はどこなんだろう。

金子　警察力ですよ、最後は。

石島　四節に「剣をおびる」ということばがあるように、権威と権力はむすびついているんだが、その奥にあるもの……。

上川　アイヒマンの裁判で、もとをたずねていけば、上の上があって、ヒトラーが最後にある。出どころがわからないで、命令にうごかされているんですから、生きているというのは、どういうことになるのでしょうか。

宮本　いま力のあるのは自民党でしょう？その背後にある黒幕は財バツ。

金子　ほんとに最後の権威は、主権在民っていうから、国民にある。

石島　ほんとにそうなれば、文句ない。

権威への反抗

金子　ぼくね、さいきん思うんだけど、権威

《聖句をめぐる座談会(6)》

権威に従え

(司会) 石島三郎

金子光邦
(19)
学生

及川経也
(35)
公務員

上川恒子
(60)
主婦

宮本倫子
(24)
事務員

〔出席者〕

〔聖句〕

「すべての人は、上に立つ権威に従うべきである。なぜなら、神によらない権威はなく、おおよそ存在している権威は、すべて神によって立てられたものだからである。したがって、権威に逆らう者は、神の定めにそむく者である。そむく者は、自分の身にさばきを招くことになる。いったい、支配者たちは、善事をする者には恐怖でなく、悪事をする者にこそ恐怖である。あなたは権威を恐れないことを願うのか。それでは、善事をするがよい。そうすれば、彼からほめられるであろう。彼は、あなたに益を与えるための神の僕なのである。しかし、もしあなたが悪事をすれば、恐れなければならない。彼はいたずらに剣を帯びているのではない。彼は神の僕であって、悪事を行なう者に対しては、怒りをもって報いるからである。だから、ただ怒りをのがれるためだけではなく、良心のためにも従うべきである。あなたがたが貢を納めるのも、また同じ理由からである。彼らは神に仕える者として、もっぱらこの務に携わっているのである。あなたがたは、彼らすべてに対して、義務を果たしなさい。すなわち、貢を納むべき者には貢を納め、税を納むべき者には税を納め、恐るべき者は恐れ、敬うべき者は敬いなさい」

(ローマ人への手紙一三章一―七節)

税をおさめよ

及川　おわりのほうに「税をおさむべき者には税をおさめ」と書いてありますが、国税庁づとめのわたしとしましては(笑)、やはり国家できまったことですから、反対自体はいいとして、おさむべきだと思いますね。国家の権威も、いちおう神のさだめられたもの、神に存在をみとめられたものなんですね。

石島 あなたのは、キリストの権威をおそれて、世の権威をおそれないという……。

宮本 ええ、聖書のことばは、いろいろですから、金子さんのように、これはちがうんじゃないか、と思われる点があっても、いいと思うんです。処女降誕なんか、よくわかんないし、なんか人に言われると、ますますわからなくなる。わからないことや、おかしいと思うことあっても、聖書ぜんたいをとおして迫ってくるものがある。それでいいんです。わかんないことはあっても。

秩序

石島 聖書には、ねじけ者の主人にも従え、なんて書いてあるところがある。

金子 そうなると、もう次元がちがうって気がしますね、信仰と現実との……。

石島 夫に対しては、「妻を愛せよ」とすすめているが、妻には、「夫に従え」といってある。根本には、なにか神による秩序といった考えがあるんだろうが、当時の社会体制の反映もあるんじゃないだろうかね。

及川 つくられたもののなかには、神の秩序があるんじゃないでしょうか。

金子 すると、現存するものはすべていい、ってことになりゃしませんか。

石島 そう。現状維持派には、とてもつごうのいいことになる。しかし、現存秩序をそのまま固持しようというのでなく、それでも、やはり、ある秩序が必要じゃないの。はやいはなしが、いま社会秩序がメチャメチャになったら、キミたち、うちへ帰れやしない。殺し屋やドロボウが、自由にあばれまわったんじゃ、かなわない。あるていど秩序が保たれていなきゃ、生活できない。ただ現存秩序をタテにとられちゃ、こまるけど、無秩序はゆるされない。秩序そのものへの反抗なんて、ドダイ無意味だ。

隣人への愛

上川 わたし、いま夫がいませんが、母親として、むすこに対して、親だからどうとかいうこと感じないですね。親子とか夫婦とか、上役との関係とか、すべて、そこに、権威とかなんとかいうより、愛の関係が生きなきゃならないですね。「自分のように隣人を愛せよ」ということばは、なぐさめですね。

及川 たしかに、隣人を愛せよ、ということは、職場においても、いちばんたいせつですね。このことばで、助かるですね。

石島 「なぐさめだ」、「助かる」は、いいな。ぼくには、この聖句は、とてもきびしくひびくんだけど、そうだね、助かるんだね。人間関係はここにある、って言われているんだものね。

とりなしの祈り

石島 ここでは、神のさだめた権威に従え、とあるけど、ヨハネ黙示録には、ローマ国権は悪魔の具現だから、あくまで抵抗せよ、と書いてある。もちろん、権力闘争じゃないけど……。

及川 やはり、政治家のために祈る、とりなしの祈りをする、そういう気持ちが大事ですね。

上川 それが、愛の極致……。

石島 どうも、ぼくには、そういうこと、そらぞらしくってね。宮本さんなんか、どう？ とりなして祈る、っていうより、ブッつぶれてしまえって気持ちじゃない？

宮本 わたしは、たおれちゃえと思うような人でも、たとえばユダのような人でも、たまたまそうなっちゃったんだと思って、かわいそうになる。わたし、二番目の母が来たとき、いやでいやで、死んじまえって思いました。そしたら、一年目に死んじゃった。だから、憎むのは、こわいですね。

石島 「死んじまえ」と思わなくても、人間いつかは死ぬんだけどね。(笑) しかし、イエスさまも言ったように、たしかに、憎むことは、殺すことなんだな。

(次号は「愛の貸し借り」)

をみとめちゃ、生きていけない、青年は、エネルギーがありますから、太陽族やビート族、全学連とか、あれも、若い人は上の権威では生きられないエネルギーを持って、それにさからわなければ生きていけないものを感じてるからですよ。

石島　そういうもののなかにも、なにか権威主義があるんじゃないの？

金子　そうかもしれません、全学連なども。

石島　権威に従わないとすると、神の権威というのは、どうなるの。

金子　そこが問題なんですよ。

上川　あの、キリストのおことばに、神のものは神に、カイザルのものはカイザルに、ってあるのは、どうなるんでしょう。

及川　従うというのは盲従じゃない。なんでもかんでも、というんじゃないと思う。

金子　権威に従ってちゃ、新しいものは生まれてこないです。

上川　わたしも二七才の子を持ってますが、そういうエネルギーは、過渡期のものと思っています。

父母に従え

石島　社会には、職階制があって、部長のとこへ行けば、頭をさげる。聖書には、「両親に従え」と書いてある。一種の上下関係だけどね、どうだろう、その点は？

金子　ぼく、内心では、父母に従いませんね。外面では、イザコザがいやだから、うまくやりますが……。(笑)

及川　やはり、家庭内の秩序がカギで、イザコザおこさずにやることが、大事じゃないですか。

上川　そこには、愛がいりますね。

及川　しかし、愛までいってしまうと、それで問題は終りですね。(笑)

金子　親にさからうんだって、愛ですよ。

石島　キミは、そうかんたんに言うけど(笑)

金子　長い目で見てほしいですよ。けっきょくは、親のためになるんですから。

石島　「父母に従え」は、聖書に書いてあっても、通用しませんか。

金子　しませんねえ。(笑)

石島　ただし書きはついてる、「主にありて」と。上川さん、おかあさんの立場としては？

上川　クリスチャン・ホームであれば、べつですが、そうでないかぎり、一がいに言えませんね。「従え」が、クリスチャンでは、神を中心としていきますが……。

金子　友だちに、そういうクリスチャンがいますが、ピンときませんね。

石島　バカかフヌケみたいに見える？

金子　いや、むしろ、おどろきですね。

宮本　わたしの父は、母が、つまり、父の妻ですが、(笑)四人目です。みんな病死して。三人目の母のとき、わたし受洗しました。父は、こんど、恋愛結婚で、今はしあわせそうです。その父に幸福な人生をおくらせてやりたいというふうに思ってますから、従え、なんて気持ちには遠い。

石島　従う、じゃなく、あわれむ、か。

及川　こわい、って気持ちを子に与えるのはまちがいですね。友だちなんで……。

宮本　いちばんいいのは、親友ですね。

及川　でも、それもどれだけ信じられるか。

わからなくても

宮本　会社にはいったとき、専務あてに電話がきて、とりついだら、「だれからかかってきたんだ。ダメだ、相手の名をきかなきゃ」って、専務におこられた。くやしかったですね。まもなく職場がかわって、同僚はサセンだなんて言いましたが、やがて組合の執行委員になって、もう対等で専務や重役たちと交渉です。クリスチャンだからおそれることないですね。

石島　クリスチャンでなくても、組合が結成されていれば、こわいことないでしょう。

宮本　いいえ、やはり、クリスチャンだからです。資本家から二〇〇円つけられれば、仲間をうらぎるような組合員もあるんですから……。

ゆく仕度をしておかねばならぬぞ！　いろはにほへど散りぬるを、すなわち色即是空、諸行無常のこころをもって生きねばならぬぞ！　との道理を、朝ごとに実物教育しているわけである。

2　信仰に寄せる苦情と反対

ところでこのごろの若い人たちに問うてみると、信仰なんぞ問題でない。われわれの毎日に、神さまや、信仰のはいってくるすきまはありませんと答える。

このあいだ上野のある高校の文化祭で、バイブルクラスの学生たちが、アンケートをとった。高校生に「精神生活」についてテストしたところ、「真の満足は、心の満足ではだめだ。物質的の欲望が満足せられたときに、ほんとの満足感が起る」と答えたのが、圧倒的に多かったそうである。

文化的にみち足りた生活で、他人に迷惑をかけず、自分のしたいことはやってゆける、こういう生活が、若い人たちの現代生活の目標になっていて、諸行無常も、神仏信仰も、はいってゆくスキがなくなっている。

「先生、ぼくたちに信仰しろ、神に従え、と言われると、自分をブジョクされたように反発を感じます。信じなくちゃいかんと言われると、ぼくは自分に対してクヤしくなり、またシャクにさわります。オレはオレだ。自分の心は自分で守るのだ。神さまにやってもらうよりは、自分で解決したほうが、はるかに崇高だなあ！　とぼくは思いました。他者が自分にははいって来るのはイヤです。嫌悪感が起ります。自分を第一に自分で守らねばならん。自分の考えに素直でなければならんと思います。神に自分をささげてたまるものか、と思います」

こうひとりの青年がわたしに語った。わたしはこれを聞いて、「おまえはアウトだ」と言われているように感じました。若い人たちの生活感情からの声には、同じ信仰に反対するのにも迫力がある。

むかしは、信仰は迷信だ、科学的でないからだめだとか。

宗教はアヘンである、貧乏人の夢だ、物質的に経済的に富めば、地上に天国が生まれるのだ。そうすればもう宗教のごやっかいにならなくてよい、こう言って反対する。

また「心だにまことの道にかなひなば、祈らずとても神や守らん」といって、道徳的にまじめにやっていれば、積善の家に余慶ありで、幸いがやってくるから、口先で念仏を唱えるより、善行をしろ！　と考える人々がある。

この歌は、そんな意味ではないらしい。祈らないでもよいという意味ではなく、祈れば、なおさらに神は守り、祈りに答えてくださるというのが真意であろう。しかし一般には信仰より善行がたいせつだと誤解している。

神さまを信ずるといっても、祈りはきかれるといっても、世界に大戦が二回もあったではないか、世間のすべての宗教が平和を祈っているのに、この人類の最大の不幸を避け得なかったのは、信仰の無力のゆえではないか、宗教は無力だということを自分で証明しているのではないか。そんな宗教や、信仰にたよることはできない、と反対する人々もある。

わたしの兄が、わたしに信仰するのもよいが、若いうちから信仰せずとも、年とってからでよい。今はウント勉強せよ、若い者がジジ臭いことを考え出すと元気がなくなるから止めよ、と反対したことがあった。信心はじいさん、ばあさんのすることと考えている人が今でもあると思う。

そうかと思うと、信仰にこりかたまると、わが仏尊しで、我田引水をやって、ガンコな人間になるからだめだと攻撃される。

「島村さん、あなたは信じたら神さまが祈りをきいてくれるというが、わたしの知っているしょうゆ屋さんが、ある日、樽がいたんでしょうゆが出だした。そしたら神さまにすぐお祈りした。どうぞ早くしょうゆを止めてください、といっているうちに流れ出る音がとまった。よかったと思って顔あげて見ると

〈キリスト教のいろは〉　〈第六回〉

信仰とはなにか

島村亀鶴

1　慣れすぎて無関心

菜の花の咲いている路を四国遍路がゆく。ひとり、あるいは三人、多いときは十数人ものときもある。それがわたしの家に泊る。

客くれば母が給仕やへんろ宿

こういう句を作ったのは、幼いころを回想してのことであった。「お遍路さん」の笠の上には「本来東西無し」とか「同行二人」とかのことばが記されてあった。ひとりで山路をあるくときも、弘法大師とともに歩くから同行二人と書いてあると教えられた。

「南無大師遍照金剛」と巡礼の歌を唱えながら若い女のお遍路さんたちが、わたしの家の前を毎日のように通って行くのは、美しくもあり、かなしくもあった。おへんろさんは毎日かならず少なくとも、七軒の家の前に立って、「巡礼にご奉謝」を受けなければならないそうで、わたしたちは子供のとき、いつも茶椀一ぱいにお米を入れて、そのずたぶくろの中に入れてあげた。

お米をいただくのが目的でなく、かえって人々の心にぼだい心が起るようにと、祈りつつ、鈴を鳴らしてご奉謝を願うそうである。

そういう深い信仰があるとも知らず、わたしたちは少年時代に、お遍路さんが「南無大師遍照金剛」と歌ってゆくあとから、「なあむ大師へんじょうこんごう、大根の切れでも嚙めだいこんごう」と、ヒヤかして歌ったものでした。そうするとそれに答えて若い男のへんろが「なあむ大師、へんじょうこんごうなんでも食いたい遍路の根性」などとおかしく言いかえすのでした。

まじめに信仰する気持ちと、その反面にそれを茶化したり、ばかにしたりする気持ちとが、わたしたちの中にある。どうしてそうなのかはわからないが、これが日本人一般の気質になっているように思われる。

たとえば「おみきあがらぬ神はない」とか「お釈迦さまでもごぞんじあるまい」とか、シラミのことを「観音様」と言ったり、鋳物工場でやりそこなった鋳物ができると「おシャカになった」と言い、「仏仏（ぶつぶつ）言うな！」と叱ったりするのは、あまり慣れすぎてしまって、かえって無関心になり、ばかにしている例ではあるまいか。

われわれの日常の生活の中のことばとしても

いわしの頭も信心から
仏の顔も二度三度
袖振りあうも他生の縁
済（な）すときのエンマ顔
馬の耳に念仏
牛にひかれて善光寺まいり
苦しい時の神だのみ
縁は異なもの味なもの
きいて極楽見て地獄
さわらぬ神にたたりなし

などと思いだすままに、書いてみれば限りなく、信仰とか、神仏とかに関することばが出てくる。これは毎日の暮しの中のことばとなってしまっている。ことばだけでなく、毎朝のごはんをいただくとき、お椀にお吸物を入れる、その杓子は蓮の花の一片の形をしている。散り蓮華といって、きれいな花も散ってしまう。それを心得て、後生（あの世）に

るのはヒキョーだ！　との声を内に聞きつつまた一面、このオレがはたしてたよりになるのかと、自分に対しての疑いが起りはしないか。

「しっかりしてちょうだいよ、わたしの愛人わたしよ！」と言いきかせねばならなくはないか。

自分に愛想のつきたとき、どうなるだろうか。そのときだれが、自分を受けとめてくれるだろうか。

聖書の中に、パウロという人が、自分の中には善をする願望はあるが、これを行なう力がない。力がないばかりならまだよいが、自分の中には、善をさせないで悪を行なわすものが巣くっている。そのものが自分を現実にあやつっている。その自分の中の悪人に、自分は魅入られている。もがいても、さか立ちしても、どうにもならん。なんと自分はアワレナものか、といって七転八倒している告白がある。

人間失格をこれほど深く書いてあるものはほかにはあるまい。どうか聖書のロマ人への手紙七章を読んでみてください。

こうなると、初めて自分の中で、人間になりたい！　との叫びが生まれてくる。現在の自分はほんとの自分ではない。この現実の自分に忠実であってはならぬ。現実の自分の中で「人間になりたい」「ほんとに自分になりたい」と叫んでいる者が、ほんとうの自分だ。これは深く考えてみると、人間だれもがもっている大きな祈りの声ではあるまいか。人が信仰者となるのは、なにも祈ってものをもらうとか、病気がなおるとかいう物質的の御利益を求めているわけではあるまい。人間そのものの正体が、信仰するものとして、存在しているのではあるまいか。

人間が生まれて、オギャアと叫ぶ。なんの叫びであろう。乳を求める声か。母を求める叫びか。わたしは今生まれましたとの宣言の声か。神よわれを生かせてくださいとの祈りの声、神に対する、信頼の呼びかけであろうか。神秘な叫びを、われわれはなんときく。

自分がオギャアと叫んだ、その叫びを、われわれは忘れている。それを聞いたものは、母であり、父である。自分以外のものである。しかも、それなくしては、われわれは生きられない。われわれの糞尿の世話までしたのは、われわれ以外の人である。われわれ以外の人で、しかもわれわれを最も深く愛している人である。われわれは、この「他者の愛」に依存して生かされてきたのである。

人類が初めて誕生したとき、このオギャアの声をきいた、他者はだれであるか。

わたしは思う。神は人類のこの呼び声に応じて「人間の糞、小便までも面倒を見てくださる方である」と。この絶対他者の愛を、われわれは、求めて叫びつづけていると。

4　ほんとうの生き方

人はその念願しているものに似てくる。幼子の相手をしていると幼子に、悪党の仲間にいると悪党に似てくる。それと同じく、仰ぐものがいわしの頭であったり、牛や馬であったりするのと、すぐれた人物である場合とでは違うものだ。

このように日常生活が、高いものになるかいやしいものになるかは、その信じ仰ぐもののいかんが、たいへんに影響するから、この点を深く考えておかねばなるまいと思う。

またわれわれは、「うき草や昨日は東きょうは西」というふうに、弥次さん喜多さんの道中旅行みたいに、出たとこ勝負で、人生を送るわけにはいかぬ。ほんとにいっしょうけんめいに、ひとところにいのちをかける、すなわち自分をぶちこんでやる、生甲斐を感じないと、つまらぬひまつぶしに、人生を終ってしまう。

だから「祭壇のない人生」ではつまらぬ。なにかを信じ、なにかたしかなものに身も心も捧げないと、ほんとにいっしょうけんめいの生活はできまいと思う。

（次回は「神はあるか」）

とまったにはとまったが、しょうゆはみな出てしまっておったそうな。信じて祈ってもだめじゃろう……」

とわたしの友人が、からかって話したこともあった。

いろいろと信仰について四方八方から、苦情が出たり、反対がある。それは一つ一つ、理由のあることで、まちがった信仰に対しての反省の資料となることも多くあり、傾聴に価することもある。

3　疑い・行きづまり・叫び

カール・マルクスにその娘さんが、いくつかの問を出して、それに彼が答えている。

あなたのすきな徳行―質朴　すきな男性の徳行―強さ　すきな女性の徳行―弱さ　あなたの主要性質―ひたむき　あなたの幸福観―たたかうこと　あなたの不幸観―屈従　あなたがいちばんきらう悪徳―卑屈　すきな仕事―本食い虫になること　すきな格言―非人間的なものはわたしの関知しないところである

すきな標語―すべてをうたがえ

これは桑原武夫編『一日一言』の中に出てるのを、借用して書いたのだが、彼の標語は「すべてをうたがえ」であった。

すべてを疑えとは、一面において真理の探究者の根本的立場であるが、また他面においては真実を信ぜよ！　とのことばとして受けとらねば、自家撞着になる。裏がえしにすれば「信ぜんがために疑え」となると思う。

支那の話に、ある男が、天が今にも落ちて来るのではないかと、せなかをまげて歩いていたので、天は青天井ではないから落ちはせぬと教えてあげた。次には地がヒョッとすると陥没するのではないかと心配して、ぬき足さし足で歩いているので、地は岩が底にあるから穴があく心配はないというと、やっと安心したというのがある。

こういうように疑えば、心配ばかりで、電車の中に坐った人が、ピストルで自分を撃つのではないか、お巡りさんをひとりひとり、わたしの側へ坐る人につけておかねばならぬとなるとたいへんなことになる。

「ちょっとおかあさん、あなたが先に毒見してちょうだい。けさのお汁に、あなたが毒入れてない？」と毎日、検査してでないと、ごはんがたべられないとすると、家庭生活は一日もできなくなる。

飛行機にのって北海道へ、大阪へゆく、ロンドンへもブラジルへでもゆく。機関士にいのちをあずけてある。人を信じなければ、汽車、汽船、その他の乗りものにのれない。

わたしの知人の某会社の支配人は、外国へ行ったことが何回もあるのに、地下鉄がこわいといって乗らない。こわいといえばみんなこわい。疑えばきりがなくなる。

それだのに、われわれは、けっこう社会生活をやっている。それは、お互に信じあっているからである。

結婚だって、そういえば冒険である。心配すればきりがない。むかし加賀の千代は、渋かろか知らねど柿の初ちぎり

とうたった。六〇年の不作になるか、海老同穴の佳境にはいり、幸福さんをつかむか、全く行く先はわからぬ。「人生婦人の身となるなかれ、百年の苦楽他人による」と昔の人はナゲイたが、今日だって、相手のいかんによって、思わく通りにはいかぬ。ほんとに「渋かろか知らねど」の冒険があるわけである。

この春、卒業して就職したり、社会生活第一学年にはいったりした人々がある。

運命は笑いまち居り卒業す　虚子

希望にみちた行手に、せせら笑いつつ運命が、大口あけて呑みこまんとしている、ウスキミのわるいものを、この句に感ずる。しかし、まだ見ぬ幸福を、何か期待し、確信してゆくことなしには、現在の一歩を踏みだすことができないのではあるまいか。自分の夢が現実に足をおろすように、との期待が、実行となり、生活となるためには、願望が祈りに似た姿勢をとってくることを、われわれは経験しているのではなかろうか。

それからもう一つ、われわれは自分を守らねばならぬ。自分に忠実であれ！　神にたよ

んとなく自分でわかる場合が多いのでしてね。周囲でかくしていても、悟ると言いますか、病気が進行してくると、生への執着というものを超越するようになることが多いのです。これは神の摂理とか自然の恵みということではないのでしょうか。先日もひとり癌の患者をお預りしていましたが、やはり自分であきらめきって、お礼を言って、死んでいきました。

【回答者】しかし中には死期を知らされて、かえって信仰の世界にはいったり、はいり直したりして平安に死んでゆく例もありますね。

【F医師】たしかにそうですね、ただ医者としては危険性をおそれるのです。あまり作為はしないほうが安全だと思う。

【回答者】わたしも相手の受け入れの準備もないのに、洗礼を受けさせたり、信仰告白をさせるため、死期を告知するのは危険だと思うのです。形式的な儀式は内面的なものを伴わなくては無意味です。カトリックの場合、それで無惨な失敗をした例を知っています。しかし根本はその患者の中にある「死」を受容する能力いかんにあるのですが、それを見定めるには慎重な態度が必要ですね。その受容能力ということになりますが、とくにこの質問者の場合など、近親者の情緒的なささえというものは大きな力を持っていますね。

【F医師】そのとおりです。近親者がうろたえ、度を失うことがいちばん大きな妨げになるのです。これもわたしの患者の例ですが、その患者の奥さんが患者の死期を知ってかえって自棄的になりましてね、患者にぐちをこぼしたり、当たったりしたので困ったことがあるんです。

【回答者】近親者が死という事実に向きあえないため、かえって次から次へと医者をかえたり、はかない希望を迷信につないでみたり、めそめそしたりしがちで、それが、本人に不必要なおそれを起こさせるのですね。そうなると、この質問者のような場合は、なおさら周囲の人々の信仰というものが問われてくると思います。牧師にもよくお願いして、作為的でない、カウンセリングの関係を持っていただくとよいと思います。

【F医師】それはやはり自然に、望むような方向に持ってゆかれるとよいですね。わたしは本などを貸してあげて、それとなく準備させるとか、気づかせるとかしようとしたことがありますが、かえってよくなかったことがありましたよ。

【回答者】こうなるとほんとうに平素の信仰生活というものがたいせつですね。牧師も講壇からそのことを心がけて、信者が死という厳粛な事実に対してどのような態度であるべきかを、神学的にもよく教育しておくことが望まれますね。この質問者の場合は教会員なのでしっかりした態度で本人のそばに立つことができると思います。それがご病人にとって最大の力になるのではないでしょうか。そういう態度で、現在利用できる範囲のあらゆる医療の手段を利用されたらよいと思います。ところでこれは質問の趣旨ではないのですが、一般の読者のためにお聞きするのです。いったい癌というものは不治なのでしょうか、またどうしてできるものなのでしょうか。

【F医師】ヴィールス説などもふくめて諸説があり、癌の正体はよくわかっていないのです。でも癌ということばの響きが素人の方々とわれわれでは違うのです。わたしどもは早期に発見しさえすれば、手術で除去できると思っていますから。ごく最近話題になった新薬なども、臨床家としては、やはり使ってみたいですね。だめだと思われても、いろいろなことを試みてみるとよいとわたしは思います。

（青山学院大学講師・牧会心理学専攻）

人生相談室

死期を知らすべきか

（回答者）気仙三一

【問】わたしは三〇才の公務員で、教会員です。わたしども三人の兄妹をこれまで育て、信仰的にもよい理解をもって、教会学校時代から現在にいたるまでを見守ってくれた母（五三才）が、二〇日ほど前から腹部異常を訴え、臥床中でしたが、このほど医師の診断の結果、癌らしいとのこと、それももはや処置の方法がないまで進んでいることがわかりました。大病院にも行きましたが、やはり同様の結果でした。主治医と家族との間の打ち合わせで、母には胃潰瘍と言っておくことにきめ、当人もそう思いこんでいるようでしたが、やはり周囲の者の態度になんとなくうかがわれるのでしょうか、最近はほんとうのことを言ってくれるようにとわたしどもに頼みます。わたしどもはその都度打ち消してはいますが、果たして最後までかくし通すべきなのか、それとも思いきって本人に知らせ、心の準備をさせるべきなのか迷っております。死期はだいたい五ヵ月ぐらいあとらしいのですがそれまでの間、できるだけ平安な気持ちで過ごしていってほしいと願っております。

なお母は教会員ではありませんが、キリスト教には好感を持っており、ときに教会に出席することもあります。しかし、明確な意味での信仰は持っているわけではありません。家の宗教としては元来仏教ですが、これも郷里の墓所を通してお寺と関係があるだけで、精神的なより所ではもはやないのです。

【回答者】これはたいへんむずかしい問題で、関係者のお気持ちはよくわかります。また牧師の側としてもそういう場合の取り扱いにはきわめて微妙な点があって慎重を要するのですが、医師の立場としてはどのように考えられるでしょうか。

【F医師】そうですね、これは医師としてもむずかしいことでしてね、一概に知らせるべきだとか、知らせるべきでないとか言えないと思うのですが、まず医師としては、なるべく苦痛をやわらげてあげることを眼目とします。本人には、わたしの経験では絶望的なことを言わずに、最後まで何かしら希望を持たせたほうがよいのではありませんか。

【回答者】よく死の準備のためといって、本人に助かる見込みのないことを告げ、かえって自暴自棄にさせてしまった例をききますね。

【F医師】そうなんです。いちばん困るのはそれです。そうすると、闘病の意志がなくなって、病気の進行も速くなるものなんです。

【回答者】そうすると、本人は最後まで死期を知らずにあるいは煩悶したままでいることになりますね。

【F医師】それはね、わたしの経験では、な

せんでした。ところが、あの国会デモの渦の中で、わたしは思想としてでなく、肌で実感する現実として、信仰と政治との固有の意味での結びつきをとらえたのです。したがっていま一つのこと、すなわち、政治に対するキリスト者のかかわりは、あくまで信仰的な態度で貫かれなければならない、というわたしの思想的結論も、単なる思想ではなくなりました。信仰の次元と政治の次元を区別するだけでなく、分離してしまう考えに対して、わたしは以前よりももっと確信をもって「否」を叫ぶことができるようになりました。これは、わたしだけでなく、あの渦の中にはいって行かれた多くのキリスト者の得た体験ではないかと思います。そして、そこで得られた体験が今後のキリスト教的な運動をいっそう純粋な、生き生きとしたものにして行くことを願わずにおれません。

忘れることができないのは、六月一五日の事件です。右翼の暴力団の襲撃をまともに受けて、わたしは現代の悪を身をもって感じました。このことを聞いた人々は、暴力団を問題になさったでしょう。けれども、現場にいたわたしたちは、暴力団よりもその背後にある悪魔的な手を直観的に感じたのです。暴力団の取り調べが進むにつれて、わたしたちの直観の正しさを証明する事実がいろいろ出てきました。政治にかかわりを持つとは、この悪魔的な力に立ち向かうことです。それだけに、いよいよ信仰的な純粋さと固さが要求されました。

あの夜、樺さんが死にました。わたしには大きいショックでした。全学連とわたしたちとは、全然なにも連絡のない行動をとっていたものの、彼女の死はわたしの隊列のひとりの死としてしか受けとれません。その次にはもうひとりの死人が出るであろう。そして、そのひとりはわたしであるかもしれない。そんな気持ちで、わたしはしばしばデモに足を運んでいました。

安保の成立後、あの波の高まりはあっけなく消えて行きました。闘争の組織を再編成しようとする試みは、成功しなかったとみられます。わたし自身も、しなければならないということだけはわかっても、さてなにをしてよいかにとまどいし、生活がまた常軌に復するままに、失われた時間を取り返す仕事に追われなければなりませんでした。

三池のことといい、総選挙のことといい、新島のことといい、その後日本国内におこったいろいろな動きは、あの安保反対闘争が全く実りなしに終ったかのように思わせます。あの闘争の結果は、もっと気長く、人念に検討しなければ評価できないでしょう。わたしとしては、しかし、自分をも含めていた大衆行動のもつはかなさ、もっと端的にいって、その罪を、ここに感じとれないではおれません。あの大きい人波の中には、自分の頭で考えて出てきた人と、自分で考えているつもりではいても知らず知らずマス・コミにあやつられて出てきた人――もう少し見方を変えていえば――安保体制が布かれたならば、生活が脅威にさらされるという実感を肌でとらえていた階級の人と、安保体制は必ずしも生活に脅威をもたらさず、ただ変則の政治に批判を加えるだけで満足した人とからなっていたのではないでしょうか。しかし、そこで止まった人に対しても、同じ隊列につらなった人として、わたしたちは責任を覚えます。

わたしには長い残務整理がありました。右翼に殴られたことの残務整理で、この二月までかかりました。わたしは、新劇人会議の人人に引きずられながら、かれらの熱心さにつくづく敬服してついて行きました。からだで演技する人たちは、小手先や口先を弄しません。わたしはひとりのキリスト者として、恥ずかしく思いながら、感謝をもっていろいろのことを学びとりました。

（日本基督教会・東京告白教会牧師）

新安保成立一年

渡辺信夫

昨年五月、六月ごろの東京の異常な空気を忘れることはできないでしょう。あの空気が今にいたるまで続いておれば、異常という感もないのでしょうが、あの空気は汐のように、急に高まって、さっと引いてしまったために、あのころの印象だけが特別なものとして残りました。

わたしはその二年前から開拓伝道にたずさわっていました。自給の伝道をしていくためには、限られた力と時間をフルに使って、第一義的なことに集中し、余分のことは極力うとんじる生活を意識的にいとなまねばなりません。わたしは福音を宣べ伝えることと、福音を宣べ伝えるための生活をささえること以外を、全部切り捨てておりました。

それでも、安保改定をめぐっての政治の嵐は、わたしの生活に侵入してきました。そして、これに反対する側に、当然のこととして加わって行きました。一月一五日に第一回のキリスト者のデモがあったとき、それはわたしにとって、安保改定反対の最初の具体的行動だったのでありますが、当然のこととして参加いたしました。

わたしはそれまで、キリスト者の平和運動の文字通り驥尾に付してきましたから、行きがかりから、そうしたと言えなくはありません。けれども、わたしにとっては、そのような行動に出ることは、決断の新しい段階でした。もう一度、信仰的に考えなおし、祈ってやはり行かなければならないときめました。

その次から、わたしもデモの準備委員になりました。デモのときだけ出て行くのとちがって、準備の委員会に出るのはなかなかたいへんでした。時間も惜しいし、出たところでなんの役にも立たないのですが、せめて時間を犠牲にすることによって、この動きにあずかり、自らの責めをいくぶんでも果たしたいと思いました。わたしには、それはたしかに負い目だったのです。わたしは、戦争中のあまりにも無自覚な戦争協力を神と人との前に懺悔するという動機から、平和運動に参加してきたものですから、もう一度戦争を作り出す大きい可能性をもち、かつて罪を犯した中国を、再び仮想敵にする新安保条約に反対することは、キリスト者としての当然の負い目だったのです。

その責任は、しかし、果たされませんでした。安保は成立しました。これがただちに戦争体制に結びつくわけではないように見られていますが、わたしたちは、おそらく、より以上大きい犠牲を払わなければ、その負い目を負いきれないような体制ができ上がってしまいました。

安保反対の運動の中から、学びとったことは少なくありませんでした。

第一は信仰と政治の問題との関係を、実感としてとらえたことです。政治の問題は信仰の問題と別だ、という意見に対して、わたしは、それを思想的に分析して批判していました。しかしそれはわたしの思想でしかありま

る考え方、論理、押しつけが、戦後一六年の今ごろ、首相の名において声明することは、何を意味しているのでしょうか。

逆コースということばの意味するところは天皇中心、天皇絶対、天皇神格において極まるといって言いすぎでないと思います。池田首相声明のいう「名誉を尊ぶ偉大な国民の繁栄の基礎」は、天皇中心の道義の確立であると首相はいっております。修身・道徳教育の中心をふたたび天皇におこうとする意図が、「教科書の検定」「国家神道の復活」と関係のあることは、本誌の四月号、五月号のこの欄で明らかにされていました。「戦後一五年もたっているから問題にならないよ」という声をよくききますが、ほんとうにそうでしょうか。警察予備隊が、いつのまにか旧陸軍以上の強大な自衛隊にまでなったことを、どのように思われるでしょうか。

そのようなことが、現実化してきている証拠を、この首相の談話が明らかにしているわけです。とくに「現行法に不備があれば、これを改めよという数十万の真剣な請願があった」といっております。

一六年前、日本には「不敬罪」という刑法があって、天皇はじめ皇族を「敬まわない」言動があったときは、「死刑」または懲役で罰せられました。それがどんなものであったかは、戦前の人はみんな知っております。実際にその適用をうけた例がキリスト者にも多くあったことはもちろん、これによって、いっさいの批判、言論、出版、集会、信教の自由が抑圧されたのです。この不敬罪を復活してほしいというのが、首相談話にある「数十万の請願」であったのです。この運動がどのように進められているかについて、「信教の自由を守るキリスト者の会」の機関誌は次のように記しています。

不敬罪設置の請願署名運動は、目標を二千万として、組織を動員して、宮城、伊勢神宮、明治神宮、靖国神社など、遺族を中心として見学者などがあつまるところで、署名を集めようというのである。この運動の推進者は大別して四つのグループにわかれている。まず、(1)神社本庁を中心とする国家神道人　(2)郷友連を中心とする旧軍人層　(3)生長の家などを中心とする宗教人、及び　(4)新日本協議会・教育父母会議・反日教組教職員たちで結成されている日本国民会議などである。ここで見逃がせないのは右翼人の参加で、右翼言論人は大東塾、護国団、大日本愛国党などの行動派とともに不敬罪設置を叫び、この線にそって、深沢・嶋中排撃の決議をしている。今回の運動は、右翼、神道、旧軍人がいよいよ表面にでてきて、第一回の紀元節復活運動、第二回の伊勢神宮国営化運動、第三回の靖国神社国家護持運動についで起したものである。

この不敬罪設置の請願が、首相声明の「数十万に達する真剣な請願をうけた」内容なのです。また憲法改正を目的として憲法調査会では「天皇を元首とすること、不敬罪を設置すること」が問題となっております。

ちょっときくと「時代離れの世迷いごと」としか思えないようなことが、大まじめに首相談話でとりあげられたり、研究されたり、運動として行なわれているということは重大なことです。かつて皇太子の結婚が国事として行なわれたことにも、多くの人が疑問を感ずるよりも先に、興味をもっていました。ほとんどどこからも抗議は出ませんでした。また、正月には伊勢・明治神宮の参拝者が三日間で「一七五万」もあり、修学旅行では日教組の先生も「伊勢・靖国神社参拝」をスケジュールに組んでおります。恐ろしいのは、たとえ時代離れのしたことであっても、くり返し、くり返し押しつけられるうちに不感性になって、それがだんだんと「国民感情」という不思議なものにまでなり、気がついたときにはすでに遅かったということになることです。

（日本YMCA同盟主事）

社会を見る目

"不敬罪"という亡霊の復活

新子一哉

四月二九日の天皇誕生日に、池田首相はわざわざこの日をえらんで、あの『風流夢譚』などの作者や出版社を告訴いたしません、という談話を発表しました。

ある新聞では、前日の夕刊第一面に、三段抜きで「二九日、首相は重大声明を発表」とまで、これもわざわざ予告をしていました。いかにもそれが、何かわたしたち国民にとってたいせつなことであると印象づけようとしているかのようでありました。各新聞が大きくとりあげたその声明の内容は、次のような要旨です。

「戦後、平和と安全が確保されて、国民生活も向上してきたが、さいきんの風潮は遺憾ながら、その道義的な一面が問題である。とくに天皇、皇室を題材として、ほしいままに曲筆舞文することは、いたずらに国民の品位を傷つけ、名誉を汚し、象徴である天皇と皇室の名誉を傷つけることは国民の良識が認めない。『風流夢譚』など一、二の作品の作家や出版社を告訴せよとか、現行法に不備があればこれを改めよ、という数十万に達する真剣な請願をうけた。わたしはこの際は、告訴せずに事態の推移を見守って、日本国民の名誉と品位にかけて、今後再び起こることのないように期待する。九千三百万の国民のみなさんとともに手を携え、道義を重んじ、名誉を尊ぶ偉大な国民として、真の国民的繁栄の基礎を固めることを誓う」(傍点筆者)

貴方はこの談話を読んで、どのように思われましたか。あるいは、このような談話のでたことを知らなかった、といわれる方もおられるかもしれません。せっかく首相が、特別に重大なこととして発表したことを「知らなかった」では、首相の品位を傷つけることになるかもしれませんね。

わたしは、この声明を、首相の品位などはどうでも、きわめて重大なことであったと思います。その理由は、この声明のなかにたびたび出てくる国民という名において、その立場から、ひとりの生命が、テロによって失なわれたことの重大さをそっちのけにして、天皇にのみ焦点をおいていることに、なによりも憤りを覚えました。国民のひとりの生命よりも、天皇の品位を少しでも汚すことのほうが、首相にとっては重大であったということです。国民の生命は、天皇にくらべれば、鳥の毛よりも軽いと一六年前までいわれていたことを思いだしました。

わたしは、いまという時期にたいせつなことは、天皇誕生日にわざわざこのような発表をすることよりも、五月三日の憲法記念日に国民の名において「憲法を守り抜く」という決意を首相が発表することのほうが、どれほど重大なことかしれないと思うのです。わたしたち国民のひとりひとりは、天皇に保証されているのではなく、この憲法に保証されているから、そしてこの憲法を改悪しようという動きをみんなで守っているから、安心して生活できるのです。

いったい、わたしたちのひとりの生命よりも、象徴天皇の品位のほうがたいせつだとす

わたくしたち日本の国民ひとりひとりが真剣に考えなければならない問題でありましょう。だからこそ、わたくしのような専門外の人間にもこういうことを考える権利があるのです。

すべての国民が、健康で文化的な最低限度の生活を営みうる国家をつくり出すことが、政治の眼目でなければなりませんが、そのような国家のことを「福祉国家」という理念においてイメージするわけでありましょう。それは単なるユートピアではないのであって、英国や北欧の社会主義の諸国家においてすでに実現されているのです。社会主義の社会というとソヴィエトや中国だけしか考えないのは、たしかにとらわれた考えかたであって、わたくしたちはそのようなかたくなに陥ってはなりません。さいきんわたくしは同志の仲間たちとC・A・R・クロスランドの『福祉国家の将来』（原題は『社会主義の将来』）を共同的に勉強しているのですが、福祉国家ということについてたいへん示唆に富んだ書物であります。もちろん、現代のイギリス労働党の若い世代の理論家であるクロスランドがこれを書くとき、それは、主として英国という社会的・歴史的な条件の中で書かれているわけですから、それを直ちに日本の社会に適用しうるということにはなりませんが、福祉国家ということが、単なるユートピアではないのだということを、はっきり教えてくれるのです。わたくしたちの社会でも、こういう連帯社会がつくれないという理由は、どこにも成り立たないでありましょう。

貧乏は運命ではない　貧乏人は麦食を食え、というような政治家に国の政治をまかすことはできませんが、わたくしたちの社会では、貧乏を運命のしわざとしてあきめるというしきたりが、まだまだ根強くのこっています。その日のパンにも困るようなくらしかできないことを、因果とあきらめ、運命を呪い、どうしようもないことと断念してきたのではなかったでしょうか。しかし、もうわたくしたちは、そういうしきたりからぬけ出さなくてはいけません。貧乏はけっして運命のしわざではありません。それはわたくしたちが連帯的に解決していかなければならない、そして、必ず解決できる社会的悪なのです。平常の心がけが悪いから貧乏などになるのだ、ということにも一応の理くつがないわけではありません。労働意欲を放棄して、競輪や競馬に夢中になり、財産をすっかり使いはたして妻子を路頭にまよわせるというような人もないわけではありませんから、そういう人のことを、心がけが悪いからということはもっともなこととも思われます。しかし、現代の社会では心がけというようなことではどうにも解決できない貧困という問題があるのです。福祉社会の第一の条件は、社会悪としての貧困の追放ということでなければなりません。それはただ、従来のように慈善事業といった同情心からではなく、やはり国民ひとりひとりの生存権の自覚から発想されるのでなければなりません。福祉国家においては、それは国家の公的扶助において実施されるわけですが、それはつぎのように意義づけられるでありましょう。

「国家扶助は、生活困窮に陥ったすべての者に対して、国がその責任において最低限度の生活を保障し、もって自立向上の途をひらくことを目的とする。これは、国民の生活を保障するための最後の施策であることをたてまえとする。したがって、他のあらゆる手段によって、その生活維持に努力を払ってもなお最低生活を維持することができない場合、初めて適用されるものである。」貧困に対する

生きる意味について・第六章

連帯社会としての福祉国家

佐古純一郎

生の社会的条件　わたくしたちは人生の意味を探求することにおいて、ややもすれば、それを個人の内面性にのみ問うことに陥りがちです。しかし、生きるということがどこまでもこの社会の現実のなかにおいてのみ可能であるとき、どうしても生を意味づける社会的条件ということが必要になってまいりましょう。前述の日本国憲法第二五条はそのことに深く関連するものと思われます。「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」というのですから、わたくしたちはその権利において生の条件を要求することができるはずであります。「健康で文化的な最低限度の生活」ということが、具体的にどういう生活であるかということになると、それはやっかいな問題であるかもしれませんし、憲法解釈においてそれがどのように論議されているものか、わたくしにはよくわかりません。しかし現実の問題として、文化的な生活どころか、その日の生活にさえ困っている人が、けっして少なくないのですから、この権利が十分にみたされているとはいえません。「国はすべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」、いいかえるなら、このことをいかに熱心につとめているか、ということがわたくしたちが政治を批判する基準になるだろうと思われます。これはけっして特定の専門家だけにまかせておけばよろしいという問題ではないのであって、

て、そういう自分の主張にばかり生活の重みをかけたら、けっきょく人間は孤立化してしまう。現代的な表現をするなら人間はお互いにアトム化してしまう。そういうことを徹底的にみとどけたのが漱石の文学であったかと思われます。そして他者からまったく孤立してしまうときに、人間はついに自分が生きるということにも意味を見失ってしまうのであって、そういう人間の帰結するところが漱石の文学においては、ついにあの『こころ』の先生の自殺であったわけです。

そういう漱石の文学の状況を前提としてあの「則天去私」を考えるとき、漱石は人間が無意味でない生を生きるためには、近代的人間の基調をなしている自分本位の「私」を去って、他者と連帯しうる人間にならなければならない、ということをはっきりイメージしていたのではないかと思うのです。そうしてみると、夏目漱石の文学は、逆説的に連帯社会の実存的条件を追求した文学であったともいえるのです。わたくしは、ドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』の中に出てくる「謎の客」のことばを、いまふと思い起こすのです。

「……全世界をあらたに改造しようというには、人間自身が心理的に新しい道へ転じなければなりません。人間がすべての人に対して本当に兄弟同様にならないうちは、世界同胞の実現されるはずはありません。どんな科学の力を借りても、またどんな利子をもって釣っところで、決して人間は不平なしに、財産や権利を分配することはできません。常に自分の分け前の不足を訴え、互いに羨んで滅しあうに相違ありません。あなたは、いつ実現するかとお訊ねになりましたが、実現することはしますけれども、まず最初に人間の孤独時代というものが閉されねばなりません」

実現するというのは「人生の楽園」のことなのですが、そのためには、まず孤独時代が終焉しなければならないというわけです。それなら、ドストエフスキイのいう人間の孤独時代とはどういうことなのでしょうか。

「どんな孤独時代ですか？」

「ほかでもありません、今――殊に現世紀において、到る所に君臨しているようなものです。しかし、この時代はまだなかなか閉されません。まだ終るべき時期が来ないのです。今すべての人はできるだけ自分を切り放そうと努め、自分自身の中に生の充実を味おうと欲しています。ところで、彼らのあらゆる努力の結果はどうかというと、生の充実どころか、まるで、自殺に等しい状態が襲うて来るのです。なぜというに、彼らは自分の本質を十分に究めようとして、かえって極度な孤独に陥っているからです。現代の人は、すべて個々の分子に分れてしまって、誰も彼もお互いに遠く隔てて、姿を隠しあっています。持物をかくしあっています。そして結局自分で自分を他人から切りはなし、自分で自分から他人を切りはなすのが落です。ひとり密かに富を蓄えながら、おれは今こんなに強くなった、こんなに物質上の保証を得たなどと考えていますが、富を蓄えれば蓄えるほど、自殺的無力に沈んでゆくことには、愚かにも気づ

国家の公的扶助はわたくしたちの国の現段階では『生活保護法』を根幹としているわけですが、わたくしたちは国家の公的扶助を、国民相互の連帯責任による貧困の解決というふうに、積極的に考えていくのでなければなりません。それが主権在民という民主主義国家のたてまえであるはずです。

社会保障　そのことを具体的に制度化したものが社会保障制度でありましょう。社会保障とは人間の生存権を相互の連帯責任において保障することですが、今日では、保守と革新とを問わず、社会保障制度をより充実させていくということを政治の眼目にしないでは、政策というものは立てられないわけです。わたくしたちも、社会保障制度の確立にいかに努力しているかで政治の善悪を判断してもいいのです。しかし、まだまだ社会保障ということの正しい認識が不十分なのではないでしょうか。自分が生活に困らなければそれでいい、病気をしても困らないからそれでいい、と自分の生活だけを考えるくせからぬけきれないのです。他者の生活に相互に連帯的な責任をになっていくという考えかたが、ひとつの政治感覚にまで高められてこないかぎり、社会保障制度が実質的に確立されることにはならないでしょう。他者の生活に相互に連帯的な責任をになっていくということが、わたくしのいわゆる連帯社会の倫理なのであります。国民のひとりひとりが自己中心的に、自分本位に生活を考えていて、それで国家に社会保障制度の確立を要求したところで、そんな勝手な考えが通用するはずはありません。

連帯社会の精神的基礎　福祉国家が強力に成り立つためには、人間がばらばらに孤立して生きるのではなくて、他者の生活に相互に連帯的な責任をになって生きていくという生きかたが、どうしてもつくり出されなければなりません。つまり、孤立社会ではなく連帯社会がつくり出されなければ、福祉国家の形成ということも不可能でありましょう。福祉国家についての社会科学的な考察が、わたくしの意図するところではありません。そのことに関しては、すでに社会科学の専門家がりっぱな書物をたくさん出してくれているのですから、十分学習していただきたいと思います。前述のクロスランドの本などぜひ読んでいただきたいと思います。わたくしはむしろ、そういう連帯社会がつくり出されるには、どういう基礎が要請せられるであろうか、といった方面から問題の考察をすすめていきたいと思うのです。つまり連帯社会の精神的基礎はなにかということになりましょうか。精神的基礎というようなことばが気になる人には、実存的条件というふうに受けとってもらってもよいかもしれません。

　ここで、わたくしは少しく横道にはいって夏目漱石の文学のことにふれてみようかと思います。夏目漱石がその晩年に「則天去私」という人生観に徹しようとしたことは、よく知られていることですが、あの「則天去私」においてふつう則天ということが何を意味したかに重心がおかれるのですが、わたくしは漱石にとって切実な問題はむしろ去私の方だったと思うのです。人間が「私」を中心として私を主張することに生活の重点をおくということが、近代的な自分本位に生きる人間の生きる意味だったわけですが、そういう自分本位な生きかたをするかぎり、人間にはどうしても連帯的な生活というものが崩れてくる。つまり、互いに自分というものを絶対視し

私は己れに対してこの愛を感ずるが故にのみ、己れに交渉を持つ他を愛することが出来るのだ。私が愛すべき己れの存在を見失った時、どうして他との交渉を持ち得よう。而して交渉なき他にどうして私の愛が働き得よう。だから更に切実に云ふと、他が何等かの状態に於て私の中に摂取された時にのみ、私は他を愛してゐるのだ。然し己れの中に摂取された他は、本当をいふともう他ではない。明かに己れの一部分だ。だから私が他を愛してゐる場合も、本質的にいへば他を愛することに於て己れを愛してゐるのだ。而して己れをのみだ。

自分本位の人生観がこのように明確な自覚にまで高められたということは、なんといっても『惜しみなく愛は奪う』が不朽の古典的価値を持ちうるゆえんでありましょう。わたくしは結論をいそぎますが、このようにして有島武郎の内に確立された自己中心的な人生観は、しかし、ついに有島武郎の生に充実した意味を与えてくれたでしょうか。否!! 彼はついに虚無の世界に転落していかなければならなかったのでした。ということは何を意味するか。孤立的人間という在り方のなかで、どのような深い思想がつくり出されようとも、ついにそれは人生を生かす思想にならないということであります。明治・大正期の個人主義の思想の一応の完成点として『惜しみなく愛は奪う』の古典的価値を認めることにやぶさかであってはならないけれども、それは、もはや現代に生きるわたくしたちを生かしてくれる人生観ではないのです。ドストエフスキイの偉大さは、すでに十九世紀において有島武郎の悲劇をみぬいていたところにあったのだともいえようかと思われます。

孤立的人間から連帯的人間へ　孤立的人間によって連帯社会を創造することは、木に魚をもとめるにもまして困難なことであります。そこにどうしても孤立的人間から連帯的人間へという、人間それ自体の変革が要請されなければなりません。連帯社会が連帯的人間をつくるのではなく、連帯的人間が連帯社会をつくり出すのです。もちろん、社会が一応の安定度を維持しているとき、人間はその社会の安定したエートスを受けつぐことで自己を形成していくわけですが、いまわたくしたちの生きている時代はそういう時代ではありません。

連帯社会を創造することなしに、わたくしたちにとって、生きるということの力強い意味は出てこないのですから、いまはわたくしたちが社会を新しくつくりかえていかなければならないときなのです。社会の変革か人間の変革かということを、わたくしは、あれかこれかの二者択一において考えません。たしかに社会を変革しなければなりません。しかしそれをなしうるのは、もはや古い孤立的人間ではありえないでしょう。社会を変革する主体そのものが新しく生まれ変わるのでないなら、社会の変革もついにむなしいというほかはありません。わたくしはそれを孤立的人間から連帯的人間へ、というのです。連帯社会の創造をになう連帯的人間とはどのような人間像のことをいうのでありましょうか。さらにわたくしたちは考えをすすめなければなりません。

（次回のテーマは『連帯的人間』）

かないでいるのです。なぜというに、我一人を恃むことに馴れて、一個の分子として全を離れ、他の扶助も人間も人類も、何ものも信じないように己れの心を教え込んで、ただただ己れの金や己れの獲得した権利を失いはせぬかと戦々兢々としているからです。真の生活の保証は決して個々の人間の努力でなく、人類全体の結合に存するものですが、今どこの国でも人間の理性はこの事実を一笑に附して、理解しまいとする傾向を示しています。しかし、この恐ろしい孤独もそのうち終りを告げて、すべての人が、互に乖離するということがいかに不自然であるかを理解する、そういった時期が必ず到来するに相違ありません。

わたくしは決して無定見に『カラマーゾフの兄弟』の文章を引照したわけではありません。この『謎の客』の預言的洞察が、けっきょくドストエフスキイの文学の基礎をなしているのです。これはいまから一世紀近くのむかし書かれた文章ですが、いま、わたくしたちの現代の状況においてこそ、耳を傾けなければならない切実な問題なのではないでしょうか。

孤立的人間　『カラマーゾフの兄弟』のなかでドストエフスキイが洞察したことは、カラマーゾフ家において、もはや人間が互いにばらばらにしか生きることができなくなっているということでありました。そういう人間のことを、わたくしは孤立的人間と呼びたいのです。孤立的人間によって連帯社会がつくり出されるなどということが、どうして可能でありましょうか。カラマーゾフの家の悲劇は、いまわたくしたちの社会で、毎日のように「何々家の悲劇」として演じられているのではありませんか。互いに自分のことしか考えられなくなっているような状況のなかで、人間が深い連帯感のなかで生きるということはとうてい望めることではありません。今日わたくしたちがいかに深刻な孤立化のなかで生きているかは、いろいろな文学作品がなによりもはっきりと証明しているように思われます。いまわたくしは有島武郎の『惜しみなく愛は奪う』について、孤立的人間の秘密をさぐってみたいと思います。

有島武郎が『惜しみなく愛は奪う』を発表したのは大正九年で彼が四三歳のときでありました。それは明治以来ヨーロッパの近代思想を基調にふまえて、ひたすらに自己の確立につとめてきたわたくしたちの先覚の労力を、一応個人主義の人生観として、完成したものともいえるのであって、近代思想史の記念碑といってもいいのです。その思想をつらぬいているものは、「私は私のもの、私のただ一つのもの。私は私自身を何物にも代へ難く愛することから始めねばならない」という「私」中心の考えかたでありました。漱石のいわゆる「去私」ではなく「則私」の人生態度だったのです。愛というひとなみをもその根本原理で探ねていくことが『惜しみなく愛は奪う』ということでありました。

私は私自身を愛してゐるか。私は躊躇することなく愛してゐると答へることが出来る。私は他を愛してゐるか。これに肯定的な答へを送るためには、私は或る条件と限度とを附することを必要としなければならぬ。他が私と何等かの点で交渉を持つにあらざれば、私は他を愛することが出来ない。切実にいふと、

と引きあげて行ったのであった。

28 贖い主に御栄えあれ——一二九

フランスのオルレアンの司教であったテオドゥルフが、紀元八二〇年ごろに書いたのがこの讃美歌のもとになったラテン語の聖歌である。

このテオドゥルフは、シャーレマン大帝時代から宮廷にも仕えていたが、その次のルイ王の時代になってから、御家騒動の犠牲になって、投獄された。

時に、棕梠の日曜日の祝典が行なわれ、国王は、人民たちとともに、祝賀に列するため司教の幽閉されている牢獄の窓のそとを通過した。このとき国王は、獄窓からもれてくる司教のうたう、自作のこの聖歌を耳にし、痛く心を動かされ、ついに司教を獄中から解放したと伝えられる。

この伝説については、疑いをさしはさむ人もあるが、ローマ教会はテオドゥルフを聖人の列に加え、このラテン語の聖歌を受難週の棕梠の主日の、行列聖歌として今でもうたう。

これを英訳したのはイギリス教会のニール博士で、日本訳は、アシジのフランチェスコや、ダンテの研究者で、明治学院の院長をつとめた中山昌樹である。

29 こよなくかしこし——五

フランス系の宗教改革者ジャン・キャルヴァンの音楽的協力者ルイ・ブルジョワが、この曲の作者だと言われたり、ル・フランの作曲だと言われたりしたが、今日では、古いグレゴリアン（カトリック聖詠）の旋律であるということになっている。

このキャルヴァン一派の詩篇歌集では、この曲は第一四三篇に当てはめられていたが、これが故国から追放されていたイギリスの新教徒によって、英国の詩篇歌のために用いられるようになり、まず第一〇〇篇に当てはめられた。そこで今でも、この曲のことを旧版の第一〇〇篇（オルド・ハンドレッズ）とよぶ。

しかし、このメロディーの由来はともかくこの旋律こそは、嘉永六年（一八五三年）の六月に、ペリー提督坐乗の旗艦上で行なわれた礼拝のとき、軍楽隊によって吹奏された節なのであった。

黒船来に敬異の眼を見はっていた浦賀湾頭の同胞は、この壮厳きわまりない詩篇歌の旋律を、なんと聞いたであろうか。

30 いざや友よ——六三

学者で詩人だったイギリスのアイザック・ウォッツ博士は、サザムプトンの美しい海上の風景を楽しみながら、この天に向かって憧れ進む、歌を書いたと言われる。そして、これに「地にある天の喜び」という題をつけたのであった。

今の日本のジャーナリズム、ラジオ、テレビ、映画などが、人心を、もっともよく反映しているものとすれば、今の人たちは、その日ぐらしで、巧利的で、「天の喜び」などということは、薬にしたくもないのではあるまいか。

おそらく今の、ことに若い人たちだったら「天」ということを、空間的にしか考えないかもしれない。

「天」は、しかしバイブルを一貫した、神的な思想と信仰と芸術と愛情の象徴である。そしてこれは、またキリスト教のみの専有物でなく、ギリシアではプラトーン、アジアでは孔子なども天を説いた。北京に今もある天台、あれはなんであるか。「天の喜び」に憧れたアジア民族の、宗教思想の最高位にある記念碑とは言えまいか。

バッハやベートーヴェンたちも、この「天の喜び」をうたいあげることをもって、最終の仕事としたのである。

（以下次号）

（関東合唱連盟名誉会長）

讃美の泉(6)

——讃美歌物語——

津川主一

26 主いま招く——旧二二六

大衆的な伝道者として、庶民のなかに神の福音をつたえたムーディーが、福音歌手のサンキーとともに、シカゴを中心にして、大伝道を行なったことは、ひろく知られている。

ある年、彼はイエスの生涯の、連続講義を行ない、その夜も講義を終ってから、「イエスとともに、われは何をなすべきか。このつぎの日曜日までに、よく考えて来てもらいたい」と語り、サンキーは、この「主いま招く、とく来よ、暗に迷う罪人」とうたった。

ファーウェル・ホールに集まった多くの人たちは、それから家路をさしたが、その夜半出火し、史上最大の火災といわれたシカゴの大火はおこり、そのファーウェル・ホールを中心にして、実に一千人の人たちが生命を失った。

大伝道者のムーディーも、この夜の講義の結びのことばを思いだすと、心痛むのであった。しかし、それにしても、サンキーのうたってくれた「主いま招く」の歌が、まるで、その夜の惨事を預言したようにも思われた。

その夜の聴衆は、ふたたび、そのホールには、その夜かぎり集まって来なかったのである。

27 防ぎ守れ——旧五五六

レイ・パーマー牧師によって作詞・作曲された、この若い人たちのための讃美歌は、ひろくうたわれている。

ニューヨーク州立のシンシンの刑務所は、昔から、男囚の部と、女囚の部に分かれており、女囚のためには、婦人看守がおかれていた。

日曜日の午後には、婦人伝道師が出かけ、個室から受刑者は廊下へ出て、話を聞くのが習慣であった。そして皆で、讃美歌をうたったのである。

今から七〇年ばかり前の、ある日、このシンシンの女囚部で、暴動がおこった。むろんなんらかの不平か、感情の衝突のためであろう。不断、不気味な静寂に満たされている所内だけに、女囚の怒号や悲鳴は、なおさらすさまじい。

男囚の暴動より、女囚の暴動のほうが、手に負えないと言われているが、婦人看守の手では、どうにもならず、男子の看守の来援を待つことになった。

しかし、このとき、どこともなく、この誘惑に克つ歌、「ふせぎ守れ、試みに……」が高らかにうたわれ始めた。このために、さしもの騒擾も、ようやくおし鎮まり、人々の心は落ちつきを取りもどし、三三五五、自室へ

おっしゃるんでね。親戚といえば旦那さんの御親戚の方々ばかりだし、しかもその旦那さんはなくなっていらっしゃるんですからね。笠城さんにたずねたら、あなたにたのんでみてくれとおっしゃるもんですから。事情を聞いて病院としても、病院から頼める筋合のもんではないと申したんですが」

「いくらなんでしたか」

「八千五百円です」

私は、ちょっとだまった。私にだって八千五百円もの金は惜しかったからだ。

「いや、自殺患者のときはほんとうに会計は困るんですよ」と男はあわれな声を出した。「院長は、いい人なんで自殺といえば、その面倒を引受けなさるんですが、そんな患者はたいてい金を払ってくれないんですからね。親でさえ、そんな自殺するような娘は知らないというありさまだし、ひどいのはなぜ自分を助けたのか、勝手に病院の方で助けたんだからそんなもん払う必要はないと居直る人もあるんですよ。実際院長はいいかもしれないが、会計の方は全く弱りますよ。結局不払いはみんなこちらの責任になってくるんですからね」

「わかりましたよ」と私は電話で愚痴はじめた男の声を遮った。

「明日、必ず納めます」

すると男は、急に明るくなった声でいった。

「そうですか、それではよろしくお願いします」

私は、電話を切った。現金にも明るくなった男の声がまだ耳に残っていて、私は残念な気がしていた。ひょっとしたら払わないですんだ金かもしれなかったからだ。私がことわれば、病院としても取るあてはないにちがいなく、ただ不払分として会計の帳簿に残るだけの話であるからである。私は、夜警の詰所の方へ入って、ガスに薬罐をかけた。倉庫係員の人々に、帰る前のお茶を出すためである。私は、労務員であり、係員の人々はすべて上役の社員であるだけでなく、仕事の性質上彼らの世話にならなければならない立場にあったからだ。だが、その私は情ないことにこう心に呟いていたのであった。

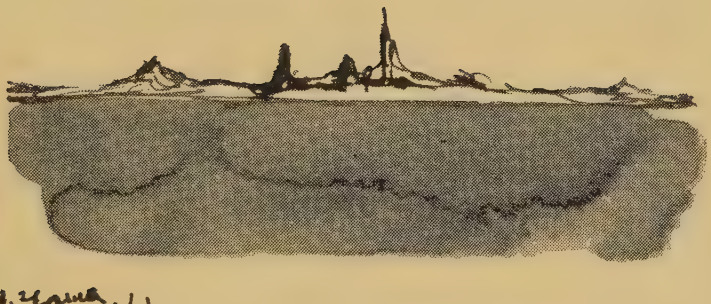
『八千五百円か』

もちろん、八千五百円の金は、出すとなれば大したことはなかった。私にも貯金があるからだ。ただ私には、順子の意図がつかみかねていたのだ。病院に私へ電話をかけさせるなんて、死んだ夫に対する復讐なのか、それとも当然の義務と思ってなのか、それとも私をばかと考えてのことなのか、私にはさっぱりわからなかったのだ。なぜなら順子は、会計の男の愚痴のなかにあったように、むしろなぜ自分を助けたのかと、居直る種類の人間にちがいなかったからである。

もちろん私は、順子がもう退院できるぐらいに回復していることを知っていた。しかしそれは電話で問い合わせて知っていたので、彼女を見舞いに行ってではなかったのだ。私は、彼女のかつぎ込まれた翌日病院へ行ったきり、それから一週間も立つ今日まで一度も行ってはいなかったのである。あのとき警官にうたがわれたからではない。彼女に対する私自身の心のあいまいさに、少しばかり絶望していたからだった。その私は、人間は、イエスのような何の曇りもない純粋さで、しかも男が女を愛し得るものだろうかという疑いさえいだいていたのである。しかもそのような疑いは、私の堕落の

夜警番の日記(6)

椎名麟三



6 憎しみと愛

出勤すると、倉庫係の吉田がいった。

「斎藤君、三時ごろ荒木病院というところから電話があったぜ。出勤して来たら会計係まで電話をしてほしいってな」

「会計係？」と私は思わず問い返した。

「そうだよ」と吉田は答えた、「六時まではいるそうだよ。誰か親戚の人でも入院してるのかい？」

「いや」と私はあいまいに答えた。

私は、時計を見た。五時四十分だった。吉田は、私のことなんかには何の興味もないといった不愛想な顔で立上りながら、メモを机の上に投げ出すようにおいた。

「電話番号は、ここにあるよ」

そして彼は、明るい外光のなかへ出て行った。その三十すぎの私なんかよりずっと若い吉田の後姿は、いかにも疲れ切っているように見えた。だが彼は、この会社につとめている自分に希望を失っているだけなのだ。

荒木病院の会計はすぐ電話に出た。それは四十ぐらいの男の声だった。彼は、自信のない声でこういうのだった。

「笠城順子さんの入院の費用なんですがね、明日までに入院料や手当をふくめて八千五百円を会計へ納めてもらいたいんですが」

私は、とまどいながらたずねた。

「どうして、私に？」

「いや、その、つまりですね」と男はますます自信のない声になっていった、「笠城さんの親戚の方々は、みんなそんな者知らないと

その紙を見ると、味噌汁やお新香からビーフステーキはいうに及ばず鯉の丸揚げまでできるのだ。つまり料理は洋の東西を問わないというわけなのである。それでも彼女は自分でおどろらしく、私へたずねた。

「何にするの？」

「カレーライスでいいですよ」と私は答えた。

「カレーライスは七十円じゃないの。案外気が小さいのね、あんたは」

だが、私は、私にとってどうでもよかったが、まだあの八千五百円の礼を、彼女の口から聞いていなかったのだ。すると彼女はいった。

「わたしは玉子どんぶりにするわ」

私は、壁を見た。だが、それもやはり七十円なのだ。気の小さいのはお互様だと思った。だが、彼女は、テーブルの傍へ来た女店員へ品物を注文すると、思いがけなく銚子を一本つけ加えたのである。私はあわてていった。

「わたしは酒はのまないんですよ」

すると彼女は、にべもなく答えた。

「わたしが飲むのよ」

私はだまった。

「アパートの洋子さんがお見舞を集めてもって来てくれたのよ、バアにつとめている人よ」と彼女はいった、「一切合切、ボロから道具や薬罐まで屑屋へたたき売ってしまったと思ったんだけど、そのとき着ていたものはさすがに売れなかったのね。売ったお金を子供のところへもって行ってやらなければならなかったしね」

私は、重大なことに今更のように気付いてたずねた。

「それじゃ、アパートへ帰っても湯一つわかせないわけじゃないですか」

「そういうわけね」それから私をなぐさめるようにつけ加えた。

「そんなことどうにでもなるわよ、わたし今晩からでも洋子さんとこのバアへ行って働くつもりなんだから。着るものは洋子さんが貸してくれるわ」

「バアへね」と私はぼんやりいった。

だが、私はそのとき内心ある心さびしさを感じていたことはかくすことができない。彼女が私の手のとどかないところへでも行ってしまうようにだ。すると彼女は、その私の気持でも見抜いたようにふいにいった。

「洋子さん、あの斎藤という倉庫番、あんたに惚れているんじゃないかといっていたわ」

私は、強いショックを受けていた。私は、思わずいった。

「いや、わたしは、あなたに憎んで、憎んでいてほしいだけなんですよ」

「憎む？」と彼女は不審げな声を出した。

「そうですよ、でないとわたしの何もかもだめになる気がするんです」と私は途方にくれながら答えた、「いつまでも憎んでいてくれれば、わたしはそれでうれしいんですよ、いままで通りに」

「わたし、いままであんたを憎んではいなかったわ、軽蔑していただけよ」と彼女はいった。

カレーライスがきた。だが、私は、全く気落ちしていて、満足にスプーンを口へ運べないありさまだったのである。手もなく順子か

はじまりだということを知っていながらだ。そのような私にとって、彼女が助かっている以上は、彼女に会わない方が自分自身にとって安全だという気がしていたのだ。たとえ卑怯というものであってもだ。そして事実、それらの理由を超えて、彼女に会いたくない思いが私にあったのである。

順子は、壁際のベッドの上にちょこなんと坐っていた。浴衣の寝巻に、赤い細ひも一本という姿でだ。その彼女は、意外なほど小さく見えた。私は、力なくいった。

「もういいんですか。病院の払いはすませて来ましたよ」

すると彼女は当然そうに答えた。

「じゃ、わたしもう退院していいのね」

そして彼女は、するりとベッドから降りた。見ると、彼女は、どうやら頭にも手入れをすましているだけでなく、ベッドの端にも下着やワンピースがたたんであって、いかにも帰る仕度はすんでいるという感じなのだった。だが彼女は、私へいっていたのだ。

「わたし、婦長さんや先生に挨拶して来るわ」

それならそれでよかったのだ。たとえ私に彼女がちゃんとした礼儀をわきまえていることが意外であってもだ。私は、手持無沙汰に彼女の出て行った後の部屋のなかを見廻した。合計五つのベッドがあった。そのベッドはいずれもふさがっていて、またいずれも患者は女たちだった。じっと寝ている人も、起き上っている人もあったが、どの人も表情を失っているように見えた。めいめいの退屈や不安などによってであるにちがいなかった。そのとき傍のベッドの附添いに来ているらしい四十すぎの女が、ふいに私へいった。

「笠城さんは退院ですか？」

私は、その必要もないのにどぎまぎしながら答えた。

「ええ」

「いい人ですね、笠城さんは」と女はいった。

いい人だといった女の意味はわからなかった。だが、私は、やはりただどぎまぎしながら笑って見せていただけだった。私と彼女との関係が、私自身にやはりはっきりしていなかったので、彼女と関係のない者として振舞っていいのか、あるいは関係のある者としてなのか、私にわからなかったからである。

婦長におくられて病院を出た。彼女は、貧乏くさいものであったが、青っぽいワンピースにクリーム色のぴかぴかするベルトをしめていた。五月の光が、道一杯に落ちていて、そのなかを彼女は早足で歩いた。一週間前、あのベッドの上でこわれた人形のように、髪をぼさぼさにしながら意識を失っていた女だとは思えないほどなのだ。だが、やがて彼女はふいに立止ると、私へいったのだ。

「何か食べない？　わたしおごるわ」

「おごるって……」と私はとまどった。

「お金ならあるのよ」と彼女はいった、「アパートの人がお見舞に八百円もって来てくれたのよ」

腕時計を見た。十二時をすぎていた。

「おごるおごらないはとにかくとして、どっかへ入りましょう」と私はいった。

その食堂のなかは、広かったが、客はまばらで、テーブルといい店の造作といい、ひなびていて粗末だった。その壁のいたるところに品物と値段を墨で書きなぐった紙がべたべた貼りつけてあって、

たからである。しかも五千円もの金は、手許になかっただけでなく貯金を郵便局からおろそうにも、今日は日曜日だったのだ。

教会員の誰かが私に話しかけて来たようだった。だが混乱していた私は、それが誰であるかも見もしないで、逃げるように歩き出していたのであった。しかし歩くにつれて私に彼女に対する怒りがこみあげてきた。彼女と何のかかわりかあらんや、といった気持だった。たしかにその私は、自分を失っていた。なぜなら私は乗りつけたことのないタクシーをとめていたからである。全く都電なんかで揺られて行く心の余裕さえ失っていたのであった。

私は、アパートへ着くと、勢よく順子の部屋のドアをあけた。ふいに生ぐさい臭いが鼻を打った。見ると順子は、がらんどうの部屋の真中に敷いた一枚の敷蒲団の上に横になっており、その傍に血のついた脱脂綿が仰々しいほどたくさん投げ出されているのだ。私は思わずたずねた。

「どうしたんです？」

すると彼女は、喘ぎながらも私を軽蔑したようにいった。

「流産よ！」

女が急いで入って来た。いつか階段の上から私をののしった女給風の女だった。それが順子のいった、洋子という女かもしれなかった。彼女は、私を押しのけるようにして、ずかずか上へ上って行くと、枕元へ立ちはだかったまま順子へいった。

「やっと医者をつかまえたわ。小野という会社員のうちで、麻雀してたのよ。日曜の午後は、休診だなんていったって、ほんとにのん気だわ」

私は、ただ度肝を抜かれて立ちつくしていただけだった。するとその洋子というらしい女は、やっと私に気付いたように私を指さすようにして順子へたずねた。

「医者がいなかったら、あんな人のところへ、電話なんかするひまに、どっかの病院へでもかけ込めばよかったのよ」

だが、順子は、痛みにでも耐えているような顔でだまっていた。実際、痛みがあるのかもしれなかったが、しかしまた自分の存在の不幸に耐えているのかもしれなかったのであった。（つづく）

肺

自然に吸入できる

結核直接治療機

岩井式油脂吸入機

米国特許U・S二八七一、八五五号
日本特許二二八、九八三～五号

岩井式油脂吸入機は結核菌の殺菌剤、発育阻止剤ゴマカプリン酸を一粍の一万分の一の極微粒子として肺胞まで到達させ、直接結核菌に作用せしめることによって肺結核を治療する新治療機！

研究所にお出で下されば岩井式吸入機にて浸潤、空洞が数ヵ月毎に萎縮消失し治癒した治療例が数多く保管してありますから、何時でも希望者の無料閲覧相談に応じます。

文献希望者には療養の心得を無料贈呈

横浜市神奈川区旭ケ丘六〇ノ十二
電話(49)一五二四
三四二一

岩井式油脂吸入機株式会社
岩井油脂物療研究所
所長医学博士　田沼息正
発明者　岩井良平

道順＝東横線反町下車松本消防署坂上、横浜駅西口よりバス31にて栗田谷下車

ら突き放されたさもしい自分がやり切れなかったからにちがいなかった。憎んでくれと順子へいい出すなんて全くはずかしいことではないか。私は、愛でなく憎しみであっても、彼女の関心に値する者でもないだけでなく、それ以上に彼女の関心を要求してはならないはずだったのだ。彼女に対して、清浄潔白であるはずだったのである。

だが、順子は、こんな私に関係なく、気持よさそうに銚子をひとりで小さなグラスについではぐいぐいあけていた。そしてまたたく間に銚子をからにすると、目のふちをかすかにそめながら、私のようすをたしかめるように見ていった。

「でも、あんたはいい人よ、おじいさん」

もちろんそんな言葉は私に何のなぐさめになるはずはなかった。しかも私は、まだ五十で、おじいさんといわれる年ではないのだ。私たちは、間もなくその食堂を出た。もちろん金を払ったのは私の方である。都電の停留所は、そこから近かった。そして都電が来たとき、乗ろうともしないでぼんやり立っている私へ彼女は叱りつけるように叫んでいった。

「わたしと一緒に来るんじゃないの、おじいさん！」

「いや」と私は首を振った、「あなたとはこれでお別れですよ、元気でやって行って下さい」

都電は、自動車に追い抜かれながら、交叉点を尻を振るようにしてガタンガタンと去って行った。私は、それをしばらく見送っていた。それから下宿へ帰るために道を二回も横断して行かねばならないなため向うの停留所の方へ歩いて行った。

日曜日。教会には、五十人ほどの人が集っていた。牧師の説教は先月からつづいているマタイ伝の講解だった。まだ五月の半ばだというのに、太った身体にきちんと着ている服が暑くるしいのか、牧師は白いハンカチを出して来ては額の汗をぬぐっていた。私たちの教会では、献金の感謝の後に黙禱がある。私は、その黙禱のなかでこう祈っていたのだ。

『神よ。いつまでもこの私を笑っていて下さい。私は、あなたより愛される仕方は、それよりほかに知らない者なのです』

だが、私が教会を出ようとしたときだった。牧師夫人が、牧師館の方からとび出すようにしてやって来て、私をさがしているようなのだ。私は、何の気もなしに彼女の傍へ行った。すると牧師と対象的にやせているその牧師夫人は、私をあやしむように見ながらいったのだ。

「いま、笠城さんという女の方から電話がありましたのよ」

「教会へ？」

「ええ、お金をすぐ五千円ほどアパートへもって来てほしいといっていましたよ。わたしが斎藤さんをお呼びしますからちょっと待っていて下さいといったら、そういってもらったらわかるのよ、といっていましたわ」それから彼女は腹立たしげにいった、「ぞんざいな口の利き方をなさる女の人なのね」

「すみませんでした」と私は目を伏せながらいった。

しかしその私は、全身に冷汗をびっしょりかいていたのだった。順子が、私の教会をどうして知ったかということよりも、こともあろうに教会へそんな電話をかけてきたということが恥ずかしかったし、牧師夫人から変な目で見られているらしいことが恥ずかしかっ

り神さまを知らない方がこの『月刊キリスト』により知ってくださることと確信してあきらめました。これからもながく愛読者として学んでまいりたいと思います。また貴誌により、家族をはじめ友にもすすめ、伝道をしてまいりたいと願っています。
（東京都・八王子市・伊藤由和子・学生・18才）

慰められ励まされ

主の御導きのもとに、『月刊キリスト』を拝読させていただきましてより一カ年、もはやくれんとするのでございますが、忙しい農仕事に追われておりますとき、手にする『月刊キリスト』によって慰められ励まされておりまして、誠に感謝いたしております。そして教えられますことは、主エスさまに導かれ従ってまいります人は、どんなときにも望みを失わないと思うのでございます。それは主がご誠実なお方であることを信じておりますため、そして必ず祈りに答えたまい、慰めたもうあわれみ深き生命の与え主でありたもうからでございまして、十字架上に尊き血を流し、贖い完全なる救いを与えてくださいましたことを信じておりますゆえに、多くの信徒は、よく堪えて戦い、勝利のあかしを目のあたりに見まして、ますます主をあがめまつるのでございます。
（北海道・雨竜郡・溝口そよ子・農業）

文通の会を作ろう

組織的な文通の会を作りましょう。

すなおにみことばを受け入れることのできる人は幸せですが、最近のように、反キリスト教的出版物もたくさんある今日、若いわたしどもはたいへん迷います。とくにニヒリズム的に傾いていくと、その人の人生はあっても、終ったと同じようになってしまうのではないでしょうか。健全な思想を身につけるため、兄弟のようにドライに柔和に、互いに牽制できれば最も有効であると考えます。

方法は機関紙を発行して、各会員から送られる、証し、問題、経験談、詩、書評、映画評、その他などを原文のまま、筆者の住所、氏名とともに、わたしが印刷して各会員に郵送いたします（無料）ので、それを見て各個人同志で文通されても良いし、また他の人に貸してあげたい本がある場合や、本人が小説を書いた場合、機関紙の利用により、直ちに読まれたい人と、読みたい人々の住所氏名が互にわかるので、たくさんの人々の意見が文通するわけです。全国に友を持つことは興味深くもあり、会の発展状況によっては、地方別に会員が集会を持つ機会を作り、できれば各人の協力により積極的に伝道をしたいと計画しておりますので、できるだけたくさんの人が入会されるよう希望いたします。詳細問い合わせおよび入会希望者は、住所、氏名、年令を連絡ください。会員住所録を機関紙第一号に載せる日の早くくることを望みます。
（日立市・日立製作所滑川第一寮三一一号・細田仁・会社員・22才）

文通で友を得て

貴誌『月刊キリスト』に深く感謝しております。とかく商業主義に徹して、いたずらに人々を混迷の中に追いやるような諸誌がある中で、『月刊キリスト』をみることはなんと大きな歓喜であり、勇気を得ることでしょう。この小さな力は人間の精神文化の形成に大きな貢献を約束するでありましょう。実は貴誌が『月刊キリスト』と改名したときに、いささかなるとまどいを、禁じえませんでした。そのあまりにもだいたんさのために、しかしそれは誤りではありませんでした。

この欄を通じてわたしはいま、善きひとりの友を得ることができました。互いに多忙な生活の中にペンを取る時間を持つことができたのです。読者である多くの兄弟姉妹たちが単に、愛読者ということではなく常に愛しあう心のもとで、かたく結ばれましたらどんなに幸福なことでしょうか。そうして、その小さな喜びが円を描きますます拡大してゆくならば、みむねにきっとかなうことでしょう。
（東京都・足立区・長谷拓造・24才）

ニューヨークにて

毎月『月刊キリスト』を読ませていただき諸先生および読者の証しをほんとうに深く教えられて感謝いたします。ことに、二月号の「無医村に生きる道具」を読んで、まだ日本にこのような不幸な村のありますこと、驚き悲しく思います。神さまのご守護をお祈りしております。この『月刊キリスト』が多くの日本国内、ことに教会のなき所の人々にも与えられましたら、どんによき伝道になることでございましょう。

わたしは老寡婦で、目下娘宅の一室を借りて余生を送っています。子供たちはそれぞれ独立いたしましたことは感謝でございますが人間として貧しくとも、子供たちの幼いときはともに住み楽しく暮してきましたが、今は一人残されたような立場で、時折は遠くはなれております子供たちが懐しく寂しい思いもいたします。この際御祭を読ませていただきいろいろと祖国の不幸な人々のことを祈りつつ、感謝いたしております。一昨年機会がありましたので訪日いたしましたが日本の気候がわたしにあわず、持病の喘息が再発いたし早々帰米いたしました。四〇年ぶりの訪日で希望にみちて祖国の土をふみ、名所古蹟を見物する楽しみも病気のために中止し帰米しましたが、今なお名残り惜しい気持ちでございます。つくづくと感じましたことはクリスチャンの少ないことです。少々失望いたしました。まだいろいろの宗教のありますのは驚きました。いつか日本国もよきキリスト教国になるときを信じて祈っております。
（アメリカ・ニューヨーク州・野村君野）

東京 日比谷公園前に
新本店が
開店いたし
ました！
なお日本橋三越となり
の由緒ある旧本店は
東京支店となりました
明るい銀行
三井銀行

読者の声

★ご投稿を歓迎します。
★薄謝を呈上します。
★住所、氏名、職業、年令をご明記ください。

点字訳の『月刊キリスト』を

編集部の皆さまには、主のご用のために日夜尊いご献身を続けておられますことを、陰ながらお喜び申し上げております。さて、わたしは昨年八月最終判決によって刑が確定し、まもなく、東京都足立区柳原町北千住教会員和田操姉に導かれて、今日に至っております愚かな一死刑囚です。和田操姉は「死刑囚に励まされて」という証しを、貴誌（昨年九月号）に寄せられました。わたしはその和田姉に励まされて、絶望と暗黒の中から、光を見出してまいりました。

病身な和田姉が、教会奉仕のかたわら、あまり豊かでもない生活の中より物心両面にわたって与えてくださったご真情の数々は、枚挙にいとまがないくらいであります。

また、そういったことから貴誌を引続き愛読させていただくようになりました。毎号すばらしいお導きのうちに幾多の新しい恵みを与えられ、たいへん幸せに存じております。

これらの、はかりしれない主のお導き、お恵みを感謝して、貴誌四月号を点訳、製本の上、去る四月二八日、貴編集部あてお送り申し上げました。紙数の関係で、二冊に分けて製本しております。まことに些少なものではございますが、少しでもお役に立てていただければ幸甚に存じます。

（福岡市・西新町・二宮邦彦）

二宮さんのご好意で、『月刊キリスト』4月号の点訳書が完成、今、編集部に届いています。思いがけないことで、驚いたり喜んだりしています。盲人のかたがたにお貸しいたしますから、希望のかたは、お申し出でください。

（編集部）

生長の家とキリスト教

——大塚さんに反対する——

五月号、本欄において、「谷口雅春氏に対して、生長の家は何を説いているかも知らずこの尊敬すべき師を無視しようという読者の多いのにはあきれる」というご意見が掲載されているのを読み、キリスト者としてたいへんおどろきました。生長の家教団は、日本で有数の宗教団体であることは十分、認める価値があるでしょう。しかし彼らの言っていることを、もっとよく追求しなければなりません。彼らの言っていることの例をとると次のようになります。

一、仏の奥に、キリストの奥に、一切束縛限定のない一つの神、高天原神、即ち生長の家の神を認める。

二、人は神の子であり、神そのものである。

このような教理をみても、生長の家教団が何を言わんとしているかは明らかでしょう。ですから、このようなことを、思想の根底にもつ谷口氏の著書を認めないのは当然であります。聖書講義は、だれがしてもよいけれども、その根底として、全知全能のエホバの神を認めねば、その講義は無価値にひとしくまたはそれ以下でしかありません。それは害多くして益なきものといっても過言ではない。

（茨城県・猿島郡・中山亜三・学生・17才）

五月号の本欄へ国家主義は悪いか〉に目を通しながら、この人はなにか考えちがいをしていなさると思った。

キリスト教自体にまだふれてまもない人でもあろうか。

〈『月刊キリスト』は決してキリストによろこばれまい〉などと、大言なさっても、こうした甘さには追いつけない、ずいぶん勝手な論理を出しておられる思いがする。

それと、もう一つこの谷口論者は、キリスト教と生長の家をいっしょにして考えておられるということである。これは二つの区別された思想であると、はっきり申しあげたい。キリスト教が生長の家にも通じるというのであったら、わたしはもっと早くキリスト・イエスの存在を知っていたろうことを、はっきり言っておこうと思う。

（山口県・都濃郡・国兼浩子・商業・21才）

キリストに連なる人間愛

昨年のなかばから『月刊キリスト』を読ませていただいており、毎号楽しみに待っているひとりです。わたしは、一昨年来、病気にかかり、迷いのなかから聖書を読むようになりました。まだ、仕事に復したとはいえ、健康がすぐれず医者通いをしておるわけですが今年こそ、信仰を強め、洗礼を受けたいと思っておる求道者です。近くの教会に通っているうちに友を与えられ、キリスト新聞を与えられ、そして『月刊キリスト』を与えられました。年令的にみて佐古先生のキリストの愛に連なる人間愛についての講義はまことに接するに泉のようであります。自分自身の心の貧しさが、はっきりとわかってまいりました。これからも、いっしょうけんめいに求道の信念をもやし、りっぱなクリスチャンになりたいと思います。ここに『月刊キリスト』に対して、心からの感謝を申しあげるとともに、今後ますますご指導をくださらんことを祈ってやみません。

（群馬県・利根郡・小林徳善）

生きがいある生活を

定時制高校に通う『月刊キリスト』の愛読者です。『月刊キリスト』を手にして五冊目、クリスチャンとしての道を歩むわたしにとって、また時間に制限された生活をするわたしに、少時間内で聖書のみことばをはじめ、多くの事柄が学べますこと、感謝しています。

今から一年余り前には、神さまイエス・キリストの御名は知っていても、果してそれがわたしに良い道であるのか、ほんとうに救われ、生きがいのある生活ができるかもわかりませんでした。それが五カ月で救いを受けることもでき、その上昨年の暮らはこの『月刊キリスト』により、自分の生活はくるしくともまだまだ苦しい生活を営む方々が多く、その人々のために多くの方々が、神さまの御指示により働いてくださっていますこと、感謝です。わたしは、二月号をちょっとしたことで、どこかへ置きわすれたことがありました。気がついて探しましたが、今だに出てまいりません。ほんとうに残念でなりませんでした。でもわたしの代わりに、拾った方がどこかで読んでくださっていることと思い、わたしよ

お知らせ

「月刊キリスト」発行所

今月号から六〇円に

まことに残念なお知らせをしなければなりません。と申しますのは、今月号から、どうしても誌代を六〇円にしないとやっていけないのです。じつは、すでに、五月号が、かなりの赤字なのです。なんとかして、この値上げブームにさからって、今までの定価を守っていきたいと努力したのですが、ページを減らしても、表紙の色刷りをやめても、どうしても、やっていけなくなったのです。

これは、印刷費、紙代の値上がり、人件費の値上がり、運賃の値上がり、近く実施される郵便料金の値上げなどから、しわよせされて生じてきたものです。

愛読者の皆さまも、きっと周囲の値上げ攻勢に悩まされておられることと思います。そのようなときに、たとい一〇円でも、ご負担を多くすることは、心苦しいのですが、なんとか、この雑誌を続けていくために、また、少しでも、内容が良くなり、多くの人に読まれるために、お許しねがいたいと思います。

予約購読の方は

半年360円・一年700円に

したがって、予約購読については、今までの半年三〇〇円（送料共）、一年五五〇円（送料共）、を**半年三六〇円**（送料共）、**一年七〇〇円**（送料共）とさせていただきます。

しかし、とくべつに、五月三一日までの予約申しこみ（前金）は旧料金で、お取りあつかいいたします。五月号で前金が切れたかたはもとより、五月以後に前金が切れるかたも、**五月中に前金**でお申しこみになれば、**一年五五〇円**、**半年三〇〇円**です。

このサービスは、教文館、聖文舎、日曜世界社などのキリスト教専門書店または本誌発行所で行なっております。

ご送金について

ご送金は、今まで、現金を封入してくださるかたが多うございましたが、七月から、現金を封入することを郵政省で許さなくなりますので、七月以後のご送金はなるべく振替でお送りください。お忙しくて、郵便局へ行けないかたは、一〇円切手で、ご送金くださってもかまいません。しかし、なるべく、振替か、カワセか、現金封筒をおつかいください。

いずれの場合も、本誌におりこんである振替用紙のうらの申しこみ書にご記入の上、ご送金なさると便利です。

編集後記

◇四月末から五月初めにかけて、東京では、さまざまの集会が開かれました。

4月20日　キリスト新聞15周年記念会、賀川豊彦召天一周年記念会。

4月21日　東京都議会文教委員会でクルーセードが都体育館を使用することの可否が論じられた。

4月22日　有楽町・読売ホールで、内村鑑三生誕百年記念講演会。

4月23日　東京YWCAで、キリスト者平和の会10周年記念映画会。

4月24日　信教の自由を守る講演会が、銀座教会で開かれた。

4月25日　青山学院校友会館で、クルーセード主催者側と反対者側との懇談会が開かれた。

4月27日　大阪聖書協会ビル落成式

大阪キリスト教書店開店記念感謝会。

4月29日　京都、兵庫キリスト者平和の会は、クルーセード反対声明を発表。

5月1日　メーデーに、初めて、キリスト者平和の会が団体として参加した。

5月5日　憲法擁護国民連合記念会に、有志キリスト者参加。

5月6日　東京・クリスチャン・クルーセード、はじまる。

◇ことに、クルーセードをめぐる賛否両論の論戦は、激烈でした。来月号では、日本の伝道に、クルーセードがプラスになるか、マイナスになるか、考えてみたいと思います。

◇今月から、いよいよ、高木幹太先生の「恋愛論」がはじまりました。今までにない、新しい、本格的な恋愛論としてご期待ください。恋愛だけでなく、男、女、友情、愛、性などの問題について、深く掘りさげて書いてくださるそうです。

◇「読者の証し」欄も新設しました。どしどしご投稿くださるようお願いします。どんなに小さなことでもまた文章がつたなくても、信仰生活の記録であれば、歓迎いたします。

◇愛読者カードを5月号にはさみこみましたが、現在約二〇〇通、ご返送いただいています。まだのかたはどうか、ご意見をご記入の上、お送りくださいますようお願いいたします。

◇先月お知らせ申し上げましたように、今月から、一〇円、値上げさせていただきます。じつに残念なのですが、現状では、どうすることもできないので、なんとかご容赦願いたいと思います。

7月号・予告

〈信仰に生きる7〉
親のない子よ、みんなおいで
——タクシー運転手の悲願——
〈わが信仰の生涯〉
父軍平の遺志をついで　（救世軍書記長官）　**山室　民子**
〈伝道説教〉（常盤台バプテスト教会牧師）　**松村　秀一**
〈巻頭随想〉
中川秀恭、山崎孝子、善野碩之助
〈読者の証し〉
親に愛されぬ子として　中沢三千子
〈恋愛論・2〉
男性の魅力　高木　幹太
〔現代のカルテ〕
宇宙時代　高戸　要
レジャー・ブーム　伊藤　義清
セブンティーン　原田　高
アイヒマン裁判　安藤　肇
〈社会を見る目〉
農業基本法をどう見る
クルーセードと日本の伝道　小野　一郎
〈書評〉
神はあるか　島村　亀鶴
讃美の泉　津川　主一
〈生きる意味について〉
連帯的人間　佐古純一郎
〈小説〉
夜警番の日記　椎名　麟三

月刊キリスト

昭和三六年五月二五日　印刷
昭和三六年六月一日　発行

編集人　高戸　要
発行人　浜崎次郎
発行所　日本基督教協議会
文書事業部
東京都中央区銀座四ノ二
振替口座・東京一一六七九
電話(561)六一三一・八四四六

発売所　教文館
東京都中央区銀座四ノ二

毎日新聞社販売店
東京都中央区有楽町一ノ二

印刷所　株式会社恒陽社印刷所

直接、ご購読になりたいかたは、発行所まで、お申しこみください。
（五月末までは従来通り）
一部　六〇円（〒四円）
半年　三六〇円（〒共）
一年　七〇〇円（〒共）
二部（海外）

セレン・シリコン整流器
スポット溶接機・プラスチック塗料

Origin オリジン電気株式會社

社　長　後藤安太郎

東京都豊島区高田南町1－195
(982)　1161(代)

OJI PAPER CO., LTD.

王子製紙

本社　東京 銀座　工場　北海道 苫小牧市・愛知県 春日井市

キリスト教と文学の会

主催 日本基督教協議会・文書事業部
たねの会

日時　1961年7月19日(水)—21日(金)

場所　長野県中軽井沢　星野温泉

◇主題　**文学入門**

◇会長　(鳥居坂教会牧師)　浜崎次郎

◇講演　「小説の技術」　(作家)　椎名麟三

「評論の技術」　(文芸評論家)　佐古純一郎

「ドラマの技術」　(劇作家)　高見沢潤子

「文学とは何か」　(金城短大学長)　柳田知常

◇指導　小説、評論、ドラマのグループにわかれ、テキストにより、実作の指導をいたします。あらかじめ作品を6月末までにお送りになれば批評をしてさしあげます。

◇参加者　60名(先着順)キリスト者または求道者

◇費用　2,000円(宿泊料(2泊6食)1,500円・テキスト代・聴講料500円)

◇申込方法　申込用紙を添えて、7月10日までに日本基督教協議会・文書事業部(東京都中央区銀座4の2)振替東京11679までお申しこみください。

◇持参品　聖書・讃美歌・筆記用具・洗面具など

……(きりとり線)……

申込用紙　　年　月　日

フリガナ 氏名		男・女	年令		職業	
住所			教会名		
希望グループ	小説・評論・ドラマ		送金方法	現金書留・振替・為替	
備考					

KIRISUTO The Christian Home Journal.
Vol. 13. No. 6 June 1961
Japan Commission on Christian Literature Tokyo

昭和二十四年一月三日 第三種郵便物認可
昭和三十六年六月一日発行(毎月一回一日発行)

信徒みんなで読み合う聖書研究誌

聖書の世界

五月号内容

今月の聖書研究 教会の誕生
(1) 一同は聖霊にみたされ 行伝二・一―四二 新見宏
(2) 聖霊と教会
(3) イエスは主である 赤木善光
(4) 教会への誕生〈座談会〉 菊池吉弥 佐伯洋一郎外
〈対談〉教会における婦人の地位 室野玄一 橋本ナホ
〈連載〉ヨブ記研究 浅野順一
使徒行伝 竹森満佐一

▼教会内各グループの聖書研究のテキストです。
▼牧師の指導により、本誌によって、計画性ある聖書研究が行なわれます。
▼誠実な聖書研究の伴侶として唯一の月刊誌です。
▼新制中学校卒業生なら十分読めるやさしい表現です。

四月号より増頁
定価 五十円 〒四円

お詫び
四月号増刷しましたが品切れのため御迷惑をかけました。御注文は書店又は直接御予約下さい。

月刊 キリスト
六月号
定価 六〇円

NCC文書事業部

松木治三郎著

人間

その運命と愛をめぐって

最新刊

人生のさまざまな問題、運命、愛、自由などについて、若き日にどう考えるべきか、神と人間の関係が解かれなければ、この解決はないと信ずる著者が、自己の人生体験、信仰体験を語りつつ平易に、書きおろした本書は、今日の若い人達の心情に訴える清新な、奥行のある人生案内の書として出色のものである。読者は本書によって、人間として生きる目標と意味を明らかにされるであろう。

新書判 二〇〇円 〒一六円

黒田平治著

キリストの足音

最新刊

彼はこの前年ごろから、ストマイの反応で全く聴覚を失っていた。しかも瞑想録は単なる神秘主義的なものでなく、神の言をいきいきと聞きながら、この世の問題に対する深い洞察と鋭い批判を示している。―「彼は死んだが、信仰によって今もなお語っている」ということをしみじみと感じさせられる。―

黒田君が聞いた主の足音をひとりでも多くの人が、この書を通して、きくことができるよう祈って世に送るしだいである。

〈序文より〉 大村勇

新書判 二〇〇円 〒一六円

石島三郎・浅野順一・佐古純一郎共著

死と生をめぐって

最新刊

生きとし生けるもの、必ず直面させられる死の問題を中心として、またキリストの復活について、自殺について、日本人の死生観、著者おのおのそれをば率直に語った本書は、小著ながら深く心にふれるものである。

新書判 一四〇円 〒一六円

日本基督教団出版部
東京都中央区銀座4の2 振替東京188329
製版・印刷・恒陽社
IBM 2879